

K-628

山形県長井市埋蔵文化財調査報告書 第18集

長者屋敷遺跡 発掘調査報告書

平成12年
遺跡調査会
長井市
長井市教育委員会

正 誤 表

頁	行	誤	正
3	3	昭和 52~56 年	昭和 52~57 年
3	16	(昭和 55 年)	(昭和 55~57 年) 1
10	15	(図版〇)。	(図版 29-1 右上・左下)
14	4	土器 (第 13 図、図版 13)	土器 (第 13・14 図 1~9、図版 13)
14	12	いずれも大木 10 式である。	いずれも大木 10 式である。また、土器内側に漆の付着が認められる土器が出土している (図版 29-1 右端)。
27	18	(図版〇)	(図版 29-1 左上)
40	6	出土したが (図版〇) 時期は不明である	出土し (図版 29-1 右下) 繩文中期末の土器である。

長者屋敷遺跡 発掘調査報告書

平成 12 年
遺 跡 調 査 会
長 井 市
長井市教育委員会



例　　言

1. 本書は、市道長者屋敷線の改良工事に伴う長者屋敷遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 本書の刊行にあたり、平成10年10月12日から11月18日にかけて行われた遺跡確認調査で検出した遺構・遺物も併せて記載し、その内容については本書が優先する。
3. 掘調査期間は平成10年5月11日から平成10年7月15日までである。
4. 調査体制は次のとおりである。

調査主体 長井市教育委員会

調査担当 遺跡調査会 会長 佐藤太兵衛

調査担当者 岩崎義信（長井市教育委員会文化課主査）

調査参加者 青木 勇、梅津麻衣子、金子小作、荒生喜一、川崎世津子、工藤恵子、佐藤太兵衛、

斎藤 勤、孫田邦夫、孫田長市、孫田弥太郎、高野昭司

資料整理 梅津麻衣子、工藤恵子、荒生喜一

事務局 事務局長 清谷源一郎（長井市教育委員会文化課長）

事務局長補佐 村上和雄（長井市教育委員会文化課補佐）

事務局員 岩崎義信（長井市教育委員会文化課主査）

事務局員 神尾昭利（長井市教育委員会文化課主任）

5. 発掘調査・報告書作成にあたっては次の方々からご指導・ご協力をいただいた。（敬称略、順不同）岡村道雄（文化庁主任文化財調査官）、宮本長二郎（東北芸術工科大学教授）、名和達朗・渋谷孝雄（山形県教育庁文化財課）、手塚 孝（米沢市教育委員会）、尾形真夫（前古代の丘資料館長）文化庁、山形県教育文化財課、長者屋敷遺跡保存会、長井市建設課、長井市古代の丘資料館
6. 漆資料の分析は永嶋正春氏（国立歴史民俗博物館）、半蔵木柱遺構の土層転写は松田泰典氏・松井敏也氏（東北芸術工科大学）によるものである。また、半蔵木柱遺構の炭化物分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
7. 本書に掲載した遺構・遺物挿図の縮尺は次のとおりである。
【遺構】 住居跡1/60、堀設土器1/20、半蔵木柱遺構1/40、土坑1/40、ピット群1/50、集石1/20・1/40
【遺物】 土器1/3・1/4、石器1/2・1/3・1/4
8. 本書の編集・執筆は岩崎義信が担当し、拓本は安部義彦古代の丘資料館長の協力を、遺物実測・挿図・図版作成にあたっては荒生喜一の補助を得た。

序

長者屋敷遺跡の発掘調査は昭和52年8月、真夏の暑い日ざしのなか故佐藤正四郎先生の指導で開始されたのが始まりと聞き及んでおります。調査では縄文時代の块状耳飾りや弥生時代のお墓跡など学術的に見ても貴重な発見がありました。その後、遺跡保護の立場から体験施設の設置など、利活用面にも重点をおいた遺跡公園づくりが計画され、平成5年7月、長者屋敷遺跡は古代の丘の中核として生まれ変わりました。

このたびの発掘調査は、市道改良工事に伴うもので調査面積も少ないものでしたが、山形県で初めて半截木柱遺構という4本柱の跡が見つかりました。柱の太さや設置された場所から縄文時代における集落のありかたに一石を投じる発見といつても過言ではありません。そのため遺跡の取扱いについて、市当局と関係機関のご理解とご協力をいただき遺跡は現状で保存されることになりました。

今後は遺跡の保護・活用に努めながら、長井市の新たな歴史資料として四本柱の復元構想に取り組んでまいりたいと計画しております。

最後になりましたが、炎天下のなか発掘調査に参加くださいました方々、ならびにご協力を賜りました関係機関の方々に対し、心より感謝申し上げます。

平成12年3月

長井市教育委員会

教育長 竹田辰雄

目 次

例 言

第Ⅰ章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	1
第Ⅱ章 遺跡の概要	2
第1節 立地と環境	2
第2節 調査のあゆみ	3
第Ⅲ章 発見された遺構と出土遺物	5
第1節 壁穴住居跡	5
第2節 埋設土器	28
第3節 半截木柱遺構	30
第4節 土坑とピット群	35
第5節 集 石	45
第6節 包含層出土遺物	49
第Ⅳ章 ま と め	57
長者屋敷遺跡出土漆関係資料について	58
半截木柱遺構から出土した炭化材の年代と樹種	61
報告書抄録	巻末

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	2	第26図 23号住居跡	27
第2図 遺跡概要図	3	第27図 1~4号煙袋土器	28
第3図 調査概要図	4	第28図 1~4号煙袋土器実測図	29
第4図 遺構配置図	6	第29図 半截木柱遺構	30
第5図 17号住居跡	7	第30図 1号半截木柱遺構	31
第6図 17号住居跡出土土器	7	第31図 2号半截木柱遺構	32
第7図 17号住居跡出土石器	8	第32図 3号半截木柱遺構	33
第8図 18号住居跡	9	第33図 4号半截木柱遺構	34
第9図 18号住居跡複式炉	10	第34図 1~7号土坑	37
第10図 18号住居跡出土土器	11	第35図 8~16号土坑	38
第11図 18号住居跡出土石器	12	第36図 17~22号土坑・ピット群	39
第12図 19号住居跡及び同複式炉	13	第37図 土坑出土遺物(1)	41
第13図 19号住居跡複式炉出土土器	14	第38図 土坑出土遺物(2)	42
第14図 19号住居跡出土遺物	15	第39図 土坑出土遺物(3)	43
第15図 20号住居跡	16	第40図 土坑出土遺物(4)	44
第16図 20号住居跡出土遺物	17	第41図 1~4号集石	45
第17図 21号住居跡	18	第42図 集石(1)	46
第18図 21号住居跡出土土器	19	第43図 1号集石出土遺物	46
第19図 22号住居跡	20	第44図 集石(2)	47
第20図 22号住居跡複式炉	21	第45図 包含層出土土器(1)	51
第21図 22号住居跡出土土器(1)	22	第46図 包含層出土土器(2)	52
第22図 22号住居跡出土土器(2)	23	第47図 包含層出土土器(3)	53
第23図 22号住居跡出土土器(3)	24	第48図 包含層出土土器(1)	54
第24図 22号住居跡出土土器(4)	25	第49図 包含層出土土器(2)	55
第25図 22号住居跡出土石器	26	第50図 包含層出土石器(3)	56

表 目 次

表1 土坑・ピット計測表	35	表2 土坑・ピット計測表	36
--------------------	----	--------------------	----

図版目次

図版1	遺跡近景（南西から）	A-C-7・8 グリッド集石（西から）
	遺跡近景（北から）	
図版2	17号住居跡全景（南西から）	図版11 17・18号住居跡出土遺物
	18号住居跡全景（東から）	図版12 18号住居跡出土遺物
図版3	18号住居跡複式炉（北から）	図版13 19号住居跡出土遺物
	18号住居跡複式炉埋設土器	図版14 20・21号住居跡出土遺物
	19号住居跡全景（北西から）	図版15 22号住居跡出土遺物(1)
	19号住居跡複式炉（北から）	図版16 22号住居跡出土遺物(2)
	19号住居跡複式炉埋設土器	図版17 22号住居跡出土遺物(3)
図版4	20号住居跡西側（北から）	図版18 22号住居跡出土遺物(4)
	20号住居跡東側（南から）	図版19 埋設土器
	21号住居跡複式炉（東から）	図版20 1～4号半截木柱遺構出土遺物
	21号住居跡複式炉埋設土器	土坑出土遺物(1)
	21号住居跡全景（南東から）	図版21 土坑出土遺物(2)
図版5	22号住居跡全景（南から）	図版22 土坑出土遺物(3)
	22号住居跡複式炉（西から）	図版23 土坑出土遺物(4)
	22号住居跡複式炉埋設土器	ピット群出土遺物
	23号住居跡炉跡（南から）	集石出土遺物
	1号埋設土器（南から）	図版24 包含層出土遺物(1)
図版6	1～4号埋設土器	図版25 包含層出土遺物(2)
	1・2号半截木柱遺構（南から）	図版26 包含層出土遺物(3)
図版7	1・2号半截木柱遺構	図版27 包含層出土遺物(4)
図版8	3・4号半截木柱遺構	図版28 包含層出土遺物(5)
図版9	1～6、10～14、16号土坑	図版29 漆(1)
図版10	17・20・21号土坑、1～4号集石、	図版30 漆(2)
		図版31 炭化材

第Ⅰ章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

長者屋敷遺跡周辺は、以前から土器や石器が採集されるところとして知られていたが、基盤整備事業の構想により昭和52年から56年にかけて発掘調査が行われ、旧石器時代から縄文時代、弥生時代にかけての複合遺跡であることが判明した。なかでも縄文時代中期後葉の住居跡をはじめ多数の遺構が検出され、出土品には旧石器時代の杉久保型ナイフ形石器、縄文時代の块状耳飾りや漆塗りの容器、弥生時代の墳墓から出土した漆塗膜片等、考古学上貴重な発見があった。このため調査終了の後、遺跡の保存活用の目的から埋め戻しを行い、縄文中期の住居跡の真上に竪穴住居4棟を復元し、現在は古代の丘遺跡公園として親しまれている。

平成8年に市道改良工事が計画され、遺跡の西端が道路予定区域に含まれることから、工事が遺跡に及ぼす影響をみるために平成9年に事前調査を実施した。工事予定範囲を中心に試掘調査を行ったところ、基盤整備や耕作等で調査区中央部が削平されているものの、遺跡の遺存状況は良好で多数の土器や石器が出土し、礫の密集区域が隨所で確認され縄文時代の集石群の可能性が強まった。このため市建設課と遺跡の保護について協議を重ねたところ、工事で遺跡の破壊が予想される750m²の範囲を緊急発掘調査による記録保存の措置となった。これをうけて、長井市教育委員会が主体となり長者屋敷遺跡保存会を母体とし遺跡調査会を発足し、長井市の委託を受け緊急発掘調査を行ったものである。

第2節 調査の方法と経過

試掘調査の結果から、調査区南と北側が30~50cmと地山層まで深いのに比べ、中央部が15~20cmと浅く、馬の背状の台地の尾根筋が基盤整備で削平を受けたためと考えられる。そのため耕作土の表土層から遺構検出面までをスコップを用い手掘り作業とした。調査は4×4mのグリッド方式を採用し、東西方向をX軸とし東から西に向けてAからE区とし、南北方向をY軸としZ軸と直行させ北から南に向けて1から11区を設定した（第4図）。調査期間は平成10年5月13日から7月15日までの日程で調査を行った。

特筆すべき事項として縄文中期集落の広場の北西部において、4本柱の痕跡が確認されたことである。柱は朽ちて検出されなかったが遺構の平面と断面観察から柱の痕跡を確認した。しかも柱痕は縱割りした柱を用いた所謂半截木柱遺構で、柱の直径は推定で50~80cm、それぞれ正方形の四隅に配置され、柱の中心から中心までの距離はほぼ3.5mを測る。

山形県では初めてという半截木柱遺構の発見で長者屋敷遺跡の重要性が再認識されることとなり、地元を中心に遺跡保存の機運は一気に高まることから、市当局並びに関係機関の理解をいただき市道は迂回されることとなり、遺跡は現状保存されることになった。また8月26日、文化庁の岡村道雄氏から半截木柱遺構は青森県の三内丸山遺跡のように6本柱の可能性もあると現地指導を受け、緊急発掘調査予定区域の東側について遺跡範囲確認調査の目的から、平成10年度の国庫補助事業である市内遺跡発掘調査の一環として10月12日~11月18日にかけて発掘調査を実施し半截木柱遺構の検出にあたった。しかし、新たな木柱遺構は検出されなかったが、20号住居跡の東半分と集石数基を検出すると同時に、半截木柱遺構は柱4本で構成された遺構としてとらえることができた。

11月、将来の保護・活用に備え、遺構面に砂を敷き詰めた上に盛土による埋め戻しを行い調査を終了した。

第Ⅱ章 遺跡の概要

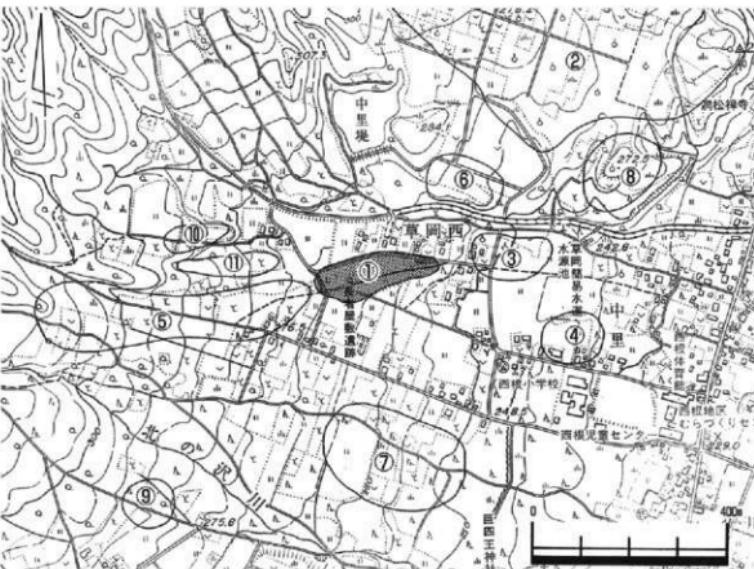
第1節 立地と環境

長者屋敷遺跡は朝日山系のふもと、通称西山山ろくの麓から東に張出した舌状台地に位置し、長井市街地から北西約5kmの地点にあたり標高は約269mを測る。山ろく一帯は昔から土器や石器の出土が伝えられ、昭和57年に実施した分布調査で見つかった遺跡も含めるとその数は45箇所にのぼり、なかでも縄文時代の遺跡が90%を占める。山ろくの地形は西側において急峻な斜面が形成されるが、東に向けて穏やかな傾斜となり、場所によっては断層がつくり出した平坦地もみられる。

長者屋敷遺跡は西から東に張出した舌状台地に広がり北側を久川が、南側約500m離れた地点には北の沢川がそれぞれ東に向て流れている。一帯は桑畠や畑地として利用されてきたが、昭和40年代の基盤整備で遺跡西端部と台地南東部において区画整理がなされているが、昭和53年に実施した第一期調査の報告から推測すると耕作土直下から遺物の出土があり、開墾に伴う擾乱は少なく遺跡は台地一帯に広がりを見せ遺存状況は比較的良好である。

長者屋敷遺跡周辺の平坦地や緩斜面からは土器や石器の出土が伝えられ、遺跡の立地条件を備えた場所が随所に確認されており、特に縄文時代の遺跡が多く存在することが特筆される。

- | | | | |
|-------------|-------------|---------------|----------------|
| ① 長者屋敷遺跡 | ② 新田遺跡（縄文） | ③ 中里遺跡（縄文） | ④ 中里B遺跡（縄文） |
| ⑤ 長者原遺跡（縄文） | ⑥ 西寺山遺跡（縄文） | ⑦ 松山遺跡（縄文） | ⑧ 南寺山遺跡（縄文・平安） |
| ⑨ 道合遺跡（縄文） | ⑩ 煙ヶ沢遺跡（縄文） | ⑪ 長者原B遺跡（旧石器） | |



第1図 遺跡位置図

第2節 調査のあゆみ

長者屋敷遺跡の発掘調査は昭和52年以來、故佐藤正四郎氏によって精力的に実施されたのが始まりである。ここでは昭和52—56年にかけて行われた学術調査を第一期調査、平成10年に実施した市道改良工事に伴う緊急発掘調査を第二期調査と便宜的に呼称することとする。

第一期調査は佐藤氏が中心になり調査したもので調査年ごとに第1～3次調査とし概要は次のとおりである。

第1次調査（昭和52・53年）

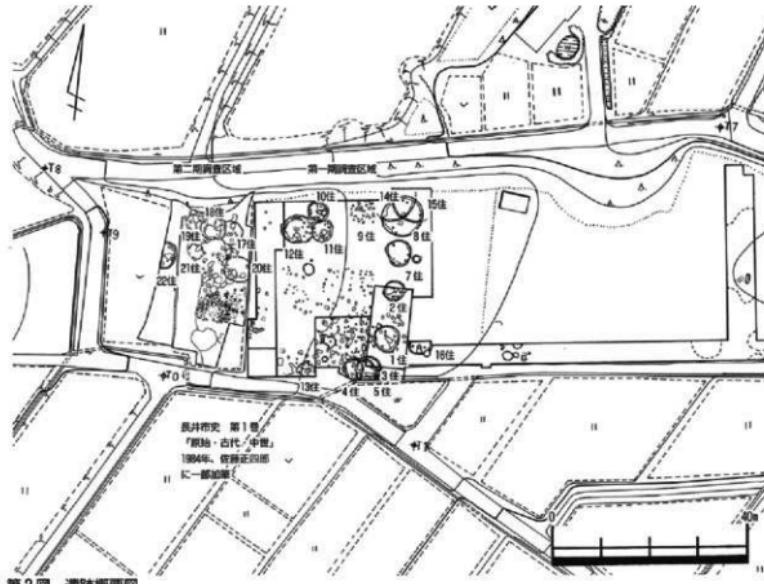
昭和52年に行われた調査で1号住居跡と2号住居跡の一部を検出する。翌昭和53年には国の補助事業として調査が行われ3・4・5号住居跡、焼成遺構1基、貯蔵穴1基、ピット群、土壙、集石遺構が検出された。遺物は縄文中期と晩期の土器が相半ばして出土している。

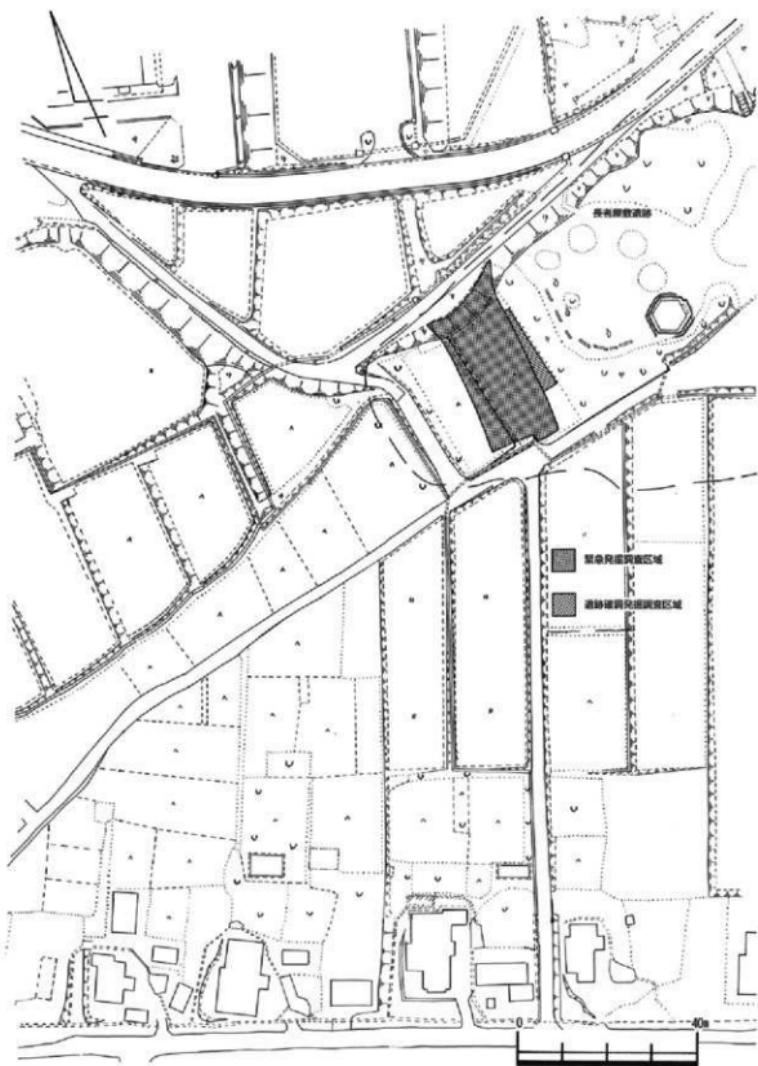
第2次調査（昭和54年）

遺跡の範囲確認を目的とした調査で、幅4～6m、総延長250mのトレンチが台地に設定され調査が行われた。その結果、縄文前期の住居跡1棟（6号住居跡）と土壙墓1基、土壙3基、弥生中期墳墓跡2基、集石が検出された。遺物は縄文中期と晩期の遺物が主体であるが、土壙墓より縄文前期の弦状耳飾2点、ナイフ形石器2点、弥生中期の土器片とアメリカ形石錐等が出土した。

第3次調査（昭和55年）

2号住居跡、7、9～13号住居跡（以上縄文中期）、8、14、15号住居跡（以上縄文晩期）、集石、土壙、石組炉、盛土遺構が検出された。遺物は縄文中期と晩期の土器石器類が出土している。





第3図 調査概要図

第Ⅲ章 発見された遺構と出土遺物

このたびの調査で長者屋敷遺跡から発見された遺構はほとんどが縄文時代のもので、住居跡7棟、半截木柱遺構4基、埋設土器4基、土坑22基、集石群で、縄文中期に属するものが半数以上を占める。

遺構の検出状況は第一期調査の遺構配置と照らし合わせると集落中央の広場を中心に円弧を描くように住居跡の分布が見られ（第2図）、縄文中期の集落形態として捉えることができる。

また、基本層序は基盤整備で搅乱を受けている箇所もあるが、第3次調査概報の報告と同じく、第Ⅰ層暗茶褐色土20cm、第Ⅱ層暗褐色土15cm、第Ⅲ層黄褐色粘質土と同様の層序を示す。

以下、遺構と遺物について述べてみると、遺跡確認調査で検出した資料もあわせて記載することとし、住居跡に限り第一期調査からの継続番号で表示した。

また、本調査区域の保存が決まったことから、半截木柱遺構は断ち割った状態で調査を行い残りの半分を保存し、集石は一部を除き礫の取り上げを行わず現況のまま保存し将来的調査へ委ねることとした。

第1節 穴住居跡

17号住居跡（第5図、図版2）

位 置 B-1グリッド

重 複 西側で18号住居跡と重複し本住居跡が新しいものである。また、住居跡中央部で2・3号埋設土器と、北側で8号土坑とそれぞれ重複するが本住居跡が古いものである。

形 態 平面形はほぼ円形を呈し、Ⅱ層上面でプランを確認した。南側の床面が階段状を呈し張出し部が見られること、柱穴の配置から主軸方向は東北方向と推測される。床面は地山層を若干掘り込んでかたくしまり、壁は南と北で緩やかに立ち上がる。北壁に沿って浅い落ち込みとピット4基が検出されたが用途は不明である。

規 模 長軸方向 5m × 東西方向推定4.8m。確認面からの深さは中央部で約19cmを測る。

柱 穴 9基のピットが検出されたが、深さや配置からP1-P4の主柱配置と推測され、深さは32~55cmを測る。

炉 跡 検出されなかった。

周 溝 検出されなかった。

覆 土 1は黒褐色土、2aは灰茶褐色で礫を多く含み2bは同質で炭化物を多く含む。3は暗茶褐色土で炭化粒子と褐色土粒子を多く含む。4aは灰黑褐色土で小礫・炭化粒子を多く含み、4bは4aと同質で礫が多く大き目となる。5aは黒褐色土で灰褐色土をブロック状に含み、5bは灰褐色土ブロックが大きくなる。6は灰黑褐色土、7は礫を多く含む灰黑褐色土。8は暗灰褐色土である。

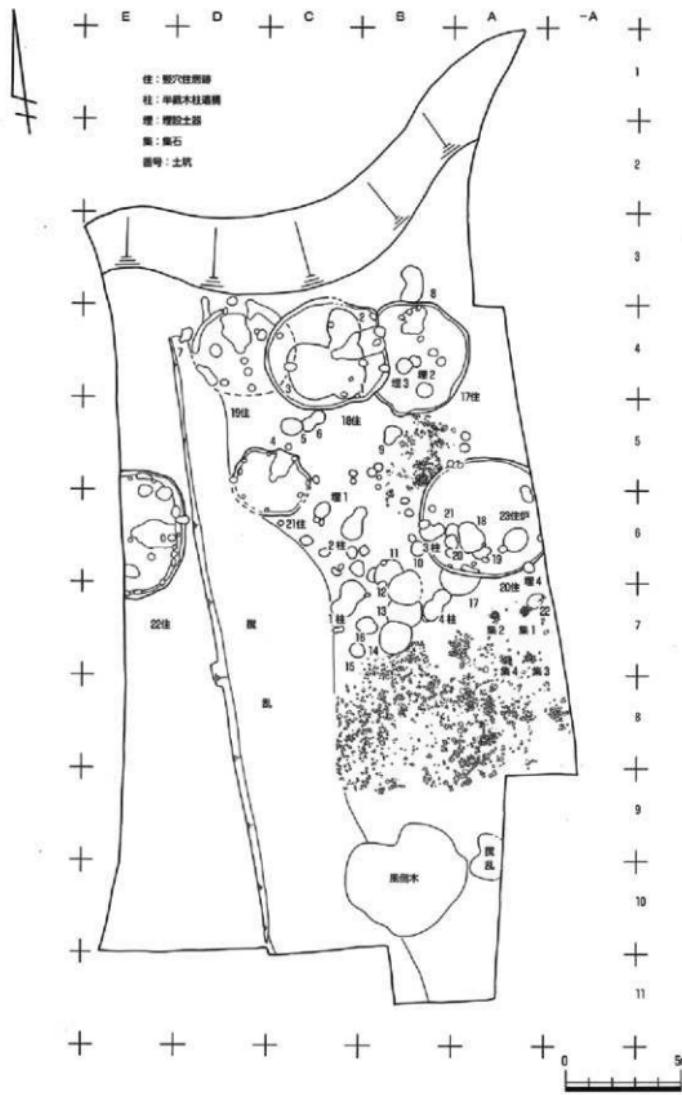
時 期 出土遺物から縄文晩期の可能性が強い。

出土遺物

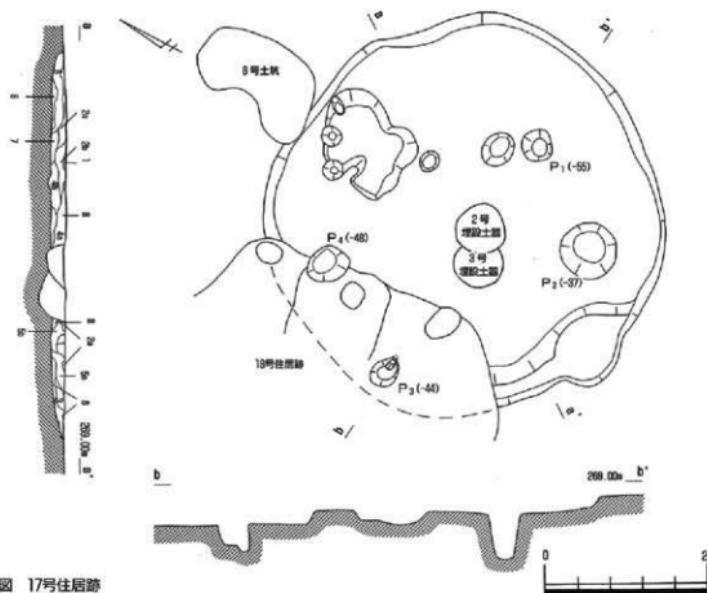
土 器（第6図、図版11）

整理箱にして約半分の量が出土したが、縄文晩期の粗製土器が半数以上の割合を占める。

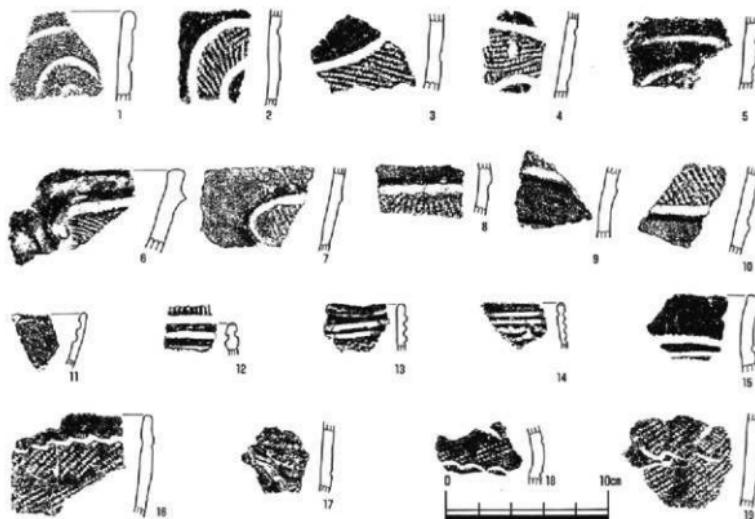
6はP1からの出土で、他は覆土から出土である。1~5は大木10式に比定される土器で、縄文施文部を



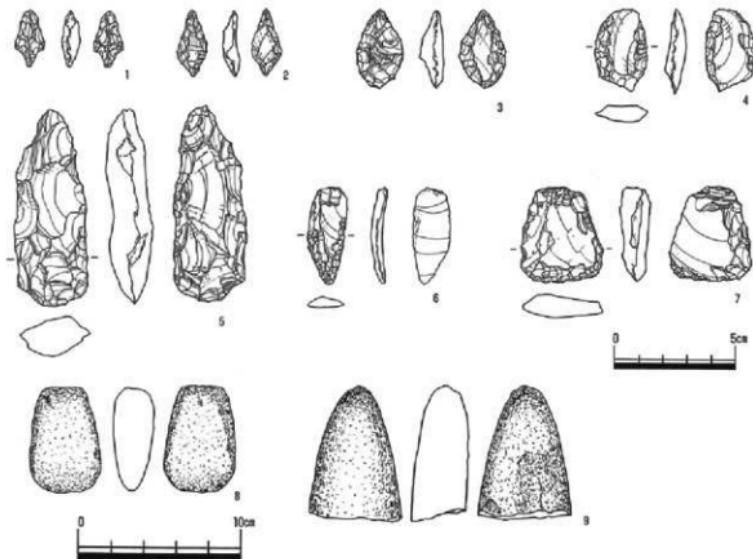
第4図 連携配置図



第5図 17号住居跡



第6図 17号住居跡出土土器



第7図 17号住居跡出土石器

沈線の曲線で区画した文様をもつ土器である。6～10は縄文施文部を沈線と微隆起線で区画した文様をもつ土器で大木10式に比定される。11～19は縄文晩期の土器である。11は口縁の内側に2条の沈線が施される皿、12～15は鉢で口縁部に数条の沈線が巡り、12は口端に刻み目が付けられ、14は「π」字状文が施される。16～19は粗製深鉢である。16・18・19は結節をもつ斜縄文が施される。これらの土器は大洞A式土器に比定される。

石 器（第7図、図版11）

いずれも覆土から出土したもので石鏃3点、削器1点、搔器1点、鏟状石器2点、磨製石斧2点、剥片類114点が出土した。

1・2は有茎石鏃で1は玉髓質、2は頁岩の剥片を素材としている。3は背面に素材の自然面を一部残し厚みのある石器である。4は両側辺に剥離を施した削器、6は剥片の先端に刃部を施した搔器で頁岩の剥片を用いている。5・7は鏟状石器で頁岩を素材とし、5は両面に深い剥離を施し、一端に刃部を形成する。7は両面に素材の剥離痕を大きく残し一端に刃部を作出している。8は小型の磨製石斧で基部とその周辺に敲打痕を残す。9磨製石斧の基部である。

18号住居跡（第8図、図版2）

位 置 C-4 グリッド

重 複 東側で17号住居跡と西側で19号住居跡と重複するが、本住居跡が古い。また、中央部に1～3号土坑と重複するが本住居跡が古い。

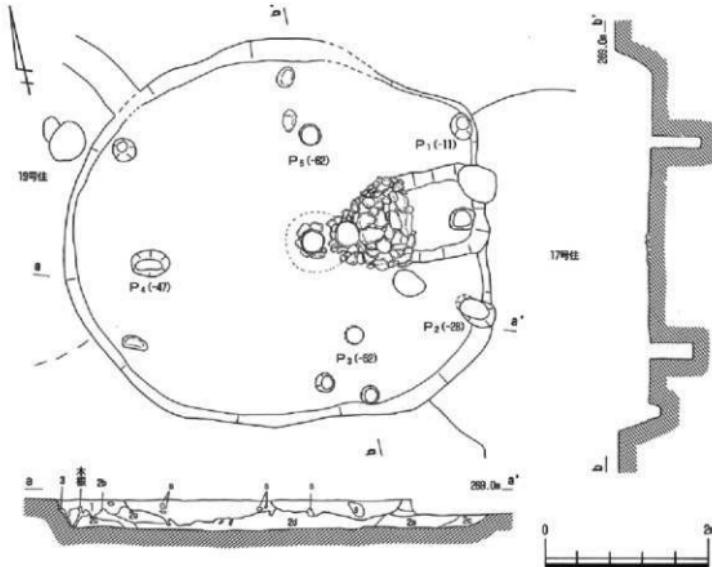
形 態 平面は不整円形を呈し、Ⅲ層上面で平面プランを検出した。北東部で木根による擾乱が見られるが、Ⅲ層を掘り込んだ壁は南側において急角度で立ち上がり床面は平坦でかたくしまり、遺存状況は良好である。

規 模 長軸方向5.24m×南北方向4.7m。確認面からの深さは38cmを測る。

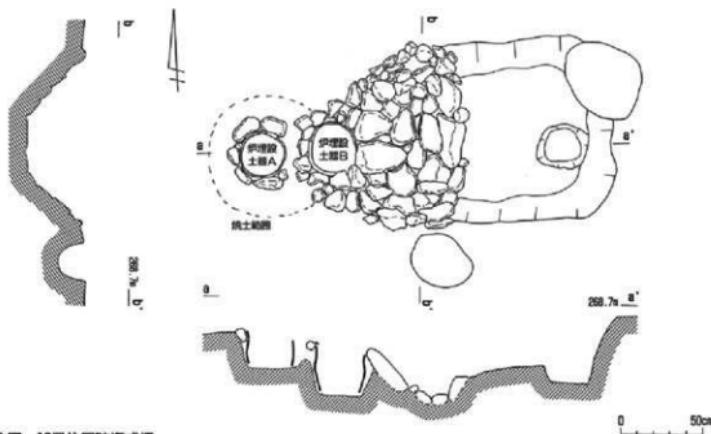
柱 穴 8基のピットが検出された。他の住居跡の柱穴に比べると細くて深いのが特徴である。炉の長軸を線対象として5本主柱穴構造を推測される。

炉 跡（第9図、図版3） 土器埋設部、石組部、前庭部からなる複式炉である。主軸は2.38mで西方向を指し、最大幅は石組部で計測され約1.10mを測る。土器埋設部の礫は平面で見る限り楕円形を呈し平坦面となっているが、横断面は楔形を呈し土中深く埋められ、胴下部を欠く炉埋設土器Aを囲んでいる。石組部の規模は上面において炉主軸方向約1.02m×直行幅1.14mを測り、底面部から埋設土器側および壁面にかけて板状の大型礫を埋め込んでいる。横断面形は逆台形を呈し、床面から底面部までの深さは30cmほどである。前庭部は掘り込みだけで礫は検出されず浅いピットをもつ。土器埋設部、石組部の土器はいずれも胴下半部を欠き正位の状態で出土した。

周 溝 検出されなかった。



第8図 18号住居跡



第9図 18号住居跡複式炉

覆 土 1は暗灰茶褐色土で褐色粒子・炭化粒子を多く含む。2 aは暗灰褐色土で褐色土をブロック状に含みしまりある土質。2 bは2 aに比べるとやや暗い色調で、2 cは2 aより褐色土のブロックも大きく色調が暗く、2 dは前者に比べ褐色土ブロックの混入する割合が最も多い土質。3は暗褐色土で粘質土が強くしまりある土質。

時 期 大木10式

出土遺物

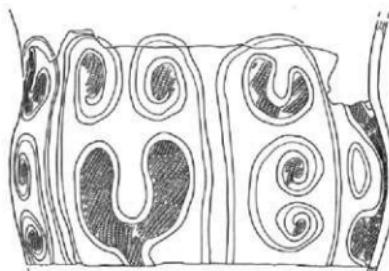
土 器 (第10図、図版11・12)

1は炉埋設土器Aで口縁が外反し、胴部が膨らむ深鉢である。末端に逆巻きの渦文をもつ沈線と倒立した【U】字状文で綫長に区画された体部には、「Y・U・C」字状文や逆巻き渦文が施されている。2は炉埋設土器Bで口縁が外反ぎみに立ちあがり体部がやや膨らみをもつ深鉢である。胴下位の波状沈線を境に胴上半には沈線で区画した「S」字状文が連続して描かれ、胴下半は斜繩文が施される。炉埋設土器A、Bとともに胴下半部を欠いた大木10式土器である。3は文様のない手づくねの小型土器、4は口縁がやや内済し、体部に沈線による「の」字状文が描かれた小型土器で、覆土から出土した。5は胴部にくびれをもつ深鉢、6・7・8・10は縄文施文部を沈線で区画した土器で、9は浅鉢の破片である。いずれも大木10式に比定される。また、内側に漆の付着が認められる土器片も覆土から2点出土している(図版○)。

石 器 (第11図、図版12)

石器は搔器1点、磨石2点、凹石1点、砥石1点、石皿片1点、剥片4点が出土した。

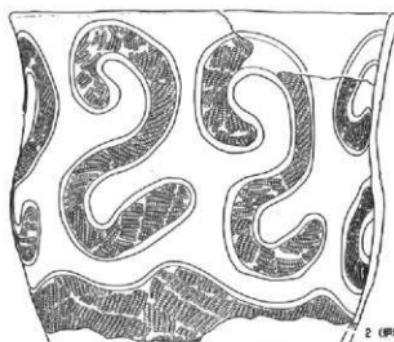
1は頁岩の剥片を素材とし、端部に刃を作出した厚みのある石器である。2・3は両面に磨痕がある磨石、4は磨石を転用した凹石で両面に凹部が見られる。石質は花崗岩。5は大型石皿の破片で凹部のある面には煤状の付着物が認められる。6は楕円形の砂岩標で両面に窪みが認められる。石器中央に三ヶ月状の溝が残つておる、砥石と考えられる。



1 (伊理段土器A)



伊理段土器A長筒(14)



0 10cm

0 5cm



5

6

7

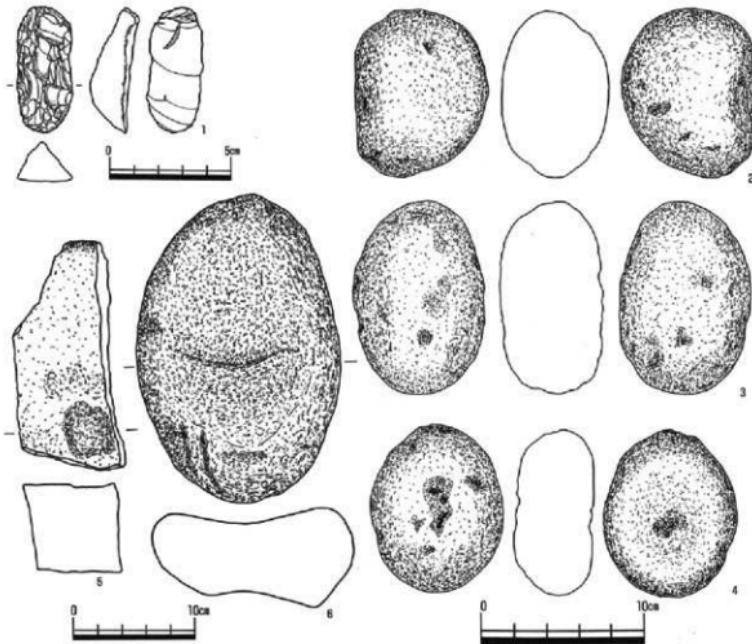


8

9

10

第10図 18号住居跡出土土器



第11図 18号住居跡出土石器

19号住居跡（第12図、図版3）

位 置 C・D-4グリッド

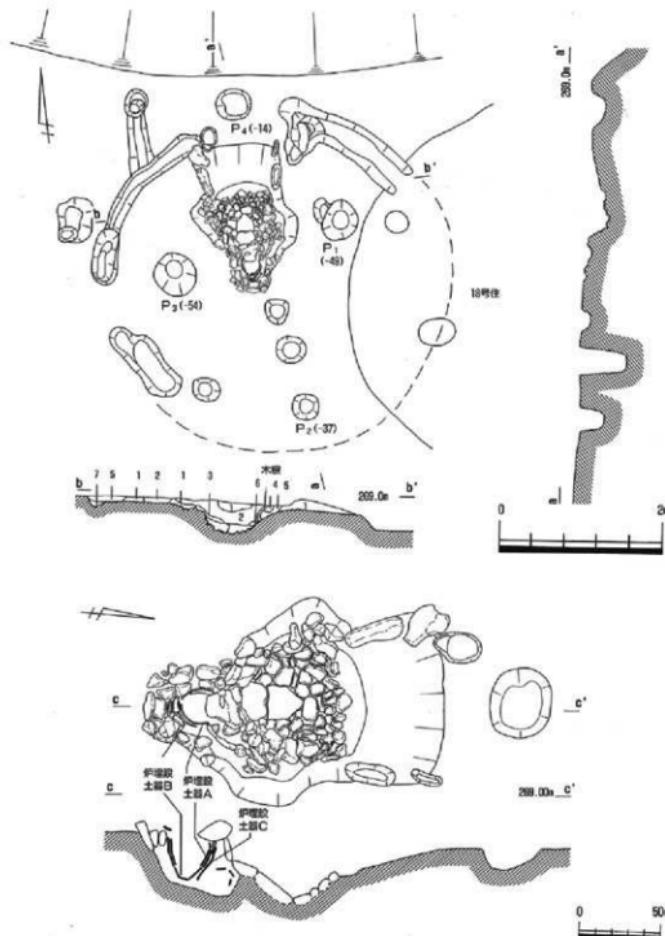
重 複 東側で18号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。

形 態 壁の立ち上がりが確認されず、18号住居跡の全面精査で本住居跡の周溝を検出した。II層下面からIII層上面において炉跡および周溝と柱穴を検出し全体を確認した。

規 模 直径が約4.4mのほぼ円形を呈する住居跡と推測される。

柱 穴 ピットは7基検出されたが、P 1～P 3の3本主柱構造と推測される。台地の縁辺部に位置するためP 4の北側は急斜面となる。

炉 跡 土器埋設部、石組部、前庭部からなる複式炉を検出した。全長1.85m、最大幅は石組部で0.9mを測る。土器埋設部には板状の疊や指円形の疊が組み込まれ、3固体の埋設土器が検出された。すなわち埋設部中央に炉埋設土器Aが正位に設置され、その外側に炉埋設土器Bが正位の状態で、さらに石組部との間に炉埋設土器Cが斜位の状態で出土している。このことから土器埋設部または複式炉全体が作り替えられたものと推測され、炉埋設土器Cが古くA・Bが新しい土器となる。石組部では底面から奥壁にかけて板

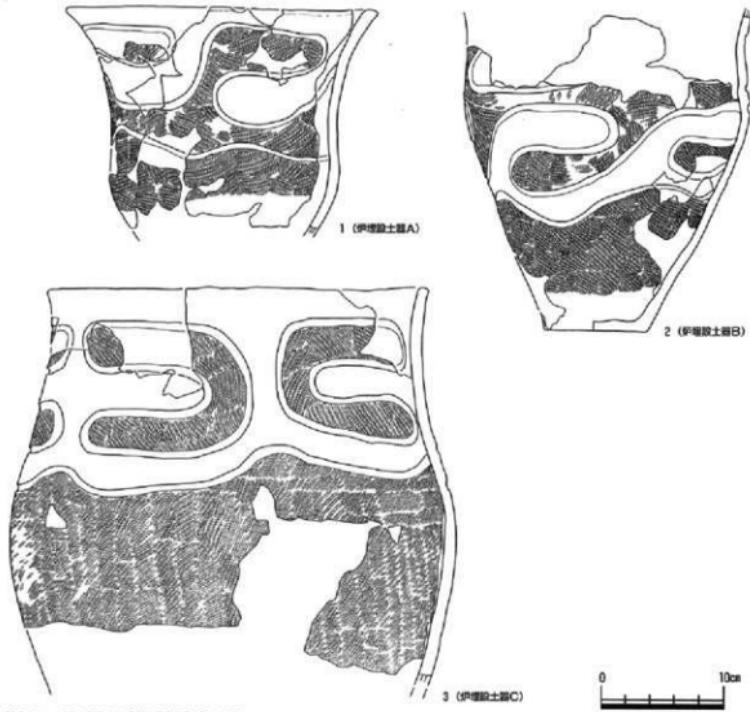


第12図 19号住居跡及び同複式炉

状の礫が、前底部側には円形や梢円形の礫がそれぞれ用いられ横断面形は舟底状を呈し、床面からの深さは38cmを測る。前底部には礫の抜き取り痕が認められることから礫は両側壁に配置されていたと推定される。

周溝 北東から南西にかけて幅20~40cm、深さ7cm~18cmの周溝を検出した。

覆土 1は暗茶褐色土。2は暗灰褐色土で暗褐色土の小プロックを含み炭化粒子が混じる。3は灰茶褐色土。4は暗茶褐色土で褐色や橙褐色土をプロック状に含む。5は暗茶褐色土で炭化物を多く含み、6は暗



第13図 19号住居跡複式炉出土石器

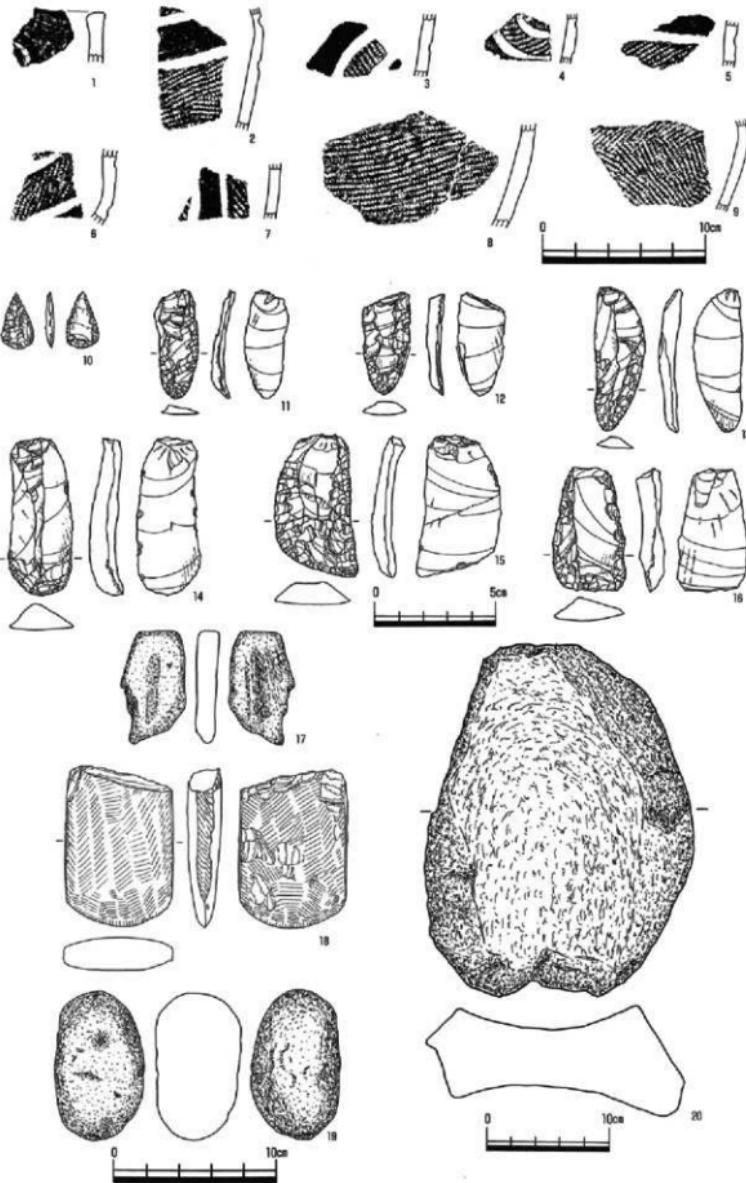
茶褐色土で褐色土をブロック状に含む土質。7は暗茶褐色土で粘性が強く炭化粒子を多く含む。

時 期 大木10式期

出土遺物

土 器 (第13図、図版13)

1は炉埋設土器Aで口縁が外反し胴部がやや膨らみをもち、底部を欠く深鉢である。胴部の波状沈線を境に胴上半から口縁部にかけて地文の縄文を沈線で区画した波済文が描かれ、胴下半は地文の縄文が施文される。2は炉埋設土器Bで口縁を欠くため器全体の文様構成は不明であるが、1と同様の器形を呈すものと思われる。胴部には横長の波済文が一周し底部にかけて地文の縄文が施文される。1と2は文様の構成要因である波済文において、縄文の有無により主文様の陰陽が逆転した例である。3は炉埋設土器Cで、胴下半を欠くが口縁がやや外反し胴部が大きく膨らんだ深鉢である。胴上位には沈線による波状文が器を一周し、口縁部付近には縄文施文部を沈線で区画した「U」字状文が横位に向かい合った状態で描かれている。土器埋設部の作り替えから新旧関係が見出され3が古く1・2が新しい土器である。いずれも大木10式である。



第14図 19号住居跡出土遺物

石器 (第14図、図版13)

覆土の堆積が浅いにもかかわらず、石鎚1点、搔器5点、範状石器1点、砥石1点、磨製石斧1点、磨石1点、石皿1点、剥片4点が出土した。

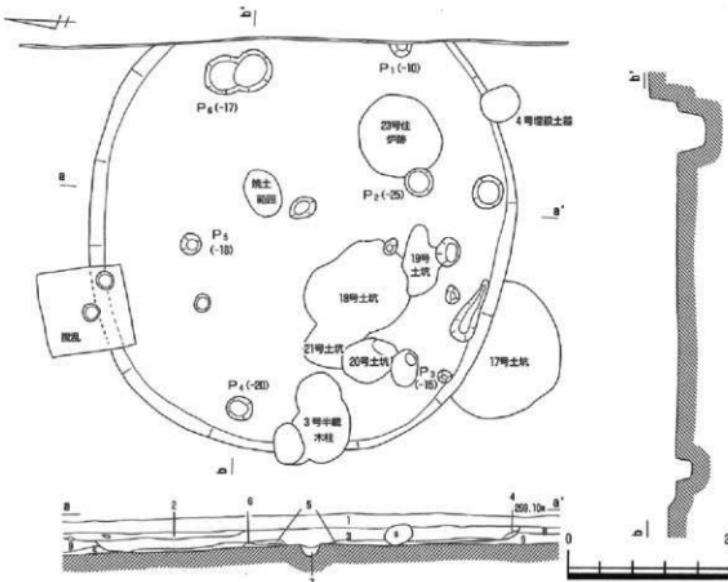
10は頁岩の剥片を素材とした薄手の石鎚である。11～15は縦長の剥片を素材とした搔器で、縦断面形はいずれも湾曲した形状を呈しており、素材となる剥片の採取に特徴を見出すことができる。腹面には素材の主要剥離面を大きく残し、先端から両側辺にかけて剥離が施され刃部を作出している。特に14は先端部に刃部作出のための剥離が加えられる以外は器皿面に素材の剥離痕をとどめている。16は両側辺と先端に剥離が施された範状石器である。11～16の石質はいずれも頁岩である。17は扁平様の両面に浅い溝があり砥石と考えられる。18は蛇紋岩製の磨製石斧で基部は欠損している。19は花崗岩種の磨石。20は両面に瘤みを有する砂岩製の石皿で複式炉の袖石として用いられていた。

20号住居跡 (第15図、図版4)

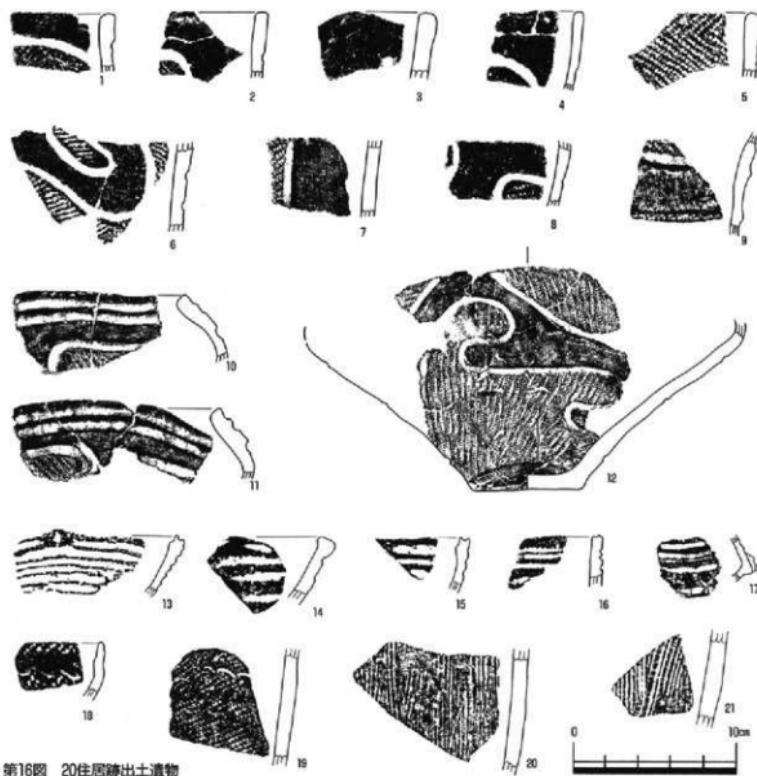
位置 A・B-5・6グリッド

重 複 住居跡内で18～21号土坑と、西壁で3号半截木柱遺構と重複するが本住居跡が新しい。また、住居跡内で23号住居跡の炉跡と、南西壁で17号土坑、東南壁で4号埋設土器と重複するが本住居跡が古い。

形 態 住居跡断面のa-a'ラインが開発予定区域の境目であるため、緊急発掘調査区域にあたる住居跡西側はⅡ層下位からⅢ層上位にかけて平面プランを確認し、遺跡確認調査区域にあたる東半分はⅡ層上位



第15図 20号住居跡



第16図 20住居跡出土遺物

から中位にかけて平面プランを確認した。したがって壁の立ち上がりは西側が浅く東半分が深くなる。平面形は東西に主軸をもつ梢円形を呈し床の掘り込みはⅢ層上面でとどまっている。

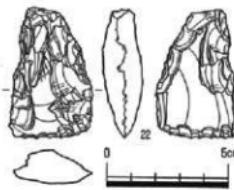
規 模 長軸方向現存5m×南北方向5.2m。確認面からの深さ10cm(西側)。

柱 穴 13基のビットが検出されたがいずれも床面からの掘り込みが10~25cmと浅く、P1~P6の6本と想定される。

炉 跡 住居跡中央部で焼土が検出されたため、地焼炉の存在が予想される。

周 溝 検出されなかった。

覆 土 1は耕作土。2は暗茶褐色砂質土で橙褐色土粒子と炭化粒子を多量に含む。3は黒褐色土で褐色



風化小礫・炭化物を多量に含む粘質土。4は暗褐色土で褐色土がブロック状に混入する。5は暗茶褐色土に褐色土がブロック状に混じる。6は赤褐色燒土で炭化物を多量に含みかたい土質。7は暗茶褐色土、8は茶褐色土で褐色蚊子を若干含む、9は暗茶褐色土。

時 期 不 明

出土遺物

土器(第16図、図版14)

1~8は縄文施部を沈線で区画し、曲線文を施した土器で、9は沈線と微隆起線で縄文施部を区画した土器である。10~12は口唇が緩やかな波状を呈し「く」字形に内湾する土器で、胴上半に最大幅を有する浅鉢状の器形である。口唇に沿って二重の沈線が巡り、胴部には沈線で区画された波状文が横長に施される。1~12はいずれも大木10式に比定される土器である。13~21は縄文晩期の土器で、13・14は皿、15・18は浅鉢、16は鉢、19~21は粗製土器である。

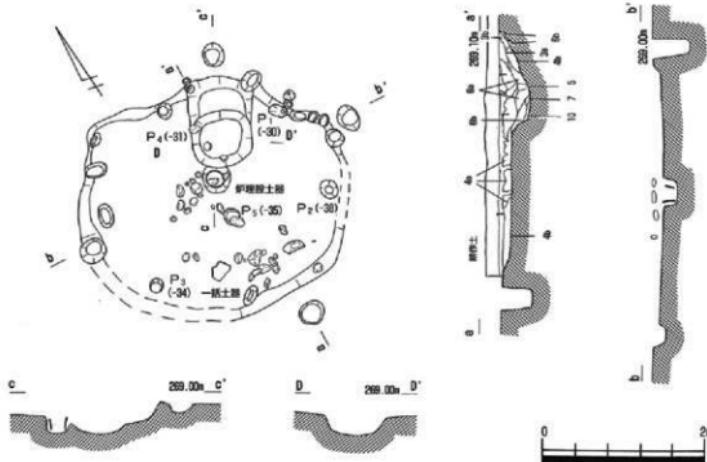
石 器 (第16図、図版14)

22は笠状石器で、腹面に主要剥離面を大きく残している。頁岩の厚みのある横長剥片を素材とし、両刃から器中央にかけて剥離が施されている。

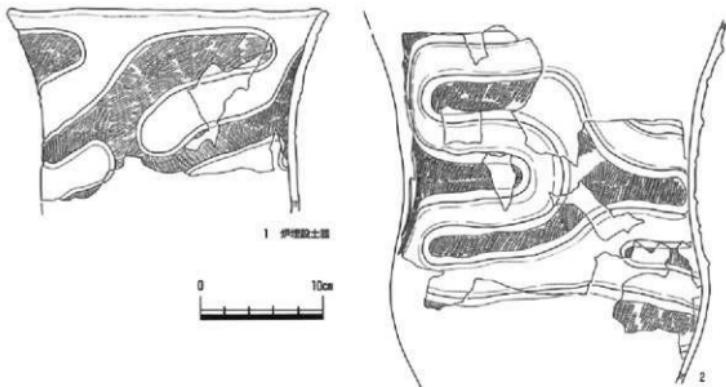
21号住居跡（第17図、図版4）

位 置 C・D-5・6 グリッド

形 懸 住居跡全体が基盤整備の削平を受けており、壁や覆土の残りは少ないが炉跡や床面に搅乱はおよんでいない。Ⅲ層上面で確認し、平面形は不整円形を呈し炉跡部分が張出した形状となり、壁の立ち上がりは緩やかである。炉周辺から南側の壁において、床面から覆土下位にかけて円形や精円形の礫が多く検出されたのが特徴で、今回検出した中では最小規模の住居跡である。



第17図 21号住居跡



第18図 21号住居跡出土土器

規 模 長軸3.3m×短軸3.0m。確認面からの深さは10cm。

柱 穴 炉跡の周囲で壁沿いにピットが検出されたが、深さは5~10cmと浅いものである。ピットの深さからP1~P5を柱穴と想定したが、本住居跡の外側でも東と南の壁沿いに深さ30cmを越すピットが検出されており、住居跡との係わりが推測される。

炉 跡 平面形は複式炉と同様の形状を呈する。礎はほとんど検出されなかつたが、底面に凹凸が見られ構の抜取り痕と推測されることから土器埋設部、石組部、前庭部からなる複式炉であった可能性が強い。長軸1.44m×短軸0.76mを測り、炉埋設土器は胴下半を欠くが正位に設置され、周辺の土質は赤褐色を呈し熱を受けた痕跡が認められる。石組部にあたる箇所は隅丸方形を呈し、底面は赤褐色で熱を受けた痕跡を残し拳大の礎が数個検出された。奥壁部に凹凸が見られ横断面は舟底状を呈する。前庭部にあたる部分は底面から側壁にかけて凹凸は見られず壁際にピットが2基検出された。

周 溝 検出されなかつた。

覆 土 1は旧耕作土で、2は灰褐色土。3aは暗茶褐色土で黒褐色土をブロック状に含み、3bは3aと同質であるが褐色土のブロックを含む。4aは暗灰褐色土で炭化粒子・褐色粒子を多量に含みかたい土質。4bは4aと同質であるが明るみの強い色調で、5は暗灰褐色土で褐色土を縱じま状に含む。6aは暗茶褐色土で炭化粒子・褐色土粒子を若干含み、6bは6aと同質であるが褐色土をブロック状に含む。7は褐色粘質土で、8は黒褐色土で炭化粒子を多量に含み粘性に富む土質。

時 期 大木10式期

出土遺物 土器の出土は整理箱にして約半分で、石器は出土しなかつた。

土 器 (第18図、図版14)

1は炉埋設土器で、口縁が緩やかに外反する深鉢である。胴下半を欠き、全体の文様構成は不明であるが体部から口縁にかけて縄文施文部を沈線で区画した波渦文が描かれている。波渦文内にはR Lの縄文が施文され、沈線沿いの縄文は磨消されている。2は床面直上から出土した一括土器である。口縁が緩やかに外反

し体部は影らみをもち雁股文が描かれる深鉢である。文様区画は沈線と微隆起線で構成され、区画内にはR字の縄文が施されるが区画した沈線で縄文は消され磨消縄文風になっている。

22号住居跡（第19図、図版5）

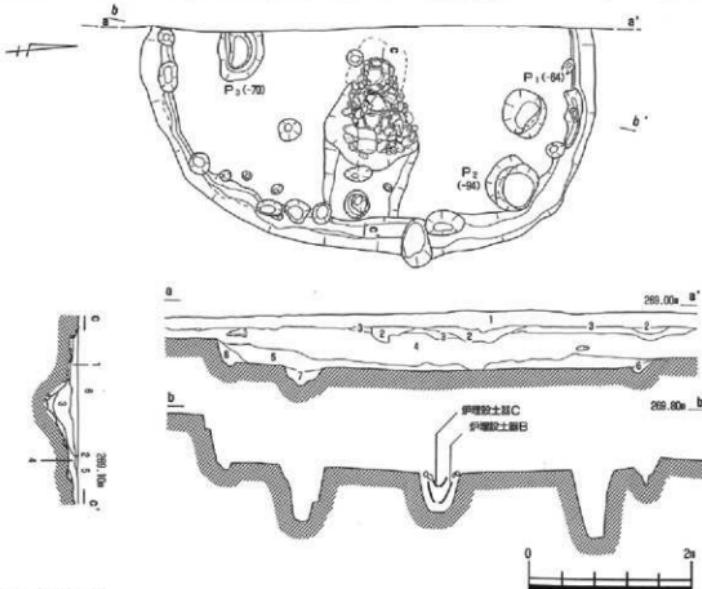
位置 E-5-7グリッド

形態 住居跡西半分は調査区域外のため未調査であるが、ほぼ隅丸方形を呈する平面形と推測される。確認面まで厚い堆積土で覆われていたため、他の遺構と比べ保存状況は良好であった。Ⅱ層下位からⅢ層上面で確認され、Ⅲ層を掘り込んだ壁は南側において深く急な立ち上がりとなるが、北側では緩やかで浅い。このことは基盤が北側に傾斜していることに起因している。床面は平坦でかたくしまった状態である。

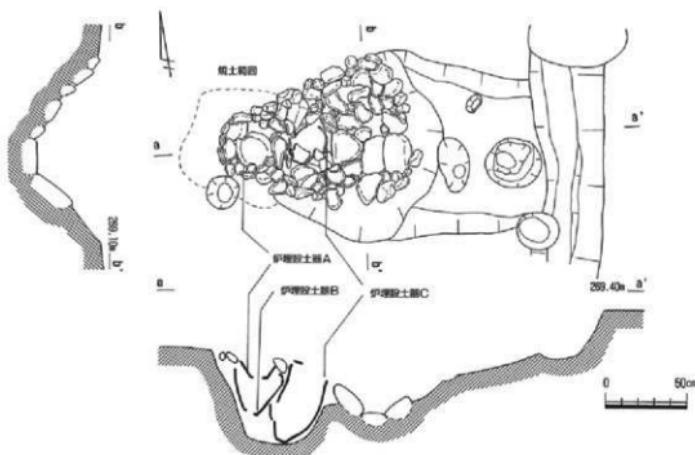
規模 西側が未調査で全容は明らかではないが、南北軸で直径5.5mを測る。確認面からの深さは最深部で30cmを測る。

柱穴 大型の柱穴が仰跡をはさんで3基検出された。柱穴の配置は明らかではないが、直径はいずれも50cmを超えるもので深さも64-94cmを測り、このたび発見された住居跡の柱穴では最も規模の大きいものである。

炉跡（第20図、図版5） 土器埋設部、石組部、前庭部からなる複式炉である。長軸は2mでほぼ西方指向を指し、最大幅は石組部で0.94mを測る。石組部の側壁・奥壁・前庭部にかけて円形・梢円形・板状の窓を多用し、前庭部でピット3基を検出する。土器埋設部からは3個体の土器が出土した。炉跡の西端部で炉埋設土器AとBが重なった状態で出土し、土器と土器の間には固体を安定させるためと思われる拳大の礫が



第19図 22号住居跡



第20図 22号住居跡模式炉

数個検出された。また石組部側では炉底設土器Cが斜位の状態で出土し、土器の内部から大型の扁平砾が斜位の状態で検出された。石組部の南と東側では掘り方が確認され底面に凹凸が見られ砾の配置が不規則であることなどから、石組部の南と東で一部砾の抜き取りが行われた可能性がある。床面から底面までの深さは36cmを測る。前庭部は掘り込みだけではなくピットが検出された。炉跡の堆積土は次のとおりである。1は暗灰褐色土で、2は黒褐色土。3は暗茶褐色土で炭化物・褐色土粒子を多く含む。4は暗灰褐色土で、5は暗茶褐色土。6は黒褐色土で炭化物を多く含む。

周溝 突に沿って検出され幅20~44cm、深さは7~11cmを測る。

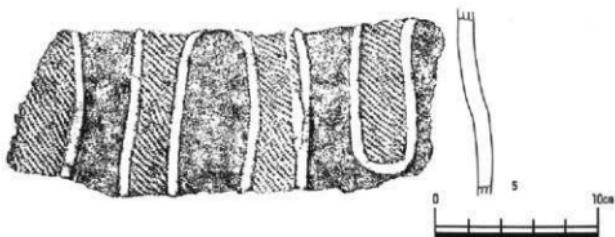
覆土 1は耕作土で、2は擾乱(旧農道)。3は暗茶褐色土で褐色土の小塊や粒子を多く含む。4は黒褐色砂質土で炭化粒子を多量に含みしまるの弱い土質。本層から土器や砾が多量に出土した。5は暗灰褐色砂質土で炭化粒子を多く含む。6は灰褐色砂質土で褐色土をブロック状に含む。7は暗茶褐色土。

時期 大木10式期

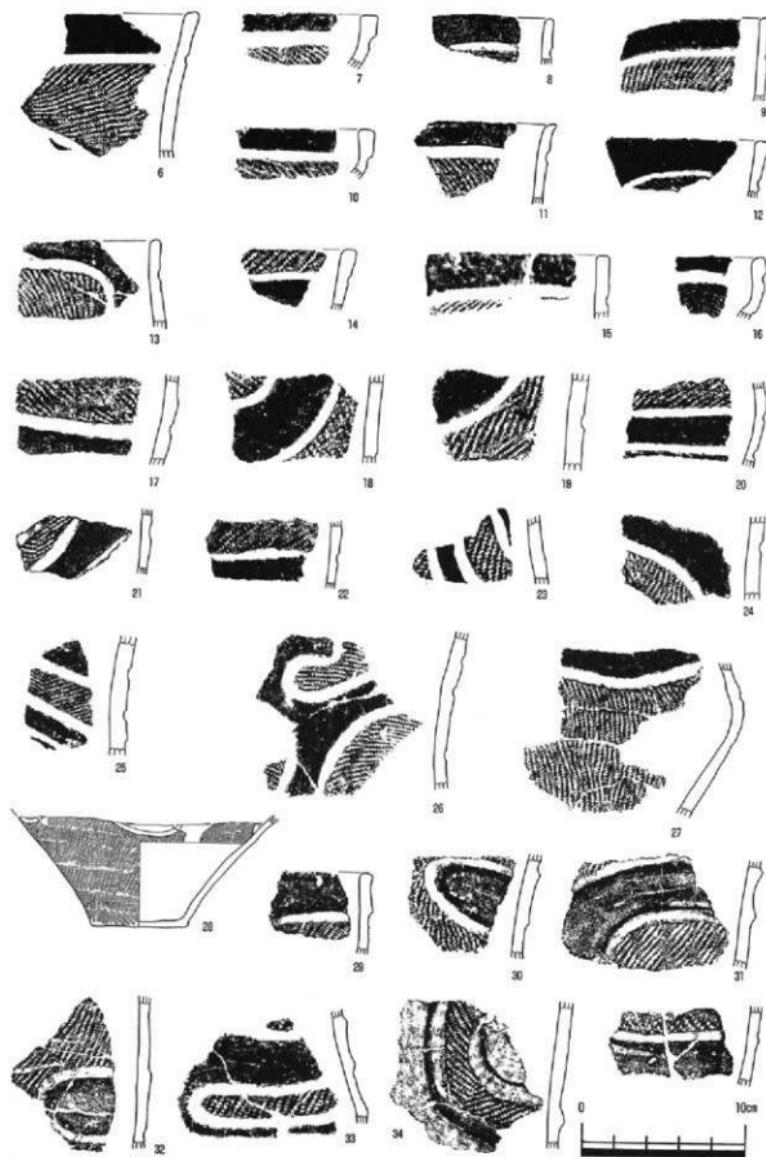
出土遺物

土器 (第21~25図、図版15~17)

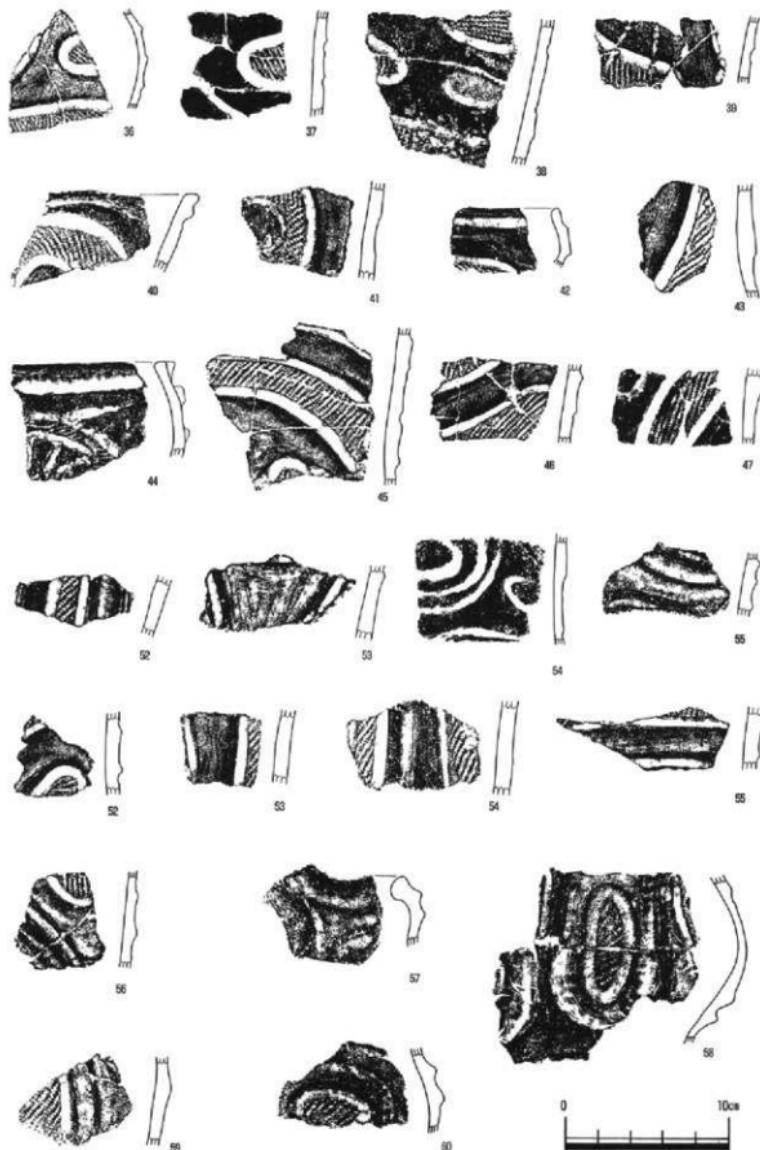
1~3は炉底設土器、4~5は炉跡の覆土上位から、6~60・62~68は覆土から、61はP1から、69は擾乱層からそれぞれ出土した。1は炉底設土器Cで口縁はほぼ垂直に立ち上がり、胴部が膨らみ、底部がすぼまる器形の深鉢である。胴上部には沈線による波状文が器を一周し、口縁には沈線で「C」字状文が横位に描かれ区画内にはL Rの斜繩文が施文される。また、胴下半はL Rの斜繩文が縱方向に施文され底部付近にまで達している。2は炉底設土器Bで口縁部と底部は欠損しているが胴部が大きく膨らみ底部がすぼまる深鉢である。胴下半には波状沈線が施され器を一周している。胴上半には沈線で区画された曲線文が描かれ、区画内にはR Lの複節繩文が施文される。1~2は大木10式である。3は胴下半から底部にかけての土器で



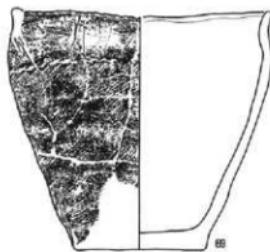
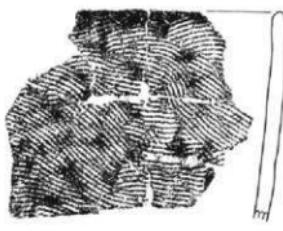
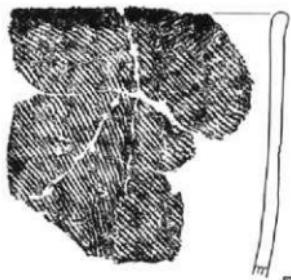
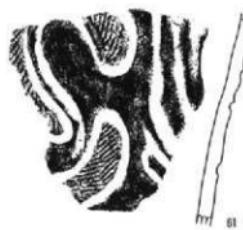
第21図 22号住居跡出土土器(1)



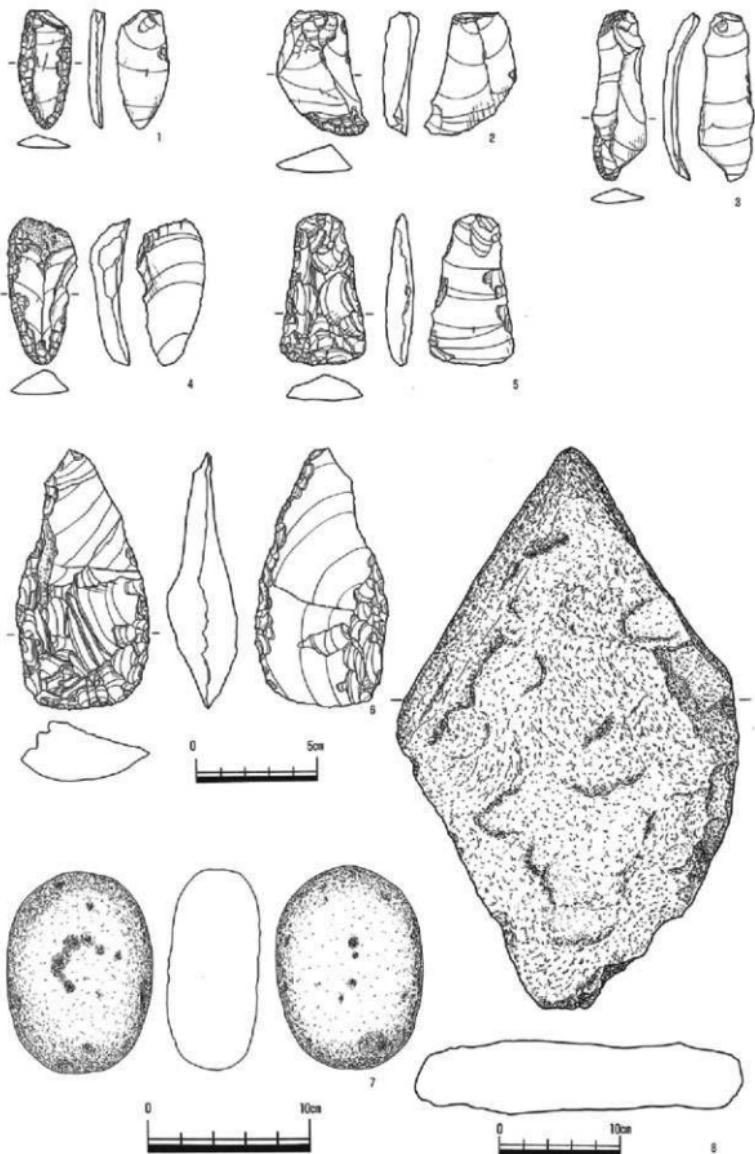
第22図 22号住居跡出土土器(2)



第23図 22号住居跡出土土器(3)



第24図 22号住居跡出土土器(4)



第25図 22号住居跡出土石器

大木10式に併行する土器である。土器の内側は茶褐色の色調を呈し器壁の剥落が著しく熱を受けたためと推測される。4は口縁がやや外反し肩部がやや膨らむ深鉢と推定され、沈線による「C」・「の」字状の文様が描かれ、区画内には斜縄文が施文される。熱を受けたためか茶褐色の色調を呈し、もうく遺存状態の悪い土器である。5も4と同様の器形を呈するものと推測され、体部には沈線による縦長の「C」・「U」字状文が施され、区画内には斜縄文が施文される。4・5は大木10式土器である。6-28は縄文施文部を沈線で区画し、曲線や直線文が施される土器群である。施文部の断面は平坦面に凹部を有する形態となる。29-39は前者と同様の文様構成をとるが文様区画のさいに沈線と微隆起線を併用している。このため施文部の断面形態は平坦面に凸状を呈する。40-61も文様構成は前二者と同様であるが、沈線と隆線を併用し文様の区画になっている。施文部断面形態において縄文施文部は凹状を、区画部分が凸状を呈している。62-66は区画文をもたない地文の縄文だけが施文される土器で、器形はいずれも深鉢と推測される。64は施文方向に特徴が見られ地文が入組文風に施文されている。6-68は大木10式に比定される土器である。69は縄文晩期の粗製土器である。口縁はやや外反し口唇に刻目を施し、体部には結節縄文が見られる。また、覆土から内側に漆が付着した土器片1点が出土し(図版〇)、文様の特徴から大木10式に比定される。

石 器 (第24図、図版18)

石器は8点出土しており、石質はすべて頁岩である。内訳は削器1点、搔器3点、範状石器2点、磨石1点、石皿1点である。

1は縦長の削器で両刃に剥離を施し刃部を作出している。2は末端辺に腹面から剥離を施した搔器で幅広の剥片を素材としている。3は素材の形状をとどめた石器で、端部に腹面から剥離を加え刃部を作出している。4も搔器であるが剥片の基部に刃部を作出した厚みのある石器である。5は範状石器での腹面からの剥離が器中央部に達している。6は大型の範状石器で横長の剥片を素材としている。主要剥離面には打面除去を目的とした剥離痕を大きく残し、背面左辺には階段状剥離が顕著に認められる。7は磨石で小さな凹部が観察され、石質は花崗岩である。8は敲打痕が残る大型の石皿で花崗岩製である。使用の痕跡は片面のみである。

23号住居跡 (第26図、図版5)

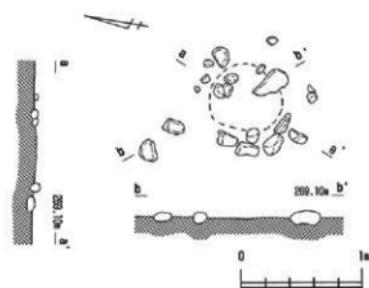
位 置 A-6グリッド

重 複 20号住居跡と重複し本住居跡が新しい。

形 態 新作土直下で確認されたため搅乱が著しく、検出された遺構は炉跡のみで規模、周溝、覆土等は不明である。

炉 蹤 II層上面で検出された。搅乱を受けているため北東隅の配置も乱れているが、焼土範囲からは円形プランを呈する石組部と推定される。長方形や格円形の砾を配置した石組内は炭化物を多量に含む赤褐色土で覆われ、かたくしまった土質である。焼土の深さは確認面から6-8cmに達する。

時 期 周囲の出土土器から縄文晩期と推定される。



第2節 埋設土器

このたびの調査で4基の埋設土器が検出されたが、2・4号埋設土器は基盤整備で搅乱を受け遺構・遺物の一部が削り取られている。また、2～3号埋設土器は住居跡と重複関係にあり、住居の廃棄や共存関係の可能性もあるが、ここでは単一遺構としてあつかうこととする。

1号埋設土器（第27図、図版6）

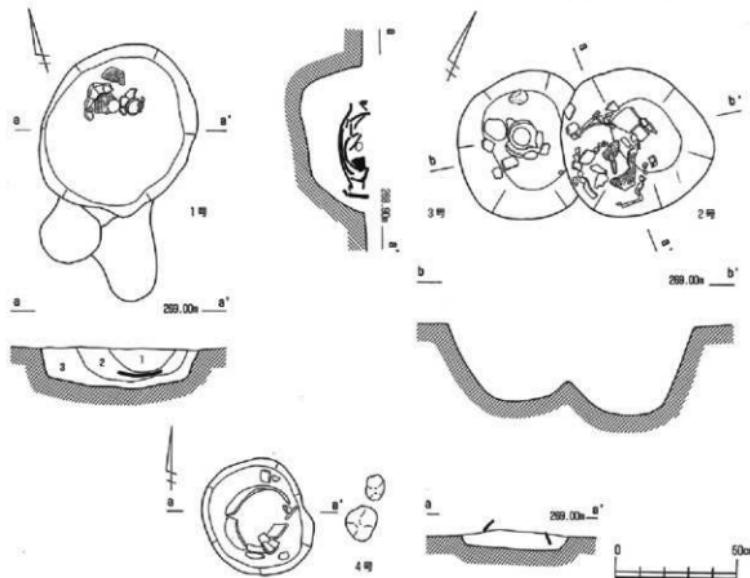
C-6グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認された。覆土下位で2の大型土器の破片が出土し、その下から小型土器1が底部を上に向け押しつぶされた状態で検出された。覆土は1が暗茶褐色土で炭化物を多く含み、2は1と同質で褐色土をブロック状に含む。3は暗灰褐色土で炭化物・褐色土ブロックを多く含む。

土 器（第28図、図版19）1は小型の鉢で三単位の外反した波状口縁をもち、口唇に沿って無文帯が形成され体部にはL Rの繩文が施される。2は大型深鉢の破片。1・2は大木10式期に併行する土器である。

2・3号埋設土器（第27図、図版6）

B-4グリッドに位置し、18号住居跡の覆土を掘り込んでいる。2号からは3固体の土器が出土し、そのうち2固体が横位に、3号からは正位で検出された。2号が新しく3号が古い。

土 器（第28図、図版19）2号からは3～5が出土した。5は外側の土器で、やや外反した口縁が沈線が一周し口唇は細かい波状を呈する。膨らみをもつ胴部には結節繩文が施文される。3は口縁が外反する無文土器の鉢で一番内側に位置し正位の状態で検出された。4は深鉢で1条の沈線が巡らされた口縁はほぼ垂直に立ち上がる。6は壺の口縁部で、外反ぎみに立ち上がりを見せる口縁には2条の沈線が巡る。1～4はい



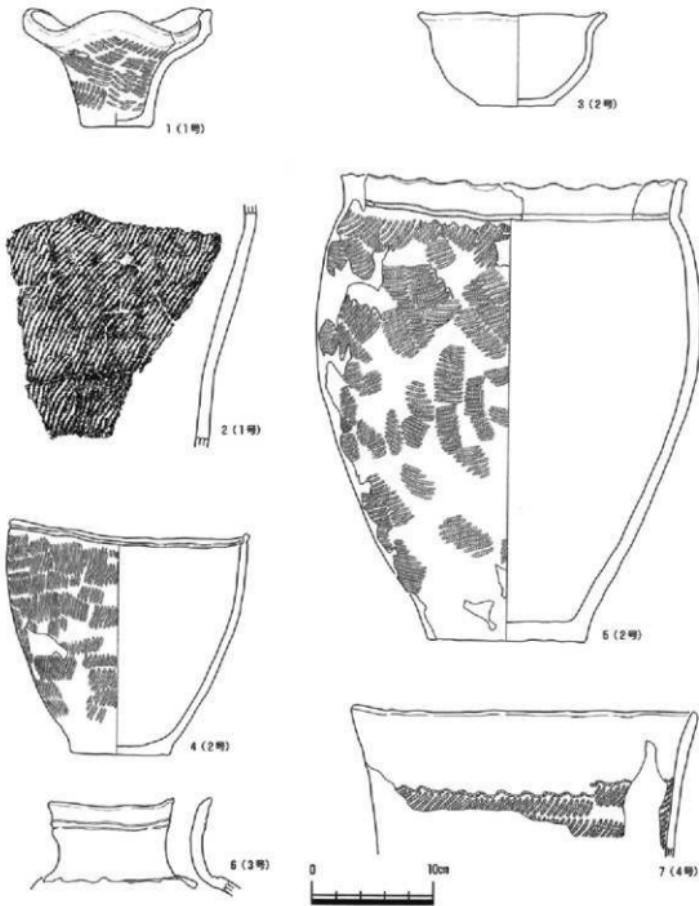
第27図 1～4号埋設土器

いずれも縄文晩期後葉に比定される土器である。

4号埋設土器（第27図、図版6）

A-6グリッドに位置し、II層下位で検出された。20号住居跡と隣接し本埋設土器が新しい。土器は逆位の状態で検出されたが胴部から底部は欠損している。

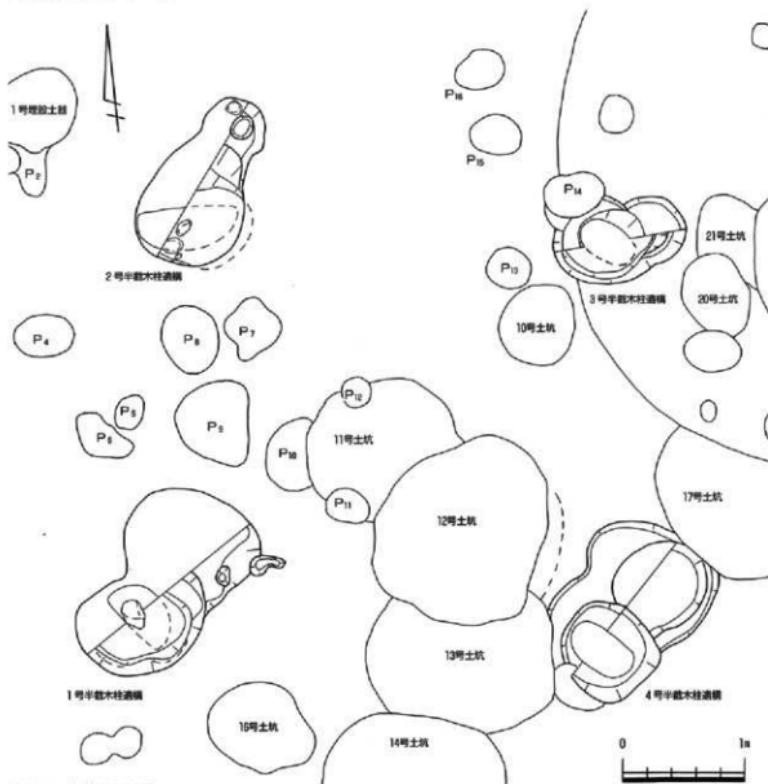
土 器（第28図、図版19）7は口縁が外反ぎみに立ち上がる深鉢で、体部には結節縄文がほどこされる。縄文晩期後葉に比定される土器である。



第28図 1～4号埋設土器実測図

第3節 半截木柱遺構 (第29図、図版6)

このたびの調査で半截木柱遺構を4基検出した。柱そのものは行ちて残っていなかったが、土坑断ち割りの縦断面の精査において検出した長方形のプランを木柱の厚みにあたる部分と認識し、同じく平面では半円形や梢円形のプランを木柱の木口にあたる箇所と確認したため、これらの遺構を土坑に設置された継割りの大型木柱の痕跡と捉え半截木柱遺構とした。同じ特徴を備える遺構を全部で4基確認したため4本柱の構成をなすものと考えられる。遺構はA-C-6・7グリッドにかけて検出され、深い土坑と浅い土坑が組みになりひとつの遺構を構成する。4基の遺構の長軸はおおよそ北東から南西を指し、柱の配置は正方形の四隅に設置された形状を呈し、柱痕を線で結ぶとほぼ方形となる。さらに隣り合う柱痕の中心から中心までの距離は凡そ3.5mを測る。柱痕と推定される範囲からは木片状の炭化物が多量に検出されたため、分析を行いつの結果を第IV章に記載した。また、2号半截木柱遺構は平面と断面について土層転写を行い、展示資料として保管にあたっている。



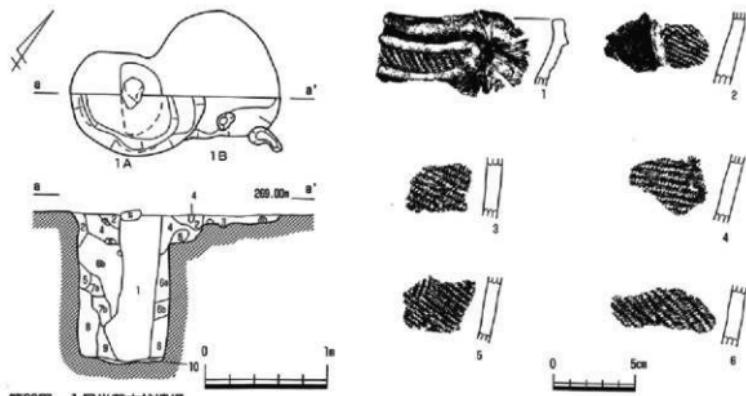
第29図 半截木柱遺構

1号半截木柱遺構（第30図、図版7）

B・C-6・7グリッドに位置する。土坑プランはⅢ層上面で検出し、平面と断面精査において柱跡と確認した。平面形は「∞」状を呈し、長軸（推定）1.7mを測り1A・1Bの土坑で構成される。1AはⅢ層をほぼ垂直に掘り込んでおり底面中央部はかたくしまった土質である。柱跡における木口の形状は半月形を呈すると思われ直径は推定で約60cm、弦面（半截面）を南西方向に向けて設置している。1Bは確認面からの深さが8cmと浅く壁の立ち上がりも緩やかである。

土 器（第30図、図版20）1Aから9点、1Bから1点の土器が出土し、図示した6点は1Aからの出土である。1は縄文施文部を沈線と隆帯で区画した土器で、口縁部が内湾する。2も1と同様の文様構成をもち両者とも大木10式に比定される。他の土器も大木10式に併行する土器である。

覆 土 1は暗茶褐色土で炭化物を多量に含みやわらかい土質で、柱跡にあたる。2は暗茶褐色土で炭化粒子・褐色土粒子を多量に含む。3は黒褐色土、4は茶褐色土、5は褐色粘質土で、6aは暗灰茶褐色土で褐色土をブロック状に含み砂質で炭化物を多く含みかたい土質。6bは6aと同質で褐色土ブロックの割合が少ない。7aは灰褐色粘質土で、7bは7aと同質で小礫を若干含む。8は砂混じりの黒褐色土、9は暗灰褐色粘質土で小礫を多く含み、10は黒褐色粘質土でしまりありかたい土質。



第30図 1号半截木柱遺構

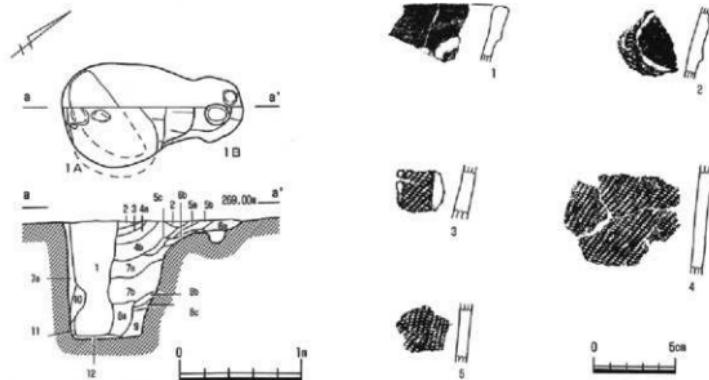
2号半截木柱遺構（第31図、図版7）

B・C-6グリッドに位置する。1号と同様に土坑プランはⅢ層上面で検出し、平面と断面精査において柱跡と確認した。平面形は「∞」状を呈し、長軸（推定）1.45mを測り1A・1Bの土坑で構成される。1Aは平坦な底面から急角度で立ち上がる土坑で底面中央部はかたくしまった土質である。柱跡における木口の形状は半月形を呈すると思われ直径は推定で約80cm、弦面（半截面）を北東方向に向けて設置している。1Bは確認面からの深さが10cmと浅く壁の立ち上がりも緩やかである。

土 器（第31図、図版20）1Aから5点、1Bから3点の土器が出土し、図示した土器は1が1B他は

1 A からの出土である。1～3は縄文施文部を沈線と微隆起線で区画した土器で、大木10式に比定される。4・5はR Lの縄文が継および斜方向に施文された土器で、大木10式に併行する。

覆 土 1は暗茶褐色土で炭化物を多量に含みやわらかい土質で、柱跡にある。2は暗茶褐色砂質土でしまりのある土質。3は茶褐色土で褐色土をブロック状に含みかたくしまった土質。4 aは暗灰褐色土で炭化物を多量に含むたかくしまった土質。4 b 4 aと同質で茶褐色土が混じる。5 aは明灰褐色土で砂粒を多く含みかたい土質。5 bは5 aと同質で褐色粒子を多く含み、5 cは5 aと同質では砂粒を多量に含む土質。6 aは黒褐色土で砂粒を多く含み、6 bは6 aと同質で粘性を帯びる。7 aは灰褐色土で砂粒と褐色土ブロックを含み、7 bは7 aと同質で指頭大的小砾を多く含む。8 aは暗灰褐色粘質土でしまりの弱い土質。8 bは8 aと同質で砂粒・黒褐色土ブロックを含み、8 cは8 bと同質であるが砂粒が少ない。9は黒褐色粘質土で指頭大的砾を若干含みしまりありかたい土質。10は灰褐色粘質土で褐色土ブロックと炭化物を多く含みしまりが弱い土質。11は明灰褐色粘質土でしまりのある土質で、12は褐色粘質土で小砾を含みかたくしまった土質。



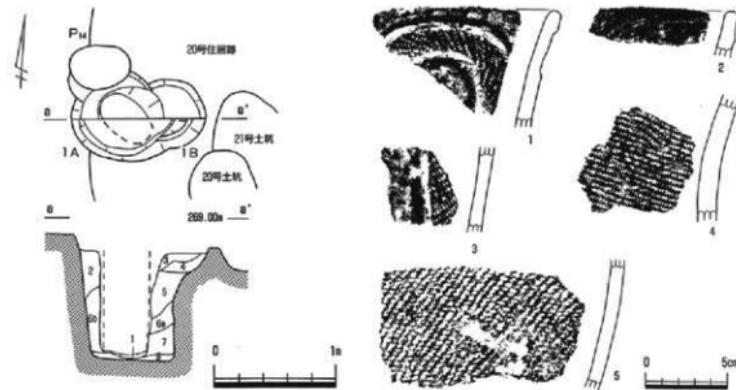
3号半截木柱遺構（第32図、図版8）

B-6グリッドに位置する。20号住居跡およびピット群のP14と重複し、本遺構が古い。20号住居跡の床面精査において柱穴として掘り下げていたが、再精査の結果半截木柱遺構と確認した。平面形は「∞」状を呈し、長軸1.2m、1 A・1 Bの土坑で構成され、1 Aはほぼ垂直に立ち上がり確認面からの深さは1.2m、1 Bは急角度で立ち上がり確認面からの深さは20cmである。柱跡は住居跡の柱穴として掘り下げたため、木口の形状は底面の形態から長径が約50cmの楕円形と推測されるが、弦面（半截面）の向きは不明である。

土 器（第32図、図版20）1 Aから5点の土器が出土した。1～3は縄文施文部を沈線と微隆起線で曲線的に区画した土器で、大木10式に比定される。4は外反する体部破片で斜縄文が施され、5は体部破片でR

Lの縦文が縦方向に施文される土器で、4・5とも大木10式に併行する土器である。

覆 土 1は暗茶褐色土で炭化物を多く含みやわらかい土質で、柱跡である。2は褐色粘質土で暗茶褐色土をブロック状に含みしまりありかたい土質。3は茶褐色土で炭化粒子を多く含みしまりありかたい土質。4は灰茶褐色土で褐色粒子、炭化物を多く含む。5は灰褐色土で炭化物・褐色土をブロック状に含みしまりありかたい土質である。6 aは暗灰褐色土で炭化物・褐色土のブロックを含み、6 bは6 aと同質で褐色土ブロックを多く含む。7は暗茶褐色粘質土で炭化物を含みしまり弱い土質。8は黒褐色粘質土でしまりありかたい土質。



第32図 3号半截木柱遺構

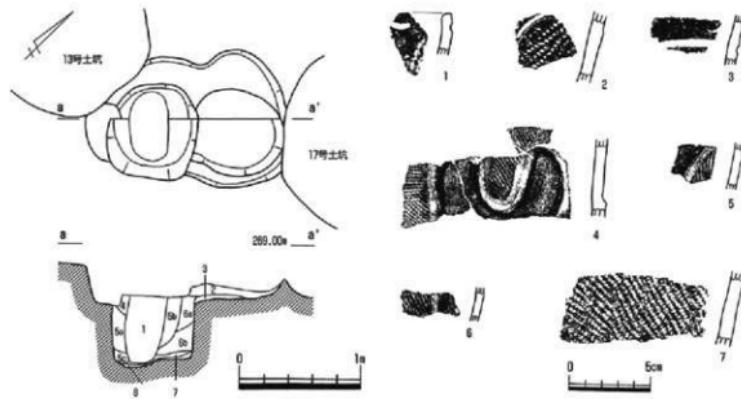
4号半截木柱遺構（第33図、図版8）

B-7グリッドに位置し、13号土坑、17号土坑およびピットと重複するが本遺構が古い。半截木柱遺構のなかで唯一柱跡の木口面全面を確認した遺構である。1～3号半截木柱遺構が確認されたため、柱間の距離から遺構の位置を割り出しⅡ層下面で確認した。そのため北東部において掘りすぎもあり二重の平面プランとなったが内側が本遺構の輪郭である。平面形は「∞」状を呈し、長軸（推定）1.5m、1A・1Bの土坑で構成され、1Aはほぼ垂直に立ち上がり確認面からの深さは約80cm、1Bはゆるやかに立ち上がり確認面からの深さは約15cmである。柱跡における木口の形状は楕円形を呈し、弦面（半截面）は北東方向を向けて設置されており直径は55cmを測る。

土 器（第32図、図版20）1Aから7点の土器が出土した。1は口縁が内湾する小型土器で縄文施文部を沈線で区画した文様をもつ。2・3も1と同様の文様が描かれる土器である。4～6は縄文部を微隆起線と沈線で曲線的に区画した深鉢の土器である。7はLRの斜縄文を地文にもつ深鉢の体部破片である。1～7は大木10式に比定され、7は大木10式に併行する土器である。

覆 土 1は暗茶褐色土で炭化物を多量に含みしまりの弱い土質で、柱跡である。2は暗茶褐色土で褐色

粒子を多量に含みしまり弱い。3は灰茶褐色土で褐色土をブロック状に含み、4は灰褐色土で褐色土のブロックを含み、多量の炭化物が混じりしまりありかたい土質。5 aは暗灰褐色粘質土で炭化物を多く含みしまりありかたく、5 bは5 aと同質で褐色土をブロック状に含み炭化物と礫が混じり、5 cは5 aと同質で粘性に富む。6 aは灰褐色土で黒褐色土をブロック状に含み粘性を帯びしまり弱い土質で、6 bは6 aと同質で粘性に富みしまりありかたい土質。7は黒褐色粘質土で炭化物を多く含みしまりありかたい土質。8は灰褐色土でかたくしまった土質。



第33図 4号半截木柱遺構

第4節 土坑とピット群

土 坑 (第34~36図、図版9・10) このたびの調査では22基の土坑が検出された。土坑の分布は円弧状に点在する住居跡内側の広場で検出された土坑と、住居跡の覆土または床面で検出された土坑がある。出土遺物が少なく土坑の帰属時期は明確ではないが集落の構成要因としての役割や、住居の廢棄等に係わりをもつものと考えられる。特に1~3号土坑は18号住居跡の覆土を掘り込んでおり覆土下位から底面にかけて多量の土器が出土した。また、11~14号土坑は重複関係にあり出土遺物は少ないものの、11・12号土坑からは疊が密集して検出され、土坑墓の可能性がある。

ピット群 (第36図) B・C-5~7グリッドにかけて検出された。22基のピットから構成され、1号埋設土器、11号土坑、20号住居跡と重複関係にある。環状に配置されたピットは集落の広場で検出され、直径は約5mを測る。出土遺物も少なく帰属時期も明確ではないが、住居跡の可能性や半裁木柱遺構との係わりが推測される。

表1 土坑計測表

(推定値)、単位:cm

No	位置	開口部 形 長軸×短軸	低部 形 長軸×短軸	深さ	遺物・覆土・備考 (挿図番号、図版番号)
1	B・C-4・5	楕円形 (240)×160	楕円形 223×148	24	出土土器 第37図、図版20、出土石器 第37図、図版20 覆土 1は暗茶褐色土で炭化物、砂粒を含む。備考 18号住居跡の覆土面で検出され本土坑の方が新しく、2号土坑より古く3号より新しい。第34図、図版9
2	B・C-4	不整円形 157×138	不整円形 129×113	23	出土土器 第38図、図版21 覆土 1は暗茶褐色土で2は茶褐色土。備考 18号住居跡の覆土面で検出され本土坑の方が新しく、1号土坑より新しい。第34図、図版9
3	C-4・5	(不整円形) 253×220	(不整円形) 238×200	32	出土土器 第38・39図、図版21 覆土 1は暗茶褐色土で灰褐色土をブロック状に含む。備考 18号住居跡の覆土面で検出され本土坑の方が新しく、1号土坑より古い。第34図、図版9
4	C-5	円形 81~72	不整円形 58×54	27	出土土器 第39図、図版22 覆土 1は暗茶褐色土で炭化物を多く含む。2は暗褐色土で褐色土をブロック状に含む。第34図、図版9
5	C-5	不整円形 62×55	不整円形 48×37	13	覆土 1は暗褐色土、2は暗茶褐色土で炭化物を含みしまり弱い。第34図、図版9
6	C-5	不整円形 63×58	不整円形 51×36	11	出土土器 第39図、図版22 覆土 1は暗茶褐色土で炭化物を含む。2は暗褐色土で褐色土をブロック状に含む。第34図、図版9
7	D-4	扇丸方形 53×41	不整円形 (27)×18	22	第34図
8	B-3・4	不整形 152×73	不整形 125×56	10	出土土器 第39図、図版22 備考 17号住居跡と重複し本土坑が新しい。第35図
9	B-5	不整楕円形 80×68	不整楕円形 64×48	26	覆土 1は暗茶褐色土、2は暗灰褐色土。第35図
10	B-6	楕円形 67×61	楕円形 59×48	12	覆土 1は暗茶褐色土、2は暗褐色土、3は暗灰褐色土。第35図、図版9

表2 土坑計測表

(推定値)、単位:cm

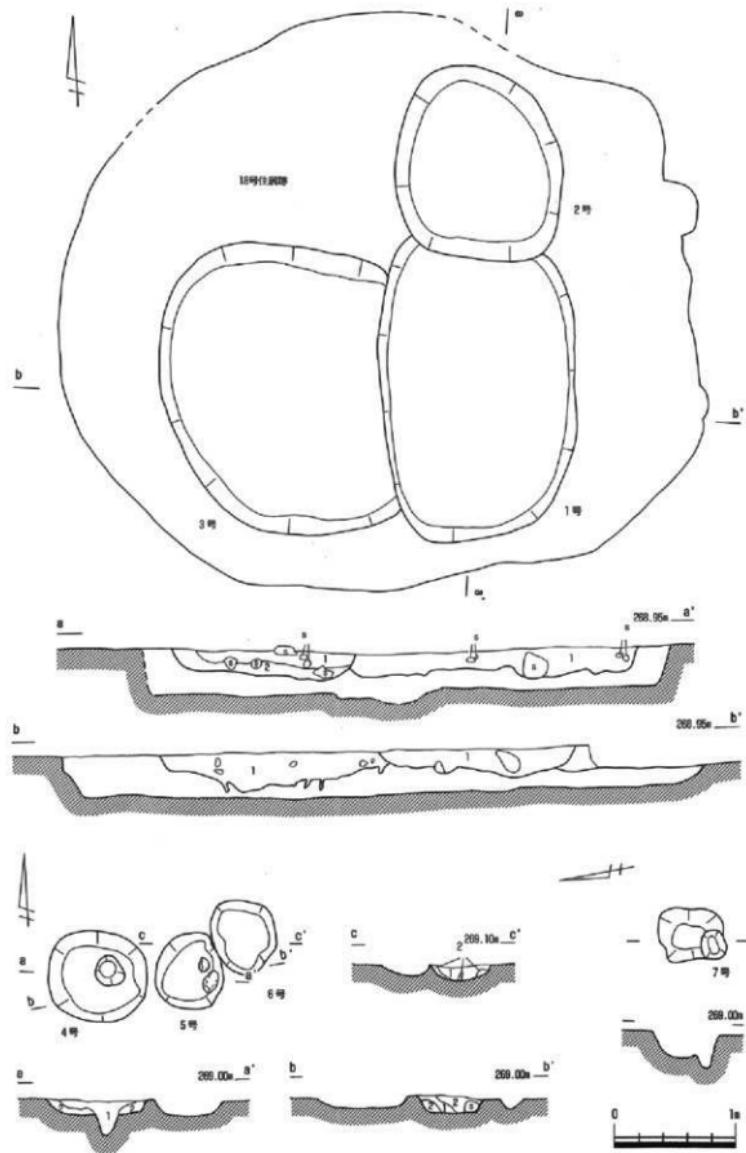
No	位置	開口部 形 長軸×短軸	底部 形 長軸×短軸	深さ	遺物・覆土・備考 (特徴番号、図版番号)
11	B-6・7	円形 (125~130)	円形 (100~104)	20	出土土器 第39図、図版22 備考 密集した環を検出。12号土坑、P11との新旧関係は不明。第35図、図版9
12	B-6・7	円形 (147)~160	円形 (129)~136	37	出土土器 第40図、図版22 備考 密集した環を検出。11・13号土坑との新旧関係は不明。第35図、図版9
13	B-7	円形 (135)~150	円形 (110)~115	25	覆土 1は茶褐色土で、2は暗茶褐色土。3は灰茶褐色土、4は暗灰茶褐色土で褐色土ブロックを含む。5は暗茶褐色土で風化した小礫を含む。備考 12・14号土坑との新旧関係は不明。第35図、図版9
14	B-7	円形 140~150	円形 132~116	55	出土土器 第40図、図版22 覆土 1a~cは炭化物・褐色土粒子を含む暗茶褐色土、2・3は暗灰褐色土、4a・b・5は暗茶褐色土、6は黒褐色土、7a~cは暗灰茶褐色土、8は暗茶褐色土 備考 13号土坑よりも新しい。第35図、図版9
15	B-7	円形 61~67	円形 39~45	9	覆土 1は暗灰褐色土、2は黒褐色土、3は暗灰茶褐色土。第35図
16	B-7	楕円形 90×70	楕円形 72×53	12	覆土 1は暗灰褐色土、2は暗褐色砂質土。第35図、図版9
17	A・B-6・7	楕円形 173×142	楕円形 1451×118	18	出土土器 第40図、図版23 備考 20号住居跡・4号半蔵木柱遺構より新しい。第35図、図版10
18	A-6	不整楕円形 131×102	不整楕円形 75×65	48	出土土器 第40図、図版23 覆土 1は黒褐色土、2は暗茶褐色土、3a・bは暗灰茶褐色土、4は褐色土、5は灰茶褐色土、6は黒褐色土 備考 20号住居跡より古い。第36図
19	A-6	不整楕円形 87×45	不整楕円形 49×15	25	出土土器 第40図、図版23 備考 20号住居跡・18号土坑より古い。第36図
20	A・B-6	楕円形 67×55	楕円形 51×42	15	備考 20号住居跡より古く、21号土坑との新旧関係は不明。第35図、図版10
21	A・B-6	(楕円形) (60×55)	(楕円形) (33×8)	28	備考 20号住居跡より古く、18・20号土坑との新旧関係は不明。第35図、図版10
22	A-7	(楕円形) (75×60)	(楕円形) (50×40)	(12)	備考 1号墓石との新旧関係は不明。第35図

表3 ピット計測表

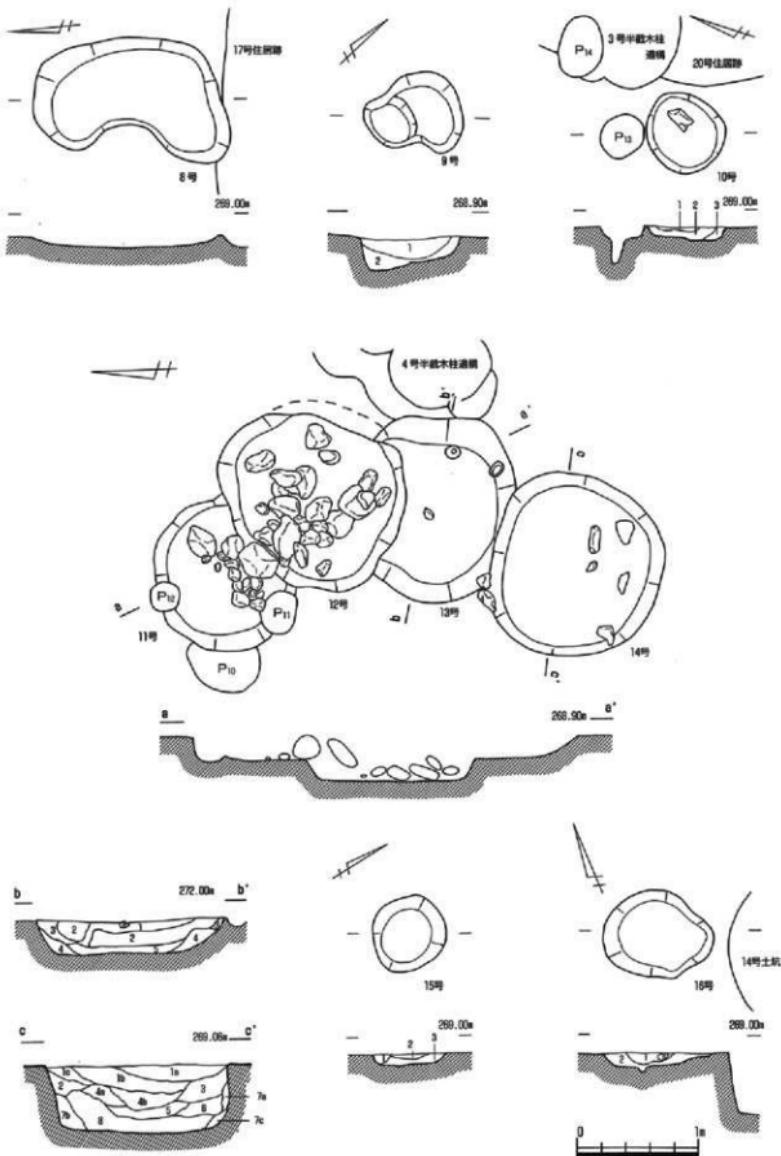
(推定値)、単位:cm

	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14	P15
長径 (30)	(45)	56	47	32	53	52	57	71	(61)	35	24	36	51	40	
短径 25	(26)	41	35	24	28	46	45	64	46	28	23	31	35	32	
深さ 62	12	11	16	17	15	22	12	13	13	21	25	31	50	13	

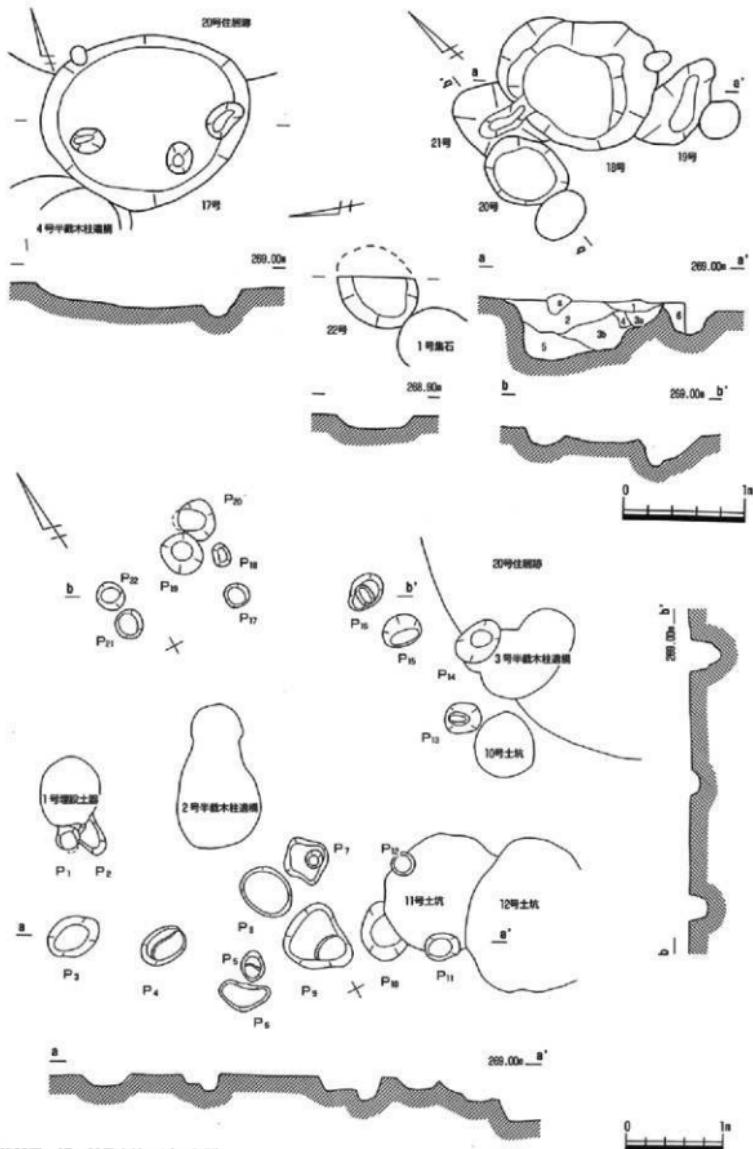
P16	P17	P18	P19	P20	P21	P22
43	26	24	43	43	30	29
32	25	17	38	36	38	27
24	11	6	32	47	14	20



第34図 1～7号土坑



第35图 8~16号土坑



第36図 17~22号土坑、ピット群

出土遺物（第37～40図、図版20～23）

1号土坑出土土器・石器（第37図、図版20）

1～10は縄文施文部を沈線で曲線的に区画した文様が描かれた深鉢の口縁部・体部破片で、大木10式に比定される。11～14は地文に縄文が施された口縁部・体部破片で、いずれもL Rの縄文が施され特に13・14は0段多条の縄が用いられ大木10式に併行する土器である。また、本土坑の覆土から内側に漆の付着が認められる土器片が出土したが（図版〇）時期は不明である。15は花崗岩製の磨石、16は砂岩製の磨石で凹石に転用された石器である。17は花崗岩製の凹石で両面にそれぞれ2箇所の凹部が見られる。

2号土坑出土土器（第38図、図版21）

1～5は縄文施文部を沈線で曲線的に区画した文様が描かれた深鉢土器の体部破片で、大木10式に比定される。6は口縁部がほぼ垂直に立ち上がり地文に縄文をもつ深鉢で大木10式に併行する土器である。

3号土坑出土土器・石器（第38・39図、図版21）

1～15は縄文施文部を沈線で曲線的に区画した文様が描かれた土器、1・6は縦長に、14・15は横長に文様が施され、いずれも大木10式に比定される。16～19は縄文施文部を沈線と陰帯で曲線的に区画した文様をもつ土器で大木10式に比定される。20～25は地文に縄文が施された土器で大木10式に併行し、22は原体の結節痕が斜走している。24は口縁が内済し、25は「く」字形に口縁が屈曲する土器で、いずれも大木10式に併行する土器である。26は頁岩の縱長剥片を素材とした搔器で、剥片基部に剥離を施し刃部を作出している。

4号土坑出土土器（第39図、図版22）

1は地文に縄文をもつ土器で、体部には細かいL Rの縄文が施文された縄文晩期の土器である。

5号土坑出土土器（第39図、図版22）

1・2は体部破片で斜縄文が施された土器である。時期は不明。

8号土坑出土土器・石器（第39図、図版22）

1～3は口縁部が外反し体部が膨らむ粗製土器で、1・2は口縁部と体部の間に無文帶が形成され、3は無文帶と沈線が施される。体部には結節縄文が施文され、4も含めて縄文晩期に比定される土器である。5は横長の剥片を素材とした竈状石器で、背面には縄の自然面を腹面には主要剥離面を大きく残し、剥片の一端に角度の大きい刃部を作出している。石質は頁岩である。

11号土坑出土土器（第39図、図版22）

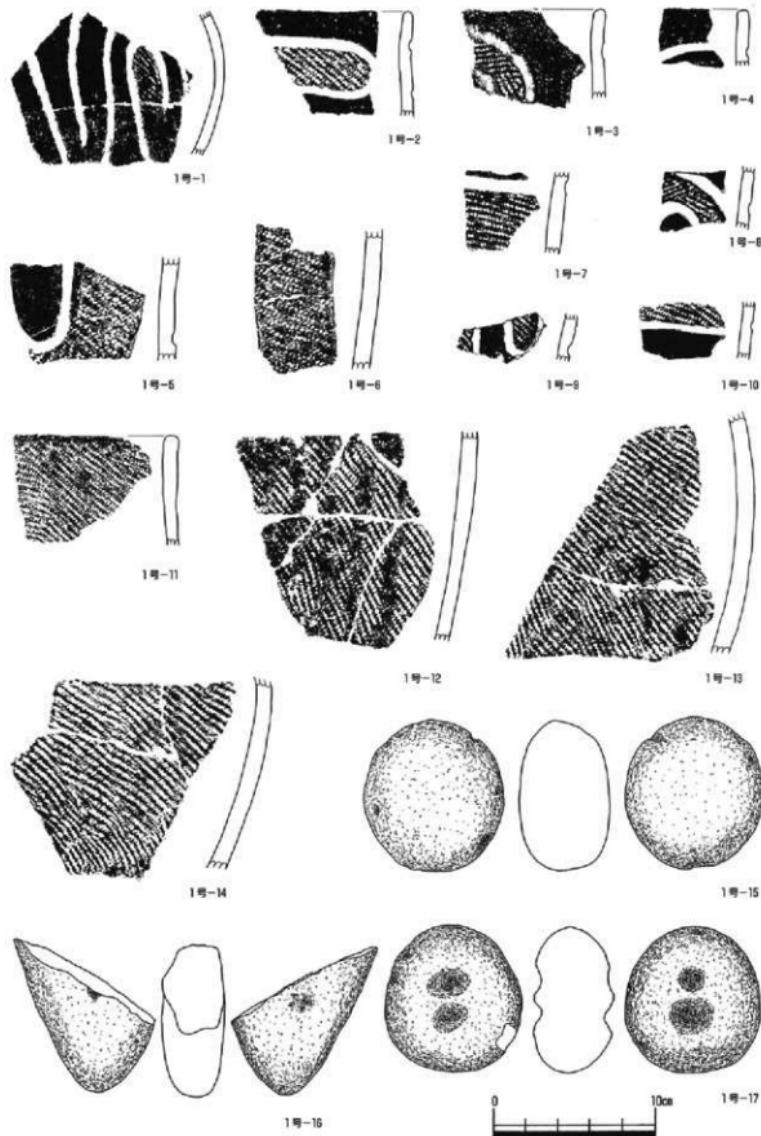
1～4は縄文施文部を沈線で曲線的に区画した文様が描かれた土器で、L Rの縄文が施され同一固体と推測される。いずれも大木10式に比定される土器である。

12号土坑出土土器（第40図、図版22）

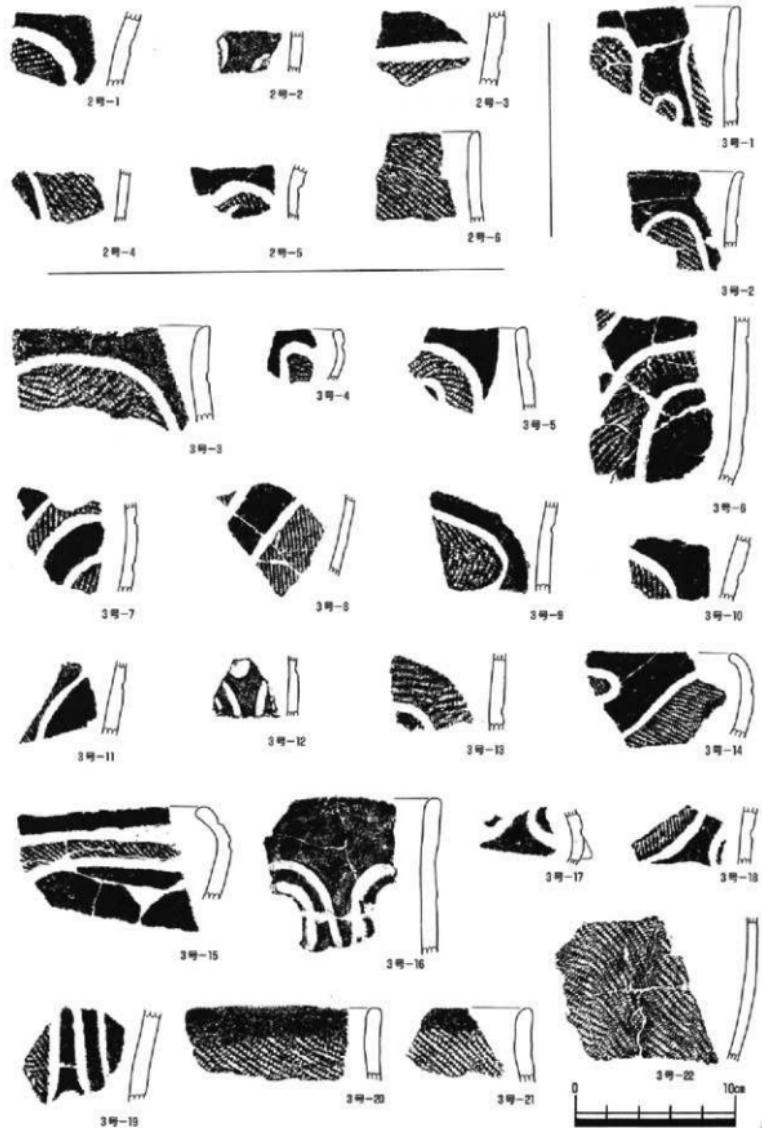
2・3は縄文施文部を沈線で曲線的に区画した文様が描かれた土器で大木10式に比定され、1・4は地文に縄文が施文され大木10式に併行する土器である。

14号土坑出土土器（第40図、図版22）

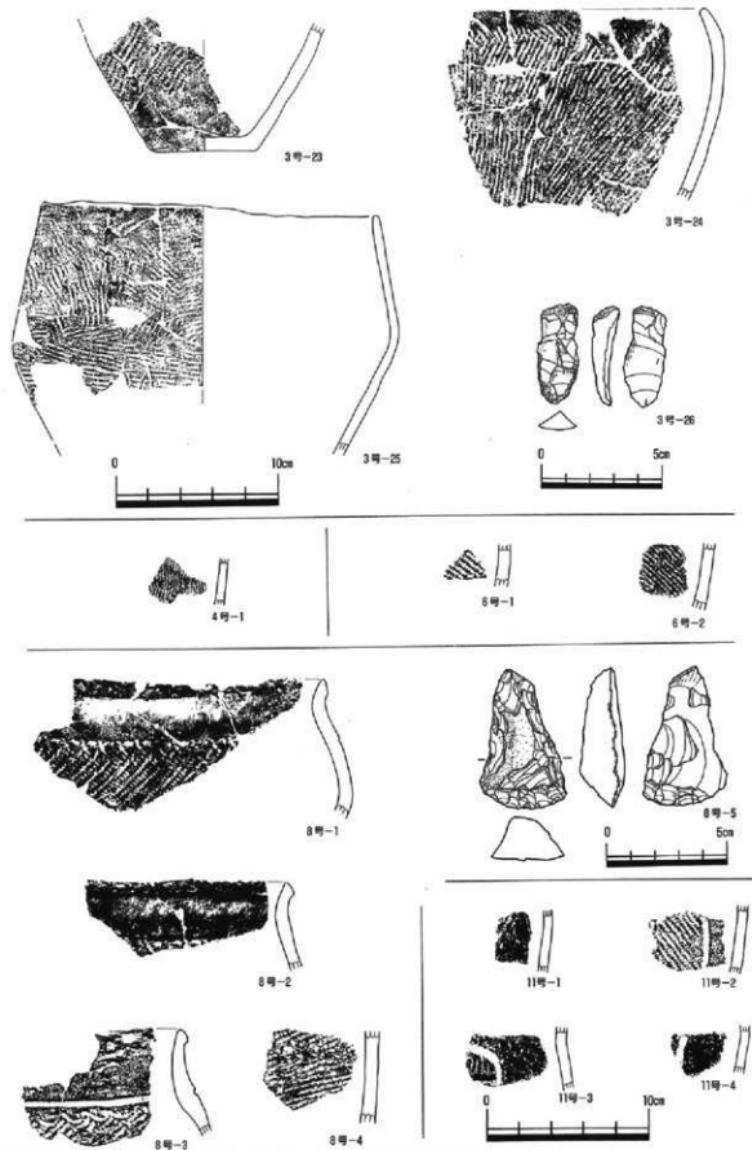
1は口縁が内済し、沈線と突起による浮線状の文様が施されその下には4条の沈線が巡る浅鉢である。2・3は口縁が外反ぎみに立ち上がり、口端に刻目が施されその下には4条の沈線が巡る深鉢で体部には無筋の縄文が施される。縄文晩期の大洞A式で覆土最上位から出土した。



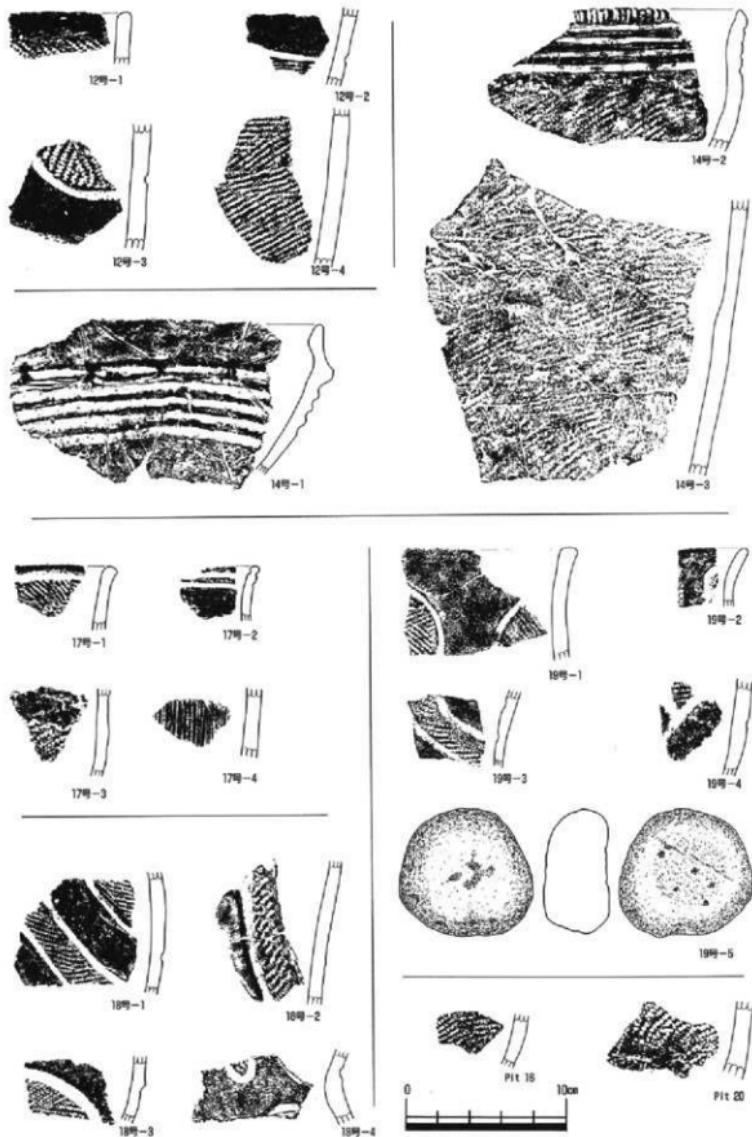
第37図 土坑出土遺物(1) 土器拓影図、石器実測図%



第38図 土坑出土遺物(2) 土器拓影図、土器実測図%



第39图 土坑出土遗物(3) 土器实测·拓影图、土器实测图%、石器实测图%



第40图 土坑出土遗物(4) 土器拓影图%、石器实测图%

17号土坑出土土器（第40図、図版23）

1は口端が肥厚した縄文中期末の土器である。2は口縁部の内・外に沈線が巡り3は体部に結節縄文が、4は体部に条痕が施され、縄文晩期後葉に比定される土器である。

18号土坑出土土器（第40図、図版23）

1～4は縄文施文部を沈線で曲線的に区画した文様が描かれた土器で大木10式に比定される。

19号土坑出土土器・石器（第40図、図版23）

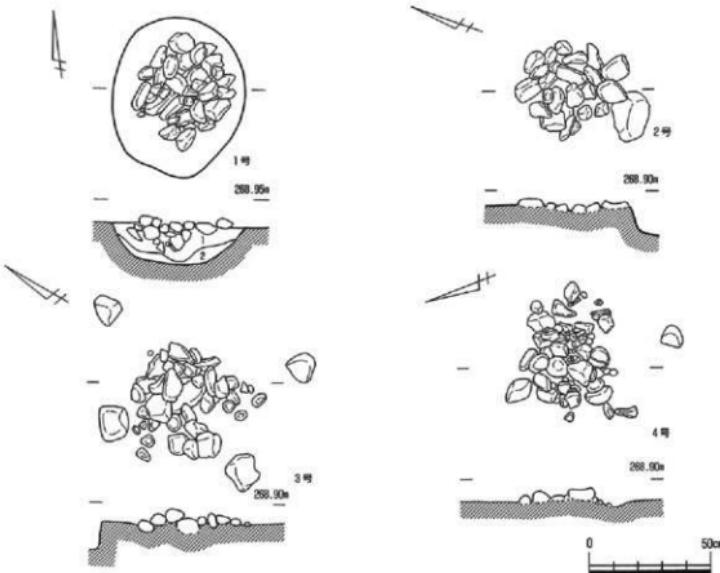
1～4は縄文施文部を沈線で曲線的に区画した文様が描かれ、大木10式に比定される土器である。5は両面とも平滑であるが浅い凹部が見られ、磨石を凹面に転用した石器である。石質は花崗岩。

Pit16、Pit20出土土器（第40図、図版23）

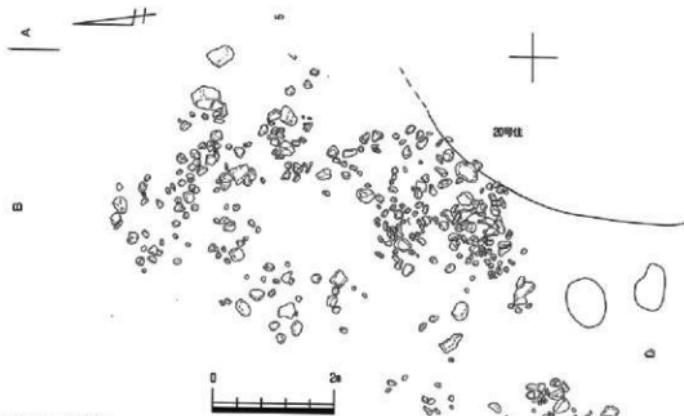
Pit16は体部破片、Pit20は底部付近の土器で斜縄文が施される。時期は不明。

第5節 集 石

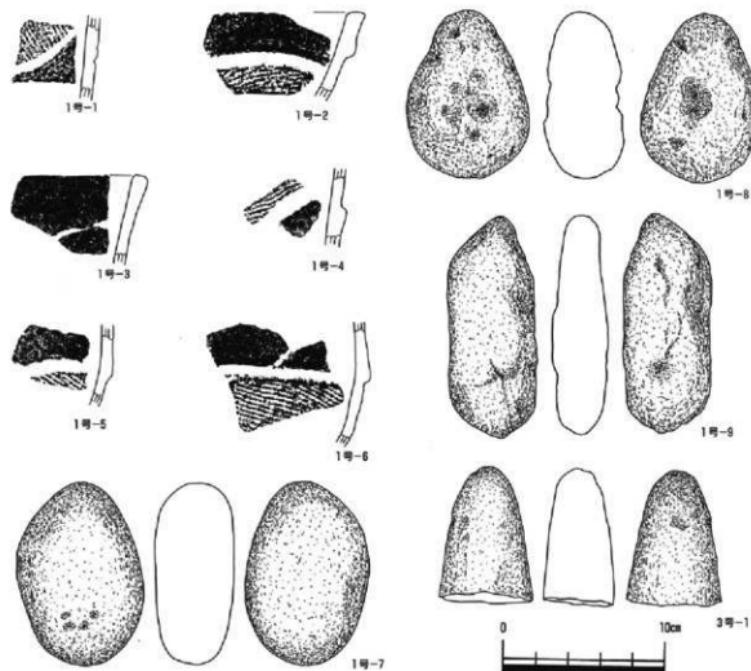
礫が密集して検出された区域は3箇所を数える。集石(1)はB-5・6グリッドにかけて東西6m、南北8mの範囲で検出された（第42図）。耕作土直下のⅡ層下位からⅢ層上面で確認されたもので、20号住居跡付近ではⅢ層面が橙褐色を呈し硬い土質も観察され、熱を受けた痕跡と推測される。集石(2)はA-C-7～9グリッドにかけて東西10m、南北7mの範囲で検出された（第44図、図版10）。耕作土直下で確認され西と南側で基盤整備による搅乱を受けていたが、平面プランは環状を呈し、密集した礫の集合体の様相を呈する。さらにD-E-7～10グリッドにかけて4～10mの範囲から検出されたが、耕作土直下の砂疊層からの出土



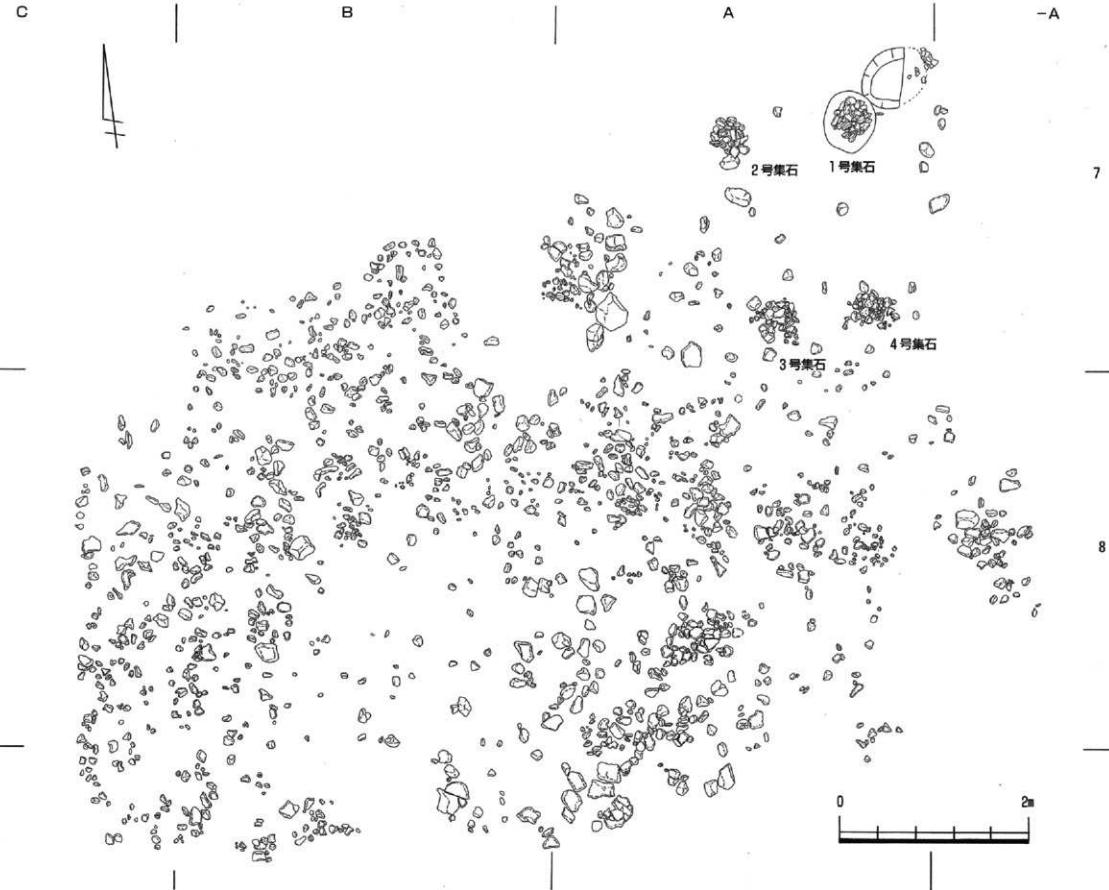
第41図 1～4号集石



第42図 集石(1)



第43図 1号集石出土遺物



第44図 集石(2)

であったため、遺構としての取扱いには至らなかった。ここではA-C-7~9グリッドで検出された4基の集石の記述を行う。

1号集石（第41図、図版10）

A-7グリッドで検出され、径40~50cmの範囲に角礫・円礫がまとまりⅡ層下位で検出された。楕円形の掘り込みをもち65×54cmの規模で確認面からの深さは17cmを測る。掘り込み下位では礫は疎となり土器片がまとまって出土した。覆土は1が暗茶褐色土で炭化物・褐色粒子が多く含む。2は暗灰褐色土で褐色土をブロック状に含む。

出土遺物（第43図、図版23）

1は縄文施文部を沈線で曲線的に区画した文様が描かれる土器。2・4~5は縄文施文部を沈線と隆線で曲線的に区画した文様が描かれる土器で、3も同一固体である。出土した土器は大木10式に比定される。7は両面に磨痕のある砂岩製の磨石で、8・9は凹石で、8は扁平な花崗岩の両面に複数の凹部があり、9は扁平な楕円形礫の片面に凹痕が見られる。

2号集石（第41図、図版10）

A-7グリッドで検出され、径45~55cmの範囲に角礫・円礫が密集している。耕作土直下で検出され、掘り込みは認められなかった。

3号集石（第41図、図版10）

A-7グリッドで検出され、径50~55cmの範囲に扁平角礫・円礫が密集しているが、1・2号に比べると礫の大きさが不揃いとなる。耕作土直下で検出され、掘り込みは認められなかった。

出土遺物（第43図、図版23）

1は端部に敲打痕が残り、一部研磨による整形が観察され、石錐の可能性がある。

4号集石（第41図、図版10）

A-7グリッドで検出され、径50~60cmの範囲に礫が密集しているが他の集石に比べると小粒の礫を多く含む。耕作土直下で検出され、掘り込みは認められなかった。

第6節 包含層出土遺物

(1) 土器

このたびの調査で包含層から出土した土器類は大きく縄文中期と晩期に分けられ、さらに文様の特徴や器形から分類を行った。

第1群土器 縄文中期の土器を本群とし、大木10式に比定される土器である。

第1類土器（第45図、図版24）

1~22は縄文施文部を沈線による曲線で区画し、文様を描き出した土器である。ほとんどが深鉢であるが21・22は注口土器の口縁である。

第2類土器（第45・46図、図版24・25）

23~36は縄文施文部を沈線と微隆起線による曲線で区画し、文様を描き出した土器である。区画文は凹線とミミズ腫れ状の線で構成され、区画文は横長の構図をとるものが多く見られる。

第3類土器（第46図、図版25）

36~43は縄文施文部を沈線と陸帯による曲線で区画し、文様を描き出した土器である。1・2類と比較すると断面の凹凸が明確にあらわれている。

第4類土器と土製品（第46図、図版25）

44~46は地文に縄文が施される土器、50~53は底部破片で地文に縄文が施文される土器である。47~49は小型の土製円盤で縄文部を沈線、陸線で区画した文様が施されている。

第2群土器（第47図、図版25・26）

縄文晩期後葉の土器を一括して本群とし、大洞A式に比定される土器である。

54~64、66~68は鉢または浅鉢で、口縁に工字文や沈線が巡る土器である。65は文様をもたない浅鉢。69・70は「π」字状文をもつ壺、76は沈線が巡る台脚片である。72~86は深鉢で72~78は体部に結節縄文が施される土器で、79~81は櫛歯状の条痕が見られる深鉢。82~86は山形の押形文の施された深鉢の体部破片である。

（2）石器

出土した石器は石鍬10点、搔器2点、石槍3点、石錐4点、削器1点、鎗状石器10点、打製石斧1点、石鍤1点、磨製石斧4点（未製品3点を含む）、凹石7点、磨石5点である。

石 鍬（第48図、図版26）1~3は薄手のつくりの無茎石鍬で、4~10は有茎石鍬で5と7の基部にはアスファルト状の付着が認められる。2・9・10は玉髓質で他は頁岩。

搔 器（第48図、図版26）11は剥片の端部に刃が作出された小型の搔器で、12は剥片の反り具合と両刃の加工から搔器とした。頁岩の剥片を素材としている。

石 槍（第48図、図版26）13・15は器両面に剥離が施されるが、14は素材の主要剥離面を大きく残し正三角形の断面をもつ厚みのある石器である。14・15は頁岩製。

石 锥（第48図、図版26）いずれも素材の剥離痕を残す石器で、18・19は刃部を欠損している。16・17は刃部の断面が三角形を呈する石器である。石材は頁岩。

削 器（第48図、図版26）石刀状の頁岩の剥片を素材とし、基部に剥離を施し刃部を作出する。

鎗状石器（第48・49図、図版27）21~26・29は素材の主要剥離面が残る石器で、他は両面に剥離がおよぶ。25・27は細かい剥離を施し刃部を作出している。いずれも石材は頁岩。

打製石斧（第49図、図版27）31は扁平な形態をもつフォルンフェルス製の石器である。両側面に研磨痕が見られ、本遺跡出土の石器のなかでは異質な存在である。

石 鏴（第49図、図版27）32は両面が研磨された扁平な石器で、縁の周りには溝が巡る。溝には敲打痕が残るが両面が平滑なことから磨石を転用したものと推測される。砂岩製。

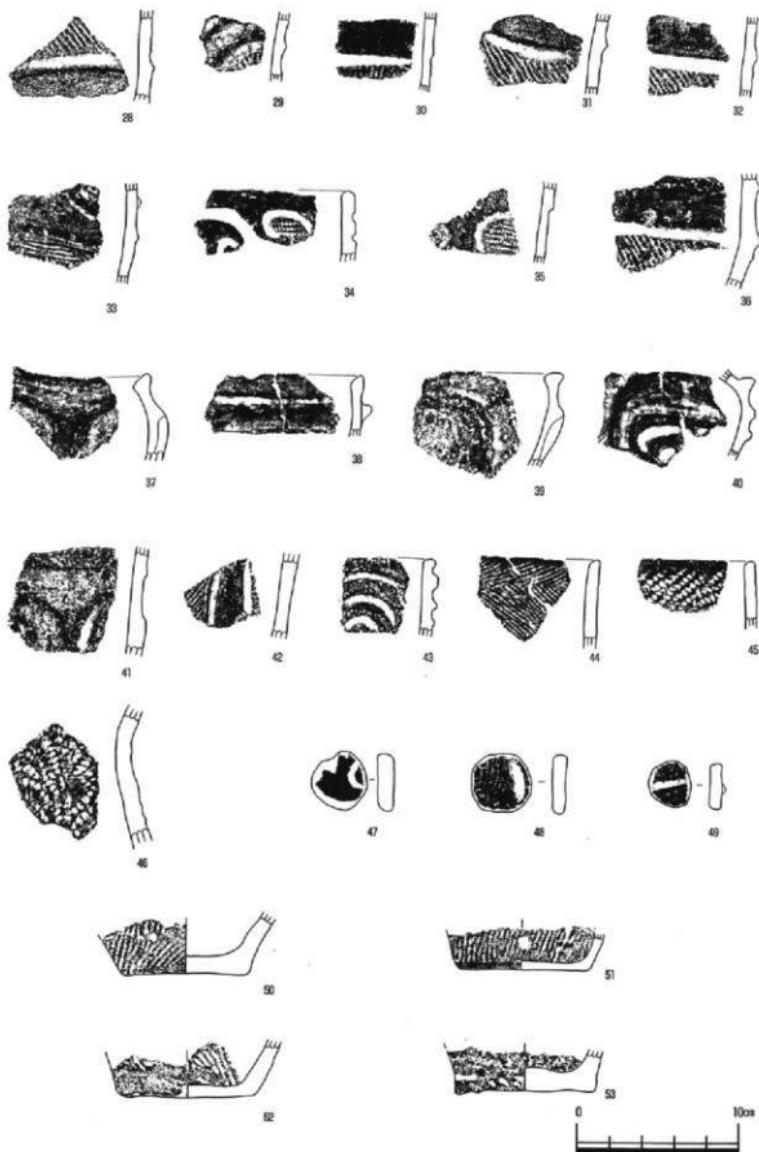
磨製石斧（第49図、図版27）33は体部から基部を欠損している小型の磨製石斧で、34~36は縁辺部に敲打痕が残り、全体の形状から磨製石斧の未製品と考えらる。

凹 石（第49・50図、図版28）37~43は両面または片面に凹部が残る石器で38・39・42は片面に研磨痕が観察されることから磨石の転用と考えられる。石質はいずれも花崗岩である。

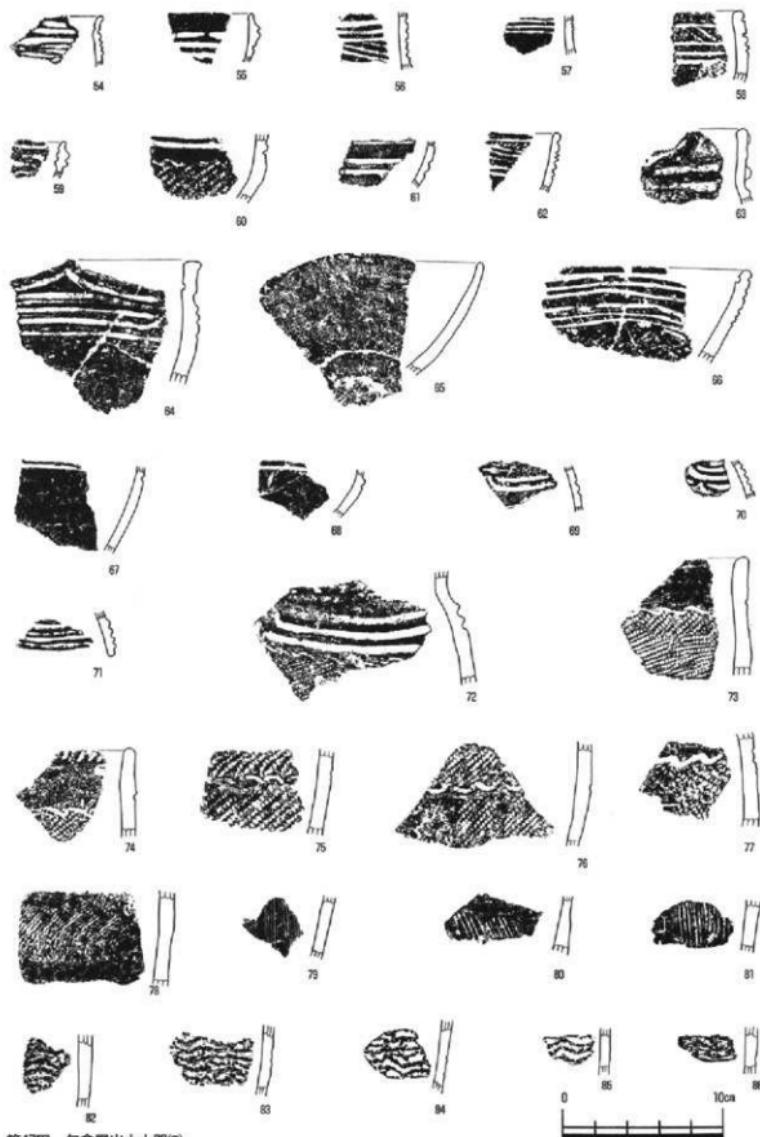
磨 石（第50図、図版28）44~49は両面に研磨痕が観察される。45・46は丸みのある花崗岩砾を、47~49は砂石の扁平砾を用いている。



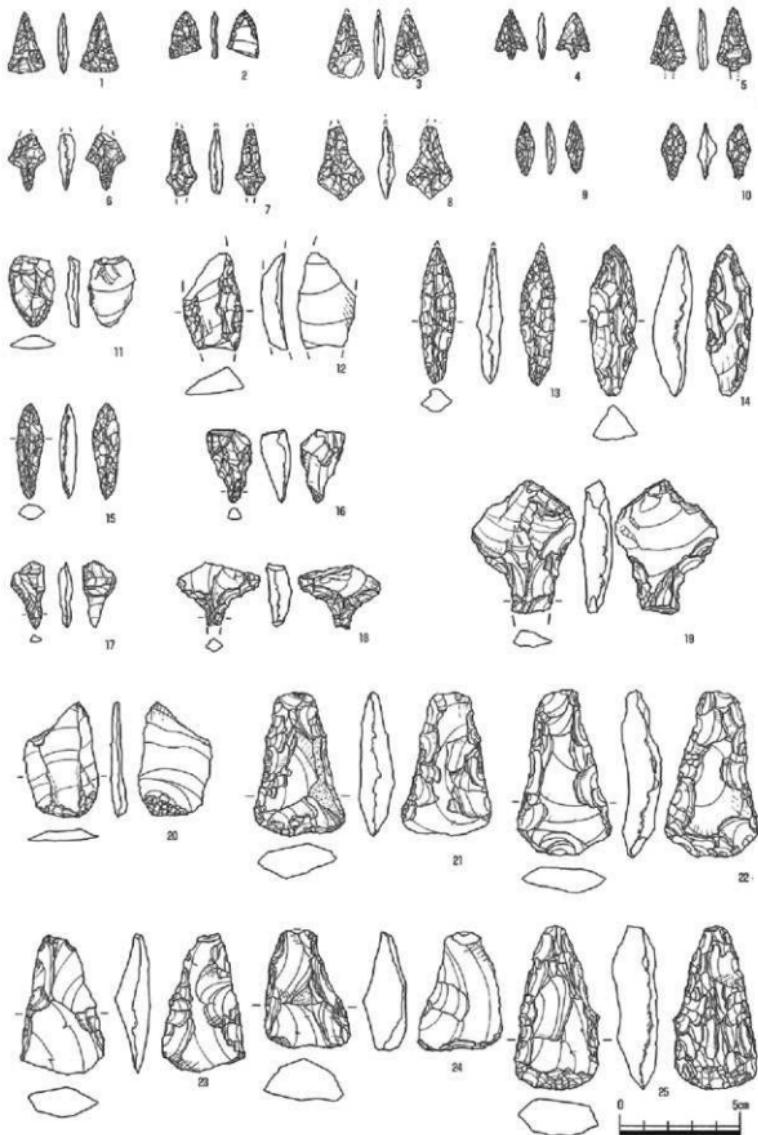
第45圖 包含層出土土器(1)



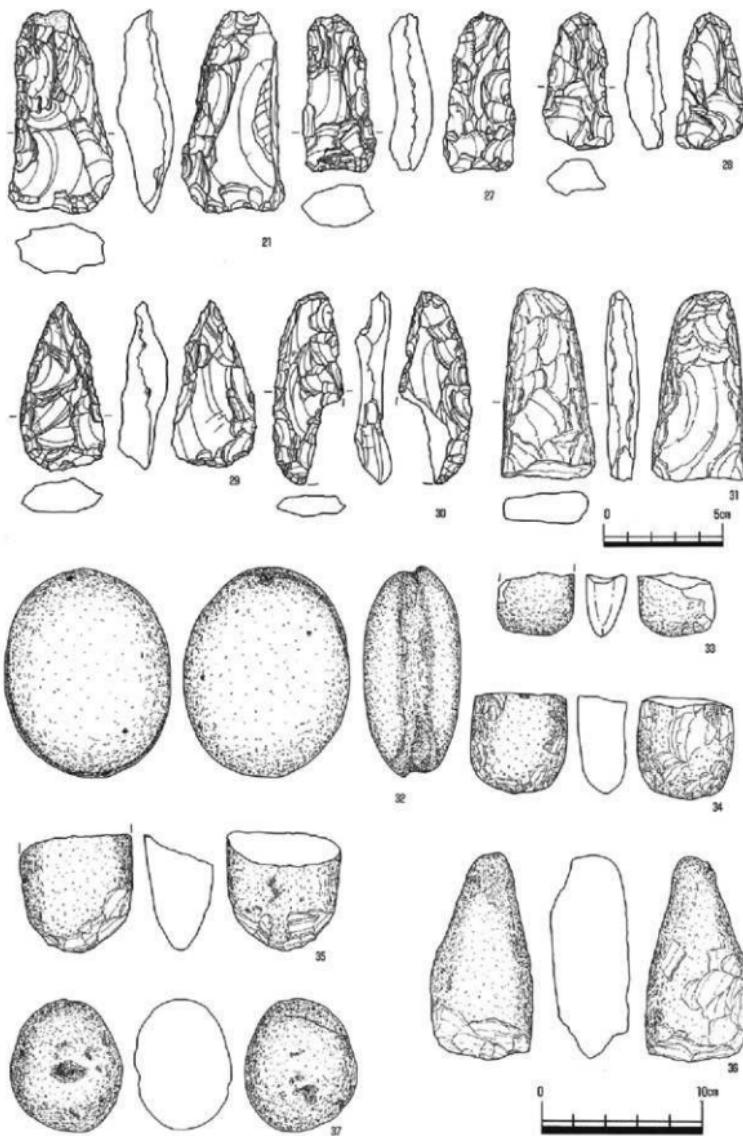
第46図 包含層出土土器(2)



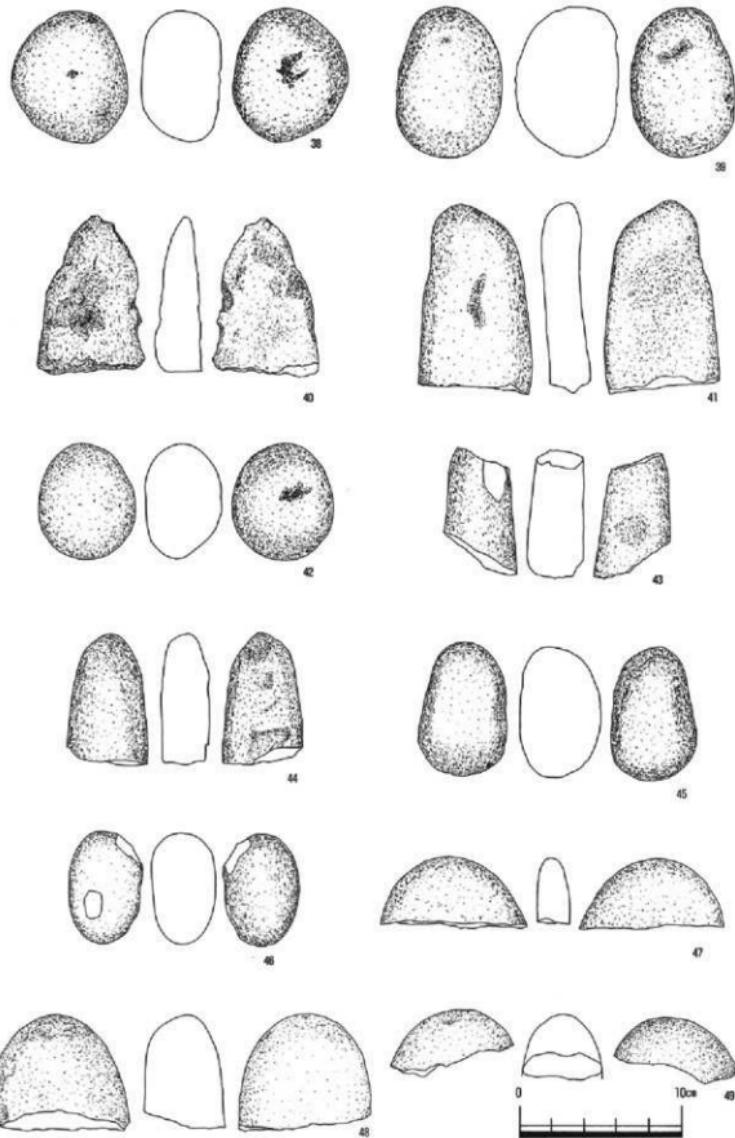
第47図 包含層出土土器(3)



第48図 包含層出土石器(1)



第49図 包含層出土石器(2)



第50図 包含層出土石器(3)

第IV章 まとめ

このたび行われた第二期調査で、遺跡西北側の集落構成を明らかにすることができた。台地北辺に沿って複式炉をもつ住居跡が4棟検出され、第一期調査の住居跡配置と照合すると舌状台地基部に直径50~60mの環状集落の存在を浮き彫りにすることができる。円弧状に点在する住居跡の内側には広場が形成され、土坑、埋設土器、集石、それにこのたび新たに発見された半截木柱遺構が配置される集落構成となる。

住居跡をはじめとする遺構は部分的に基盤整備で搅乱を受けていたが、比較的良好な遺存状況であった。4棟の住居跡には埋設土器・石組部・前庭部からなる複式炉が設置されており、第一期調査で検出された複式炉と同様の形態を示す。住居跡の柱穴の配置では18号は5本、19号は3本、22号は住居の東半分の調査で2本をそれぞれ検出しているが、複式炉の長軸線を境に線対称の位置に柱穴が設置されている。

特記事項として半截木柱遺構の発見がある。これまで北陸地方の縄文晩期遺跡で発見例が相次ぎ、縄文中期では三内丸山遺跡等で巨木遺構が発見され、湿地遺跡の条件のもと、当時の木柱が確認されている。しかし、本遺跡は高台に立地しているため有機質の遺物の出土は見られず、半截木柱遺構の確認は遺構の平面と断面における土質の精査で明らかになったものである。今後は低湿地以外の遺跡においても木柱遺構の発見が可能になったことになる。また、柱の配置は方形を呈し、柱跡の中心から中心までの距離は3.5mを測り、「縄文の間尺」といわれる35cmの10倍の長さに値し、柱の直径は断面観察から50~80cmと推定され、検出した炭化材の樹種同定ではクリ材が多数をしめている。これらのことから長者屋敷遺跡で発見された半截木柱遺構も北陸地方や三内丸山遺跡等で見つかっている木柱遺構と同様に、クリ材を用いた巨木遺構の範疇としてとらえることができる。さらに覆土出土の土器は縄文中期末の特徴をもつもので他の時期の土器は含まれていないことから、半截木柱遺構の時期を大木10式期と特定することができる。遺跡は幸いにして現状保存となつたため、今後は木柱遺構の性格についてさまざまな分野から検討を加えてゆく所存である。

出土土器は縄文中期と晩期である。晩期の土器はほとんどが表土や包含層からの出土で遺構から検出されたものは少ないが、工字文や沈線が描かれる大洞A式土器とそれに伴う結節縄文が施された粗製土器である。一部の粗製土器には北陸地方で見られる押形文をもつ土器の出土がある。中期では住居跡覆土や複式炉からまとまった土器が出土した。18号住居跡の炉埋設土器は逆巻き渦文に「U」字状文が描かれた炉埋設土器Aと、「S」字状文が施される炉埋設土器Bがセットで検出された。19号住居跡の炉埋設土器では「U」字状文をもつ炉埋設土器Cと波渦文が描かれた炉埋設土器A・Bが出土したが、炉の作り替えが想定され、「U」字状文をもつ炉埋設土器Cが古く波渦文が施される炉埋設土器A・Bが新しいという新旧関係が見出された。21号住居跡では炉埋設土器に波渦文が描かれ、床面からは雁股文が描かれた土器が出土し、22号住居跡の炉埋設土器では「C」字状文をもつ炉埋設土器Cと曲線文が施された炉埋設土器Bがセットで検出された。これらのことから18・19・21・22の各住居跡は時間的に近い関係にあるが時期差の想定も可能である。

住居跡覆土や土坑覆土から出土した縄文中期末の土器を区画文の違いから、1は縄文施文部を沈線で区画する土器、2は縄文施文部を沈線と微隆起線で区画する土器、3は縄文施文部を沈線と隆起部で区画する土器の3種類に細分し記述してきた。これらの土器と複式炉埋設土器の区画文を比較すると、炉埋設土器の縄文施文部はすべて沈線で区画されており、2・3の区画文をもつ土器は検出されていない。このことは時間差によるものか他の要因によるかは今後の検討課題である。

長者屋敷遺跡出土漆関係資料について

国立歴史民俗博物館情報資料研究部 永嶋正春

はじめに

平成10年度に実施された標記遺跡の発掘調査において、漆の付着した縄文土器片5点が検出された。漆塗土器の断片ではなく、いわゆる漆液容器片と捉えられるものである。漆作業に伴うパレット的なものの出土は、その地に漆文化が定着していたことを示しており、その地の文化的諸様相を考察する上で重要な手がかりとなる。

以前に実施された発掘（昭和52～57年）においても、縄文時代に属する漆液容器の類が検出されており、また周溝を伴う弥生時代の墳墓からは漆製品の塗膜断片が出土している。

長者屋敷遺跡の漆関係資料は、当時の文化的状況を読み解く上で重要な存在であり、そのためにもまずは漆関係資料の実態把握に努める必要がある。本稿では、この目的に沿って筆者が行った調査結果のあらましを示し、本遺跡理解のための基礎資料とするものである。なお、平成9年秋に長井市古代の丘資料館が行った企画展示「ジャパン—漆器と漆の文化史展—」図録にその一部を掲載しているので併せて参照されたい。

調査結果

調査対象資料と調査方法

調査は、昭和52～57年及び今回（平成10年度）の発掘資料のなかで、漆製品、漆液容器、赤色顔料資料を対象とした。調査資料の選別は、発掘調査担当者並びに永嶋が行い、漆関係資料である可能性を最大限に考慮した上で、出土資料を網羅的に観察した。この観察により選別された資料については、更に詳細な肉眼観察あるいは光学顕微鏡観察を実施して資料としての妥当性を検討した。このようにして選択された漆関係資料について、蛍光X線分析法による赤色顔料の判別、微小試料を採取した上での断層薄片試料の観察、AMS法による漆膜・漆塊の炭素14年代測定などを実施した。この内、漆膜・漆塊の炭素14年代測定については現在実施途中であるため、結果については改めて何らかの機会に公表することとしたい。

縄文時代中期の漆液容器

平成10年度の調査で、縄文時代中期に属する漆付着土器片5点が出土した。いずれも小片であるが、その内面を中心にやや光沢を有する暗赤褐色～黒色の樹脂状物質が付着しており、一部には外面への付着も認められる。付着物は漆膜状をした薄手の付着状況を示すものから、やや厚手で表面が畳曲した様相を示すものまで外観的な相違はあるものの、いずれも漆としての性状範囲に納まるものである（図版29-1）。漆塗工程上のパレット（漆液容器の一形態）と考えるのが適切であり、いわゆる漆塗土器の断片ではない。一部に熱によってクロメられた痕跡が認められるので、生漆をクロメた土器の可能性も考慮する必要がある。同一

個体に属するかと思われる断片が認められることから、元の個体数は5を下回ることになろう。

昭和52～57年発掘の資料についても、再検討の結果縄文時代中期に属すると思われる1点の漆液容器を検出することができた。鉢形土器の下半部を転用したもので、内面に赤褐色～黒色の膜状付着物が残存する。器表面から剥離消失した部分も多いが、外面にもごく僅かな付着が認められる。熱によって漆をクロメた容器と思われるが、クロメ漆の塗装に用いたパレットの可能性もある（図版29-2-4）。

縄文時代晩期の漆液容器

縄文時代晩期に属する漆液容器（土器）としては、昭和52～57年の発掘資料の中に少なくとも5点を確認することができる。前記企画展図録でいえば、資料No.14（資料A）、資料No.4（資料B）、資料No.5（資料C）、資料No.13、資料No.17である。

No.14（資料A）、No.13の淡褐色を呈する漆は、厚みの大きな固まり状であり、表面にはあらい皺状の屈曲を有している。外観的には極めて生漆的であるが、層断面で見ても生漆であることが肯定される漆液容器である。このうち、No.14（資料A）の内底面とそれに接する漆面には、発色の良好なベンガラ（赤色酸化鉄）が全面に付着している。しかしながら層断面で見ると、ベンガラが漆液中に積極的に混和した形跡は認められない。このことは、No.14（資料A）の土器は先行して良質な赤色顔料（ベンガラ）の容器として使用された後、生漆液の容器となったことを意味している。

No.4（資料B）、No.5（資料C）、No.17の漆は、No.14（資料A）、No.17と比べれば薄手に付着している。なかでも特にNo.4（資料B）の漆は、最も薄くかつしっかりと器表面に付着しており、やや光沢のある赤褐色～黒色の色調に加え、円周方向に漆を使い切った痕跡などはこれがクロメ漆のパレットとして使用されたことを示すものと考えてよからう。台付土器の台部の凹みを利用した点などは、少量のクロメ漆を有効に使用するための合理的な選択といえる。No.5（資料C）、No.17の漆は、膜厚はかなりの程度薄いものの、多孔質でやや強靭さに欠けたところが認められ、あまりナヤシのかかっていない状態の漆（成分内容の分離が進んだままの漆）と考えた方が納得し易い。恐らく生漆のままの容器であろう。

漆液容器以外の縄文時代の漆資料

No.20（資料F）は、ベンガラが厚手に付着した縄文時代晩期の自然礫であるが、層断面薄片試料で見るべんがら粒子の周囲を漆様樹脂が埋めている状況を観察できることから、ベンガラ漆を調製したときの器具であった可能性を検討すべきである。

No.18（資料G）は縄文時代晩期の土器の底部片であるが、外底面の網代底や脇部の縄文にベンガラ漆の付着が認められる。付着の状況並びにベンガラ顔料と漆の混和が不均質であることからすると、漆作業環境下における汚れ的な付着と考えてよい。

No.11（資料H）は、縄文時代中期に属する注口のある浅鉢形土器であり、注口を中心とする外面の一部に炭化物様の付着物が認められる。層断面で見ると熱の影響を受けた漆と見られる部分があるところから、漆塗装が行われていた可能性を視野に入れて更に詳細な調査を行う必要がある。

弥生時代中期の漆塗膜片

弥生時代中期に属する周溝のある墳墓からは漆片が検出されている。全17片を合わせても0.235gにしかならない塗膜片である（図版29-5、6）。裏面には細かな布目痕跡が観察できるものの（図版29-7、8）、胎を推定するための手がかりはほとんど認められない。これら資料の表裏を詳細に観察するとともに、ごく一部を採取して層断面試料を作製し検討した結果、概ね次のようなことが判明した。

- ・裏面に認められる布は、絹布である。織り密度が経緯糸共に1cm当たり40~50本からなる絹布を1枚、何らかの胎の上に漆で張り込み、その上に2層の漆（素グロメ漆）を塗布している。
- ・全層厚としては、厚いところで0.18mm程度である。その内、上塗りの漆層はどこでもほぼ厚さ0.06mm（60ミクロン）程と一定している。下塗りの漆の厚さは、絹布表面の凹凸に応じた変化を示しているが、およそ上塗り漆層の厚さの数分の一程度である。

これらの調査によつても胎の構成素材を判断することができなかつたが、漆塗り層の構成が比較的簡単であること、上塗り漆の厚みが均一であること、残存漆膜の面積が小さいことなどをも考慮すれば、通常のごとく木胎である蓋然性は高い。

おわりに

長者屋敷遺跡における縄文時代中期末葉に遡る漆液容器の存在は、その地における漆文化が少なくとも縄文時代中期には栄えていたことを示すものである。現時点では縄文時代の漆製品がほとんど検出されていないとはいへ、豊富で多様な漆製品が確実に存在したはずであり、また漆文化に並行して各種の文化が維持され機能していたこともまた確実視される。

弥生時代中期の漆製品、なかでも絹を張り込んだ漆製品は未だ国内では未検出と思われる。少なくとも筆者は承知していない。この資料がどのような意味合いを持っているのかについては、今後も検討を進めるべきではあるが、ひとつの考え方として、大陸の文物が少なくとも弥生時代中期の段階において長者屋敷遺跡にもたらされていた事実を示すものと捉えることは可能である。

長者屋敷遺跡出土の漆資料については、間もなく実年代的議論を進めることができるので、更にきめ細かな検討を予定したい。

半截木柱遺構から出土した炭化材の年代と樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

長者屋敷遺跡では、縄文時代の集落跡が検出され、竪穴住居跡、木柱遺構、土杭、配石遺跡等の遺構が確認されている。また、これらの遺構からは、土器や石器などの遺物と共に、柱材など的一部と考えられる炭化材等も出土している。

本報告では、遺構の構築年代に関する資料を得るため、半截木柱遺構（以下木柱と称する）から出土した炭化材の放射性炭素年代測定を行う。また、これらの炭化材の樹種同定を行い、用材選択に関する資料を得る。

1. 試料

試料は、木柱遺構（1～4号）の柱穴内から出土した炭化材である。2号木柱は3点、その他は2点づつある。樹種同定は全ての試料について行い、年代測定は1号木柱と4号木柱の炭化材各2点を遺構毎に合わせて1点づつにしたものと試料とする。

2. 方法

(1) 放射性炭素年代測定

測定は、学習院が医学放射性炭素年代測定室が行った。

(2) 樹種同定

木口（横断面）・粧目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の剖断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3. 結果

測定結果および樹種同定結果を表1に示す。1号木柱の年代測定値は4420y.B.P.、4号木柱の年代測定値は4980y.B.P.であった。また、炭化材の樹種は、いずれも落葉広葉樹で3種類（クリ・エゴノキ属・トネリコ属）に同定された。各種類の解剖学的特徴などを以下に記す。

・クリ (*Castanea crenata Sieb. et Zucc.*) ブナ科クリ属

環孔材で孔圈部は1～4列、孔圈外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

・エゴノキ属 (*Styrax*) エゴノキ科

散孔材で、横断面では梢円形、単独または2～4個が複合して散在し、年輪界付近で管径を減ずる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性II型、1～3細胞幅、1～20細胞高。

・トネリコ属 (*Fraxinus*) モクセイ科

表1 放射性炭素年代測定および樹種同定結果

遺構名	試料番号	試料の質	樹種	年代	Code No.
1号木柱	1	炭化材	クリ	4420 ± 130	GaK-20121
	2	炭化材	クリ		
2号木柱	1	炭化材	クリ	—	—
	2	炭化材	トネリコ属		
	3	炭化材	クリ		
3号木柱	1	炭化材	クリ	—	—
	2	炭化材	エゴノキ属		
4号木柱	1	炭化材	クリ	4980 ± 190	GaK-20122
	2	炭化材	クリ		

1) 年代値は、1950年を基点とした年数で、同位体効果の補正を行った値。

2) 放射性炭素の半減期は、LIBBYの5570年を使用した。

環孔材で孔囲部は1列、孔囲外で急激に管径を減じたのち漸減する。道管壁は厚く、横断面では円形～稍円形、単独または2個が複合、複合部はさらに厚くなる。道管は單穿孔を有し、壁孔は小型で密に交互状に配列する。放射組織は同性、1～3細胞幅、1～40細胞高。

4. 考察

(1) 遺構の構築年代について

炭化材の年代測定値は、1号木柱が4420y.B.P.、4号木柱が4980y.B.P.であった。東北地方では、これまでにも多くの縄文時代の遺跡で放射性炭素年代測定が行われている(キーリ・武藤、1982；株式会社パレオ・ラボ、1994a)。それらの結果と比較すると、4号木柱の結果は縄文時代前期の年代測定値に一致する。また、1号木柱の年代値は、縄文時代前期末～中期初頭に該当する。

日本に生育する樹木は、毎年1本の年輪を形成するが、樹心に近い古い年輪から順次活動を停止する。このような木材を用いて年代測定を行う場合、得られた年代値が伐採年代を示すのは最も外側の年輪のみであり、他は木材組織が活動を停止した年代を示す。そのため、樹心に近い部分で年代測定を行うと、実際の伐採年代との年数だけ誤差が生じることになる(東村、1992)。このような問題は、一般に長寿の木が多い針葉樹ほど生じやすいが、今回の炭化材に確認されたクリは、後述するように縄文時代に栽培されていた可能性もあり、樹齢の問題は測定誤差の中に入ると考えられる。

これらの点や、近接する栗山遺跡の年代測定結果が出土遺物とも調和的であること等を考慮すると、木柱遺構は縄文時代前期～中期にかけて構築・利用された可能性がある。

(2) 用材選択について

柱穴から出土した炭化材は、柱材の一部などが炭化して残存した可能性がある。いずれの遺構でも複数点の試料が採取されている。樹種をみると、全ての遺構でクリが認められるが、2号木柱はトネリコ属、3号木柱はエゴノキ属が各1点認められた。この結果から、クリを中心としながら、トネリコ属やエゴノキ属も

利用されていたことがうかがえる。また、2号木柱と3号木柱については、複数種類認められることから、柱材以外の部材なども混入している可能性がある。

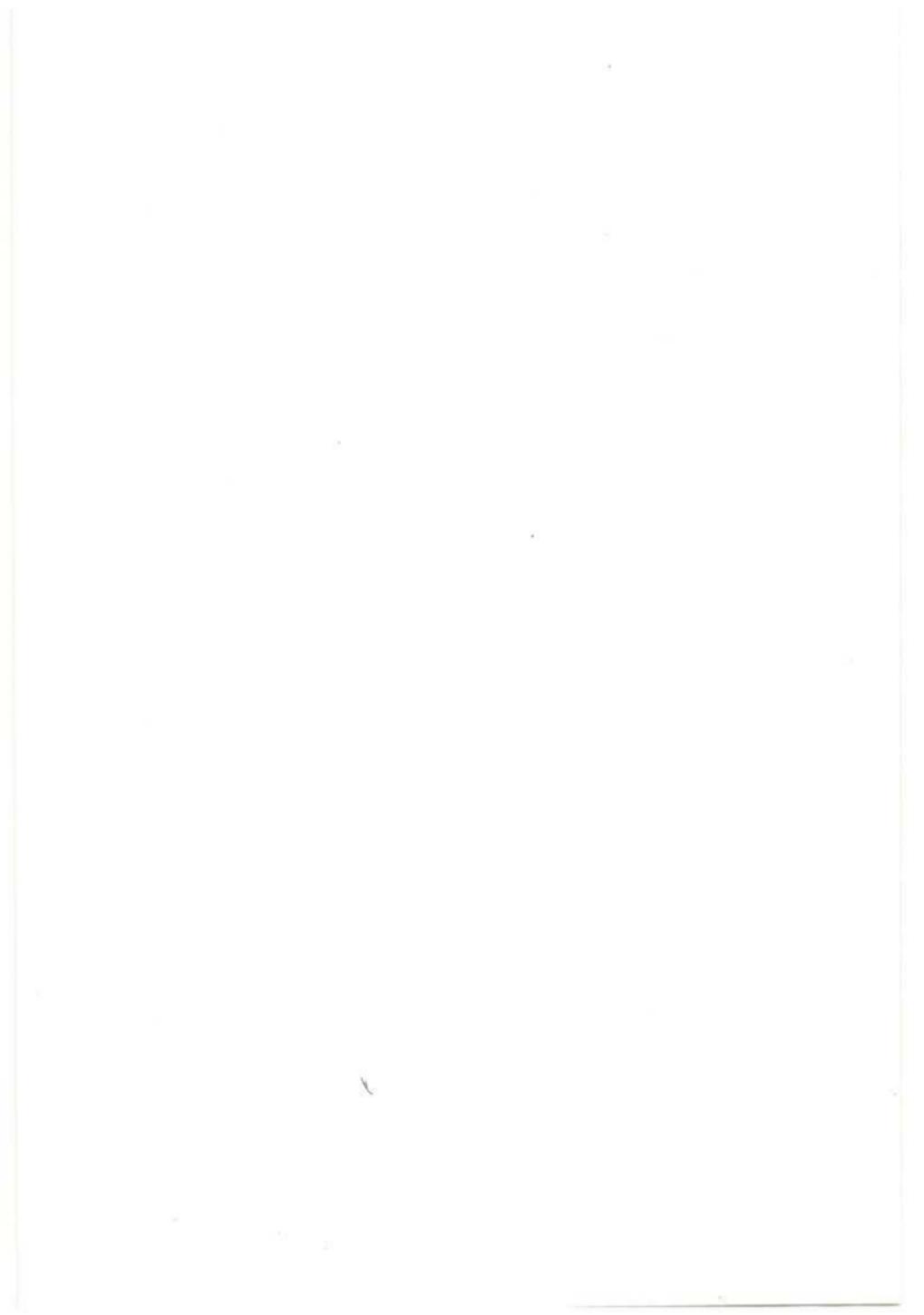
多く確認されたクリは、縄文時代の遺跡から出土した住居構築材などに多数認められている。本遺跡周辺では、栗山遺跡の縄文時代中期の住居跡から出土した住居構築材などに多数認められている。本遺跡周辺では、栗山遺跡の縄文時代中期の住居跡から出土した炭化材が全点クリに同定されており（パリノ・サーヴェイ株式会社、1994）、今回の結果とも調和的である。また、北陸地方などに多く見られる巨木柱列の柱材も、調査されている多くがクリである（古池、1986など）。クリの材は、耐朽性・強度に優れた材質を有しており、構築材として適材である。これらの結果から、本遺跡でもクリが柱材などに多く利用されていたことが推定される。

クリは、食糧としても重要な種類であり、三内丸山遺跡における花粉分析やDNA分析の結果から、縄文時代に栽培が行われていた可能性が指摘されている（辻、1997；佐藤、1997）。現在栽培されているクリは、ほぼ2~4年で結実し、7~8年目が成果期となり、数十年の経済樹齢がある（竹田、1996）。また、用材としてはある程度樹齢を経た老木の方が径も大きく利用価値が高い。これらのことから、クリを栽培することにより食糧を安定して確保する一方で収量の落ちた老木を伐採して用材として利用するような状況が推定されている（千野、1983）。本遺跡でも同様の行為が行われていた可能性があるが、現時点では断定できない。今後さらに資料を蓄積していかないと考えている。

引用文献

- 千野裕道（1983）縄文時代のクリと集落周辺植生－南関東地方を中心に－、東京都埋蔵文化財センター研究論集、II、p.25-42.
- パリノ・サーヴェイ株式会社（1994）栗山遺跡における自然科学分析、山形県埋蔵文化財センター調査報告書第6集「仲台遺跡・栗山遺跡・柳沢A遺跡発掘調査報告書」、p.95-113、財團法人山形県埋蔵文化財センター。
- 株式会社パレオ・ラボ（1994）放射性炭素年代測定結果、山形県埋蔵文化財センター調査報告書第6集「仲台遺跡・栗山遺跡・柳沢A遺跡発掘調査報告書」、p.93-94、財團法人山形県埋蔵文化財センター。
- 佐藤洋一郎（1997）DNA分析によるクリ栽培、岡田康博・NHK青森放送局編「縄文都市を掘る 三内丸山から原日本が見える」、p.63-173、NHK出版。
- 竹田 功（1996）新特産シリーズ クリ 栽培から囲う・充り方まで、189p.、農文協。
- 古池 博（1986）木柱根その他の木材ならびに大型堅果類の植物学的検討、金沢市文化財紀要90「金沢市新保町チカモリ遺跡－第4次発掘調査兼土器編」、p.203-226、金沢市教育委員会・金沢市埋蔵文化財調査委員会・金沢市新保町第一土地区画整理組合。
- 辻 誠一郎（1997）三内丸山を支えた生態系、岡田康博・NHK青森放送局編「縄文都市を掘る 三内丸山から原日本が見える」、p.174-188、NHK出版。
- キーリ C.T.・武藤康弘（1982）縄文時代の年代、加藤晋平・小林達雄・藤本 強編「縄文文化の研究1 縄文人とその環境」、p.246-275、雄山閣。

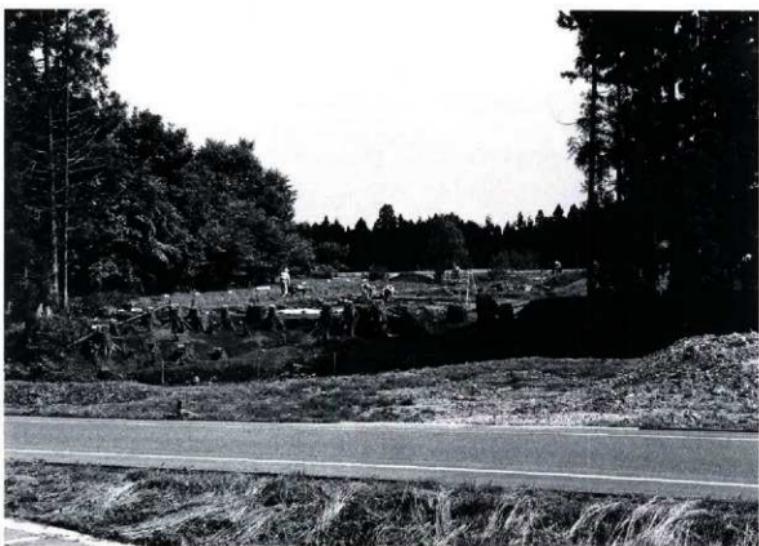
図 版



図版 1



遺跡近景（南西から）



遺跡近景（北から）

図版 2



17号住居跡全景（南西から）



18号住居跡全景（東から）

図版 3



18号住居跡複式炉（北から）



18号住居跡複式炉埋設土器（南から）



19号住居跡全景（北西から）



19号住居跡複式炉（北から）



19号住居跡複式炉埋設土器（東から）

図版 4



20号住居跡西側（北から）



20号住居跡東側（南から）



21号住居跡複式炉（東から）



21号住居跡複式炉埋設土器（西から）



21号住居跡全景（南東から）

図版 5



22号住居跡全景（南から）



22号住居跡複式炉（西から）



22号住居跡複式炉埋設土器（南から）



23号住居跡石爐跡（南から）



1号埋設土器（南から）

図版 6



1号埋設土器（南から）



2号埋設土器（南西から）



3号埋設土器（南西から）



4号埋設土器（南から）

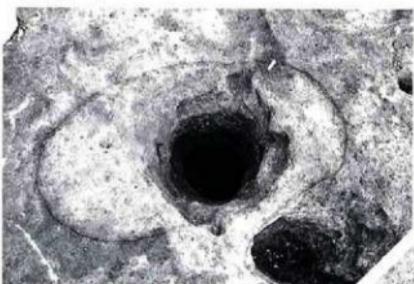


1・2号半截木柱遺構（南から）

図版 7



図版 8



3号半截木柱遺構（北から）



3号半截木柱遺構断ち削り（北から）



4号半截木柱遺構（南東から）



4号半截木柱遺構土層断面（南東から）

図版 9



1～3号土坑検出状況（南から）



1～3号土坑（南から）



4～6号土坑半截（南から）



10号土坑半截（西から）



11・12号土坑（東から）



13号土坑半截（南から）



14号土坑（南東から）



16号土坑（南西から）

図版 10



17号土坑半截（南から）



20・21号土坑半截（東から）



1号集石（南から）



1号集石完掘状況（南から）



2号集石（西から）



3号集石（南から）

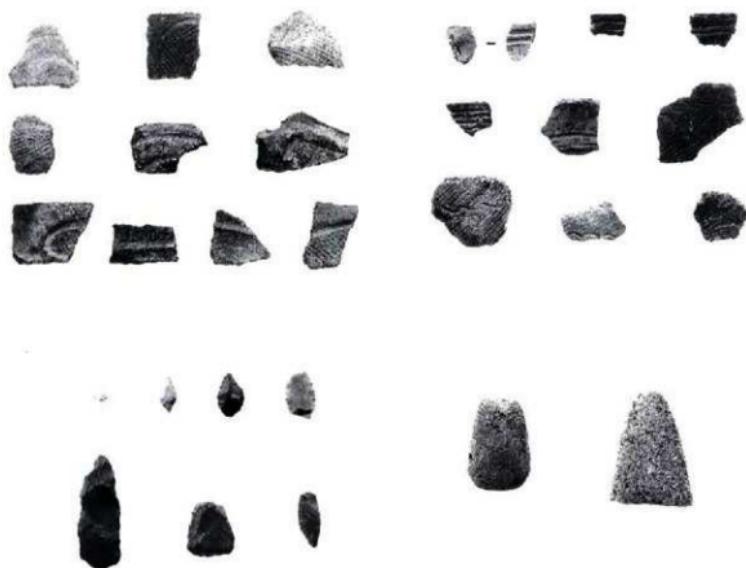


4号集石（南から）



集石④（A～C-7・8グリッド西から）

图 版 11



17号住居跡出土遺物



(伊哩設土器A)

18号住居跡出土遺物

圖版 12



(仰韶文化)



18号住居跡出土遺物

図版 13



(伊埋設土器C)



(伊埋設土器A)

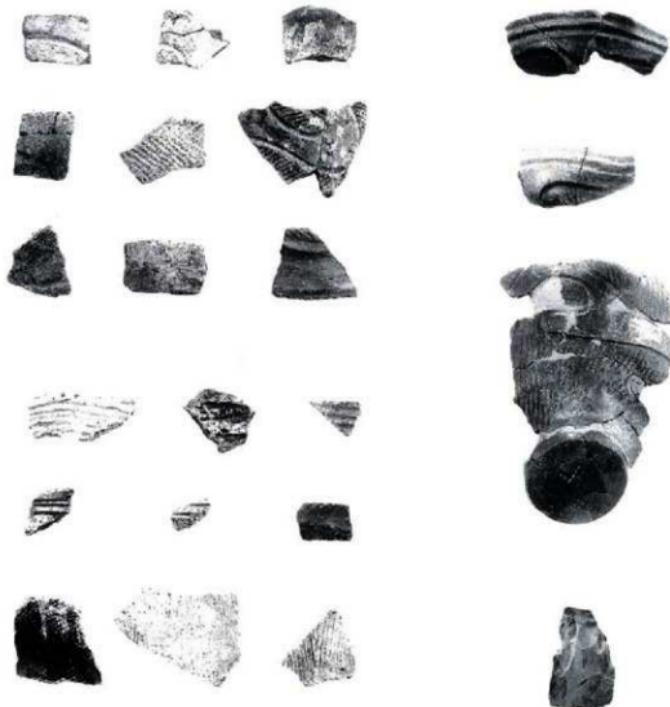


(伊埋設土器B)



19号住居跡出土遺物

图 版 14



20号住居跡出土遺物



(伊理拉土器)

21号住居跡出土遺物

圖版 15



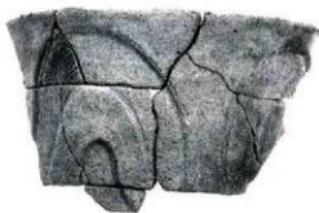
(伊庭設土器C)



(伊庭設土器B)

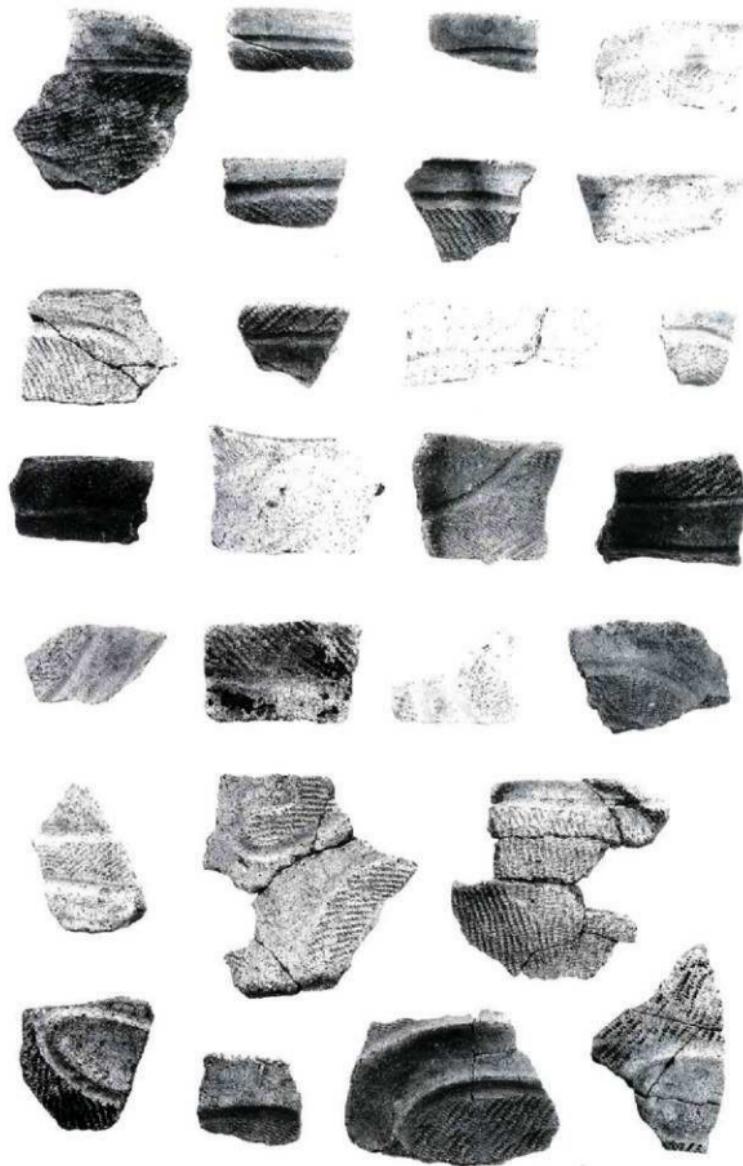


(伊庭設土器A)



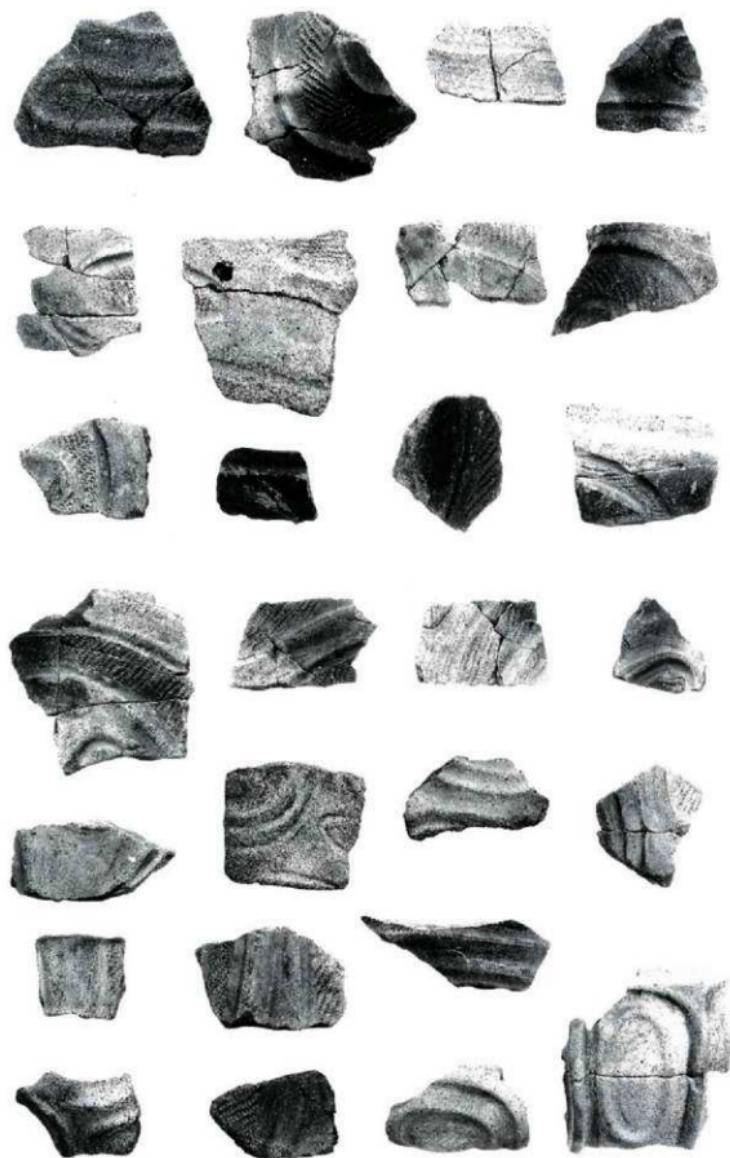
22号住居跡出土遺物(1)

図版 16



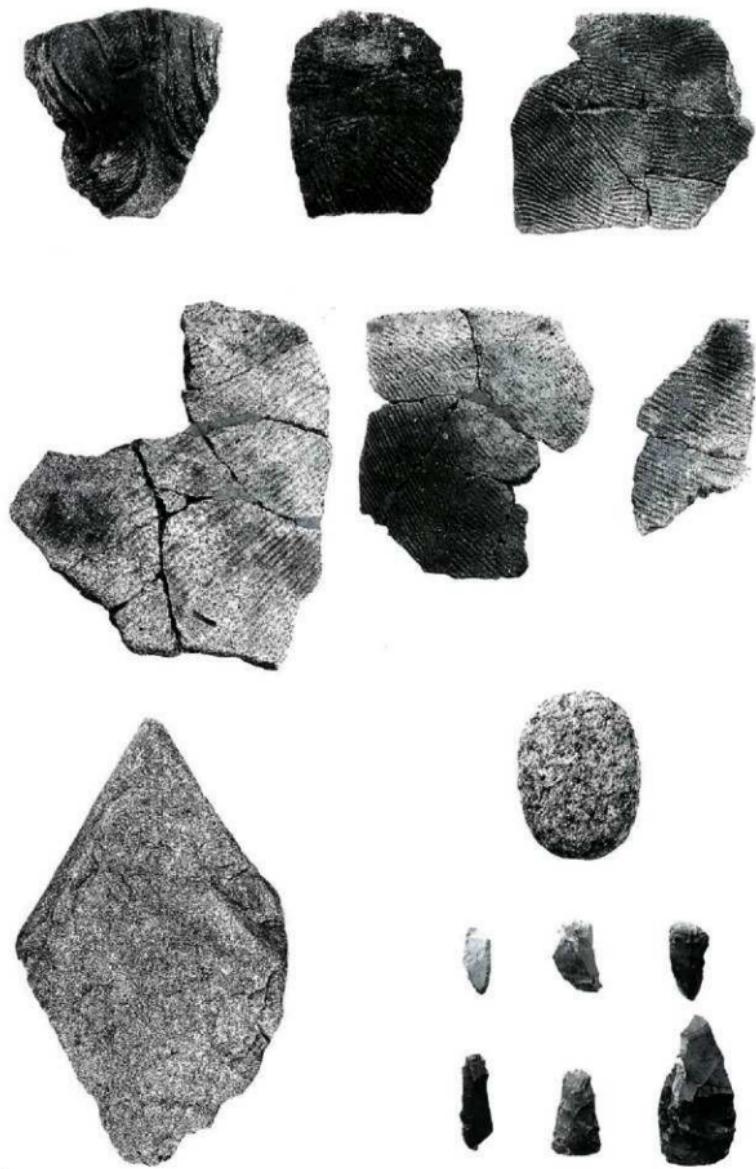
22号住居跡出土遺物②

図版 17



22号住居跡出土遺物(3)

図版 18



22号住居跡出土遺物(4)

圖版 19



1号埋設土器



2号埋設土器



3号埋設土器



4号埋設土器

埋設土器

图 版 20



1号半截木柱遗構



2号半截木柱遗構



3号半截木柱遗構



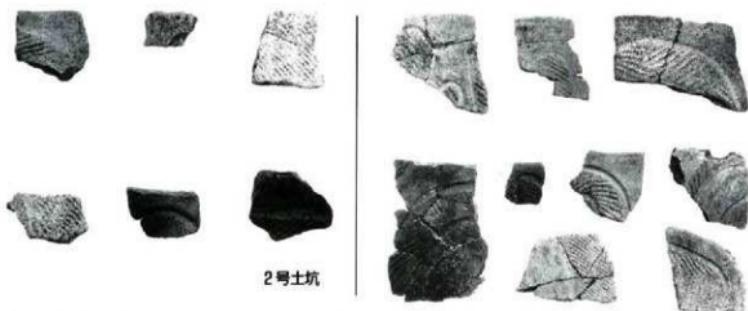
4号半截木柱遗構



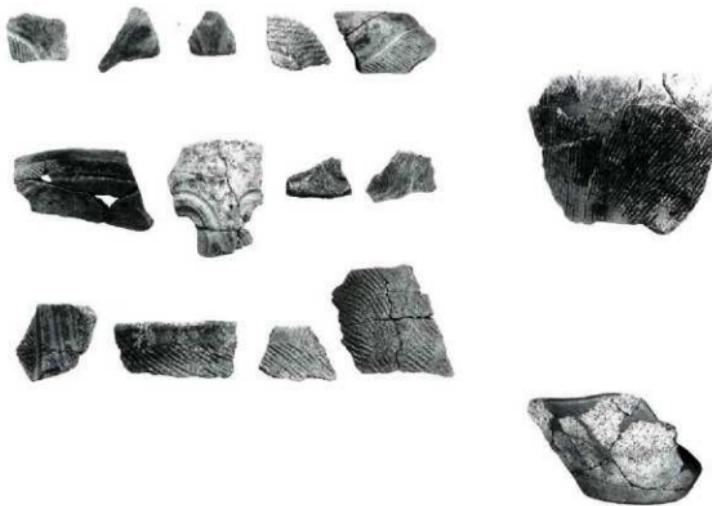
土坑出土遗物(1)

1号土坑

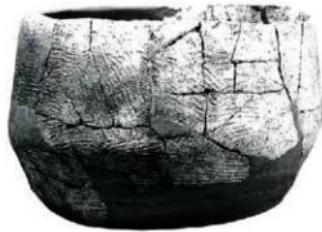
图版 21



2号土坑



3号土坑



土坑出土遗物②

圖 版 22



4号土坑



6号土坑



11号土坑



8号土坑



12号土坑



14号土坑

土坑出土遗物(3)

图 版 23



17号土坑



18号土坑



19号土坑

土坑出土遗物(4)



Pit 16



Pit 20

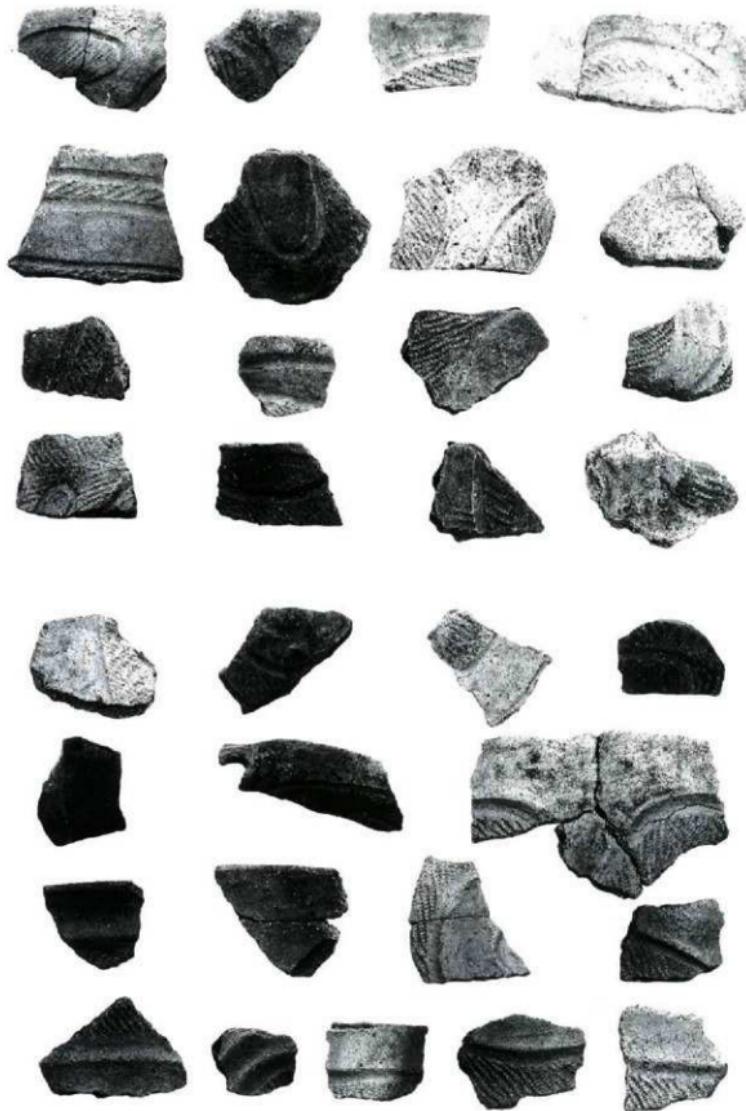


3号集石

1号集石

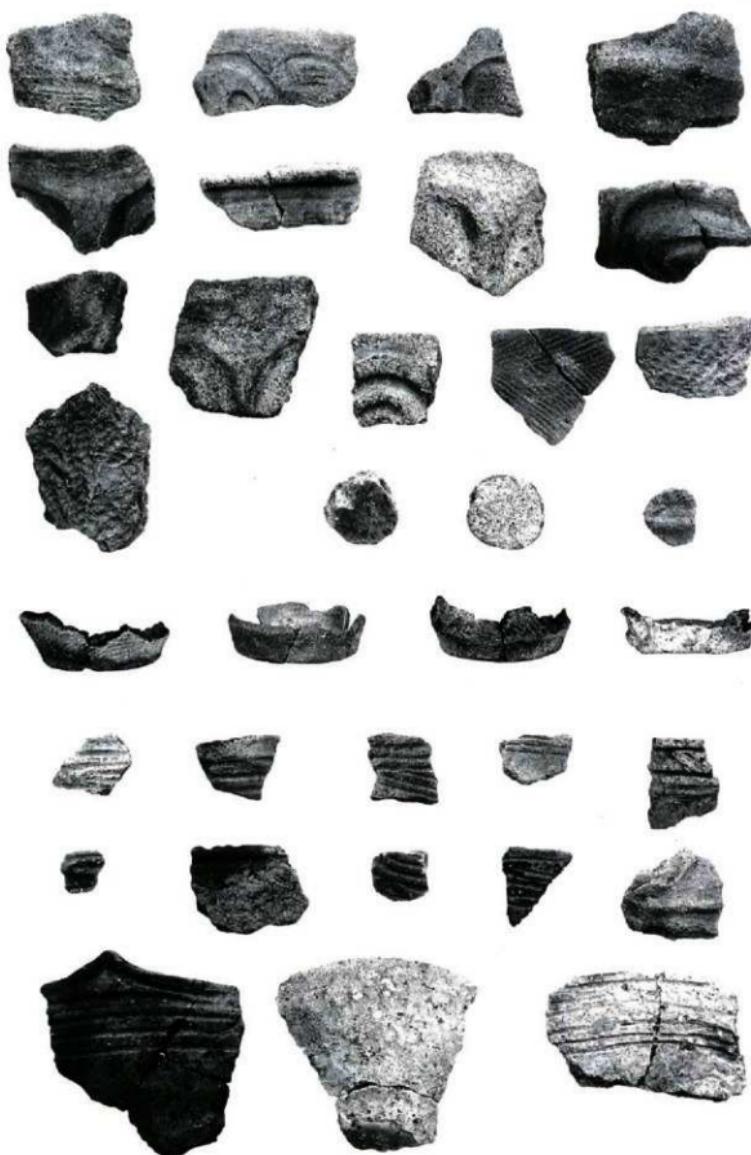
集石出土遗物

圖版 24



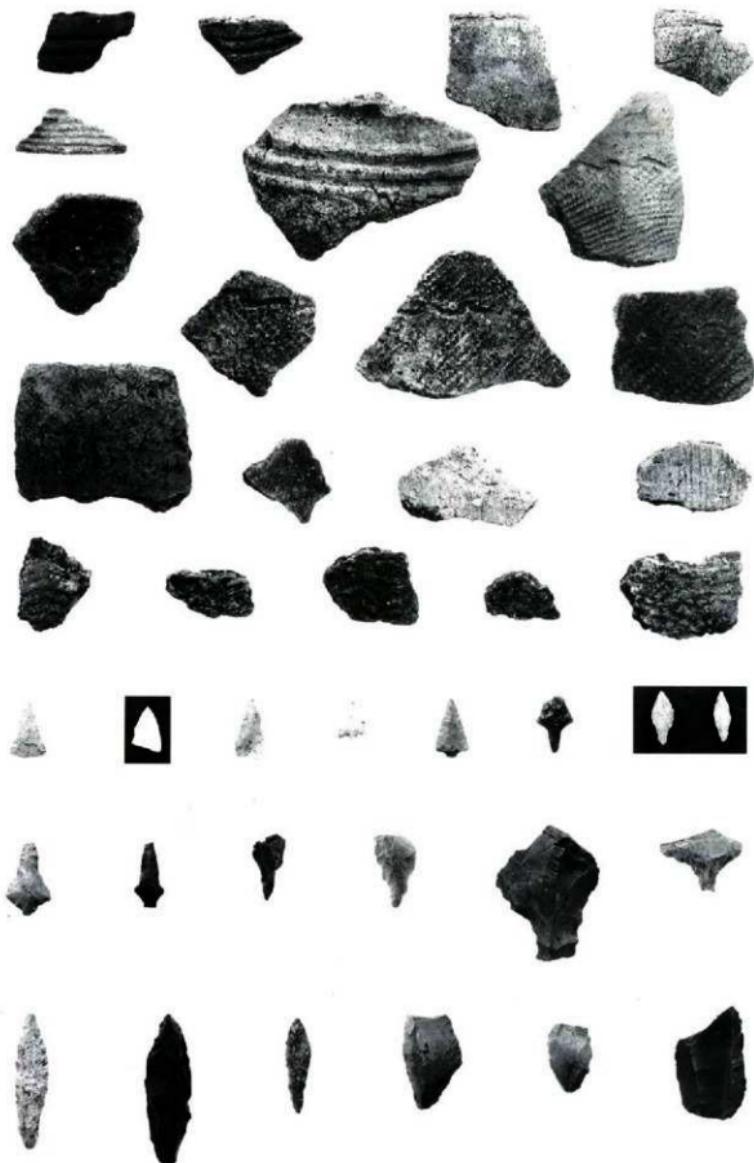
包含層出土遺物(1)

図版 25



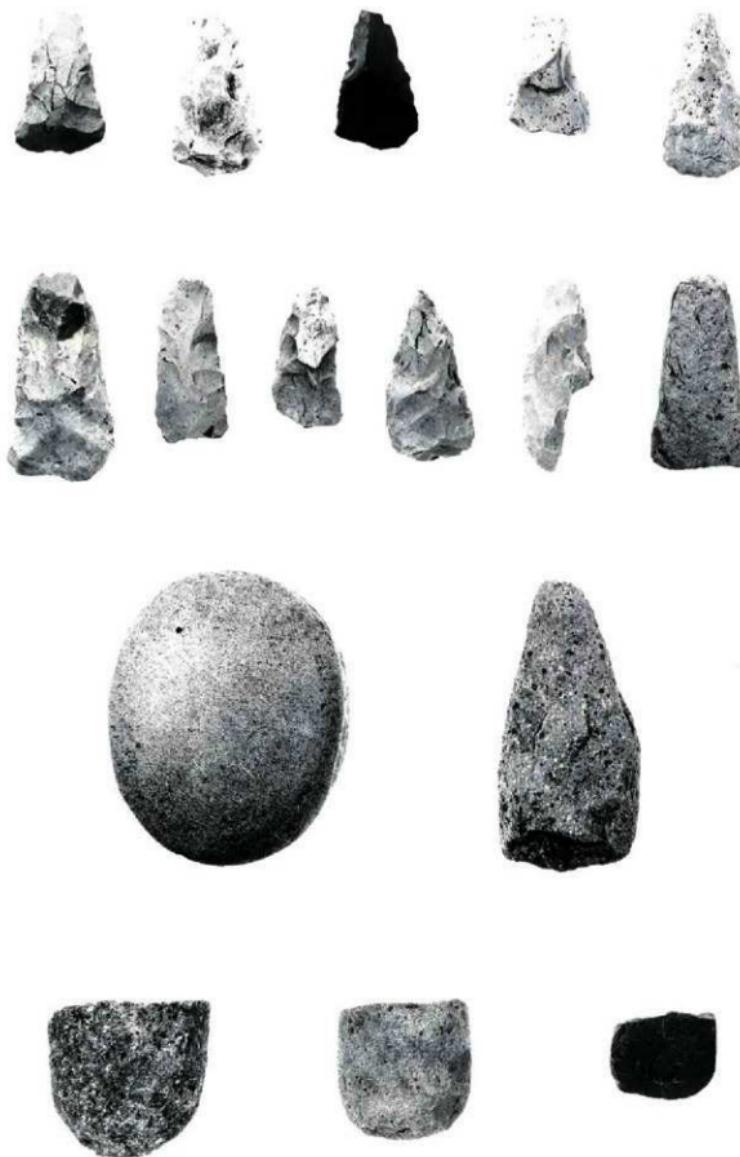
包含層出土遺物(2)

図版 26



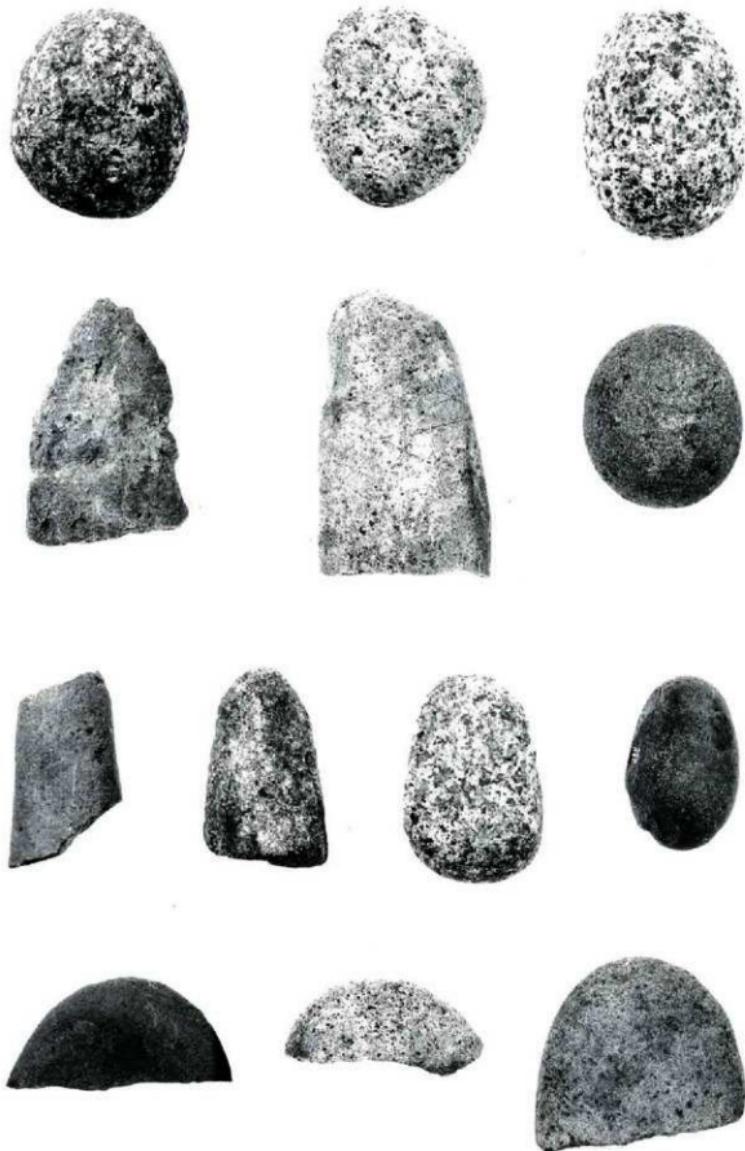
包含層出土遺物(3)

圖版 27

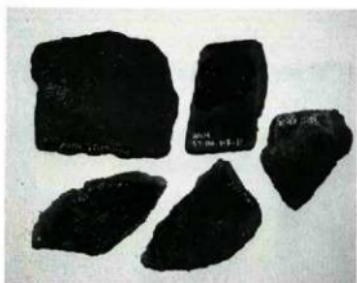


包含層出土遺物4)

図版 28



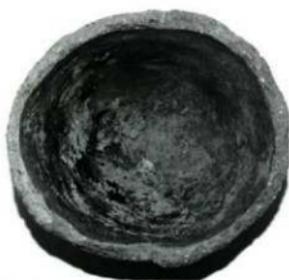
包含層出土遺物(5)



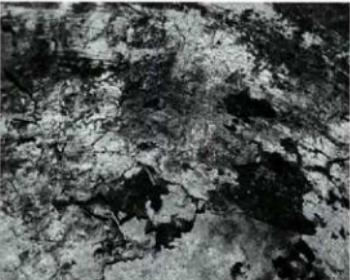
1 縄文中期の漆液容器（土器）片



2 縄文中期の漆液容器（土器下半部）



3 2 の内面



4 同左の漆膜



5 弥生時代の漆塗膜片 表

1×



7 裏面の網目痕

8×



6 同左 裏

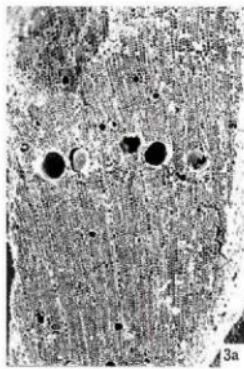
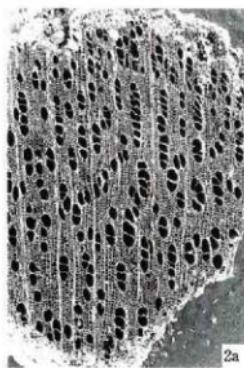
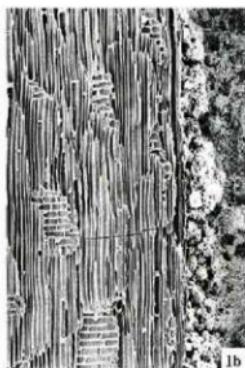
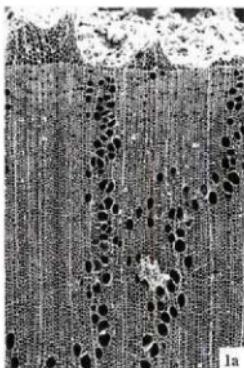
1×



8 同左

66×

図版30 炭化材



1. クリ (3号木柱 No1)
2. エゴノキ属 (3号木柱 No2)
3. トネリコ属 (2号木柱 No2)

a : 木口、b : 柄目、c : 板目

200μm : a
200μm : b, c

報告書抄録

ふりがな	ちょうじややしきいせきはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	長者屋敷遺跡発掘調査報告書							
副書名								
卷次								
シリーズ名	山形県長井市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第18集							
編著者名	岩崎義信							
編集機関	長井市教育委員会							
所在地	〒993-8601 山形県長井市ままの上5番1号 TEL0238-84-2111							
発行年月日	西暦2000年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査要因
		市町村	遺跡番号					
長者屋敷	山形県長井市草岡 字長者屋敷	6209	81	38度 08分 08秒	140度 00分 10秒	1998. 5.10~ 7.13	750m ²	市道改良工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
長者屋敷	集落跡	绳文中期・ 晚期	住居跡、土坑、 半截木柱遺構、 集石等	绳文土器、石器、 石錐、搔器、甕状 石器、磨石、凹石		環状集落の広場の一 角から4本柱の巨木 遺構が確認された。		

長井市埋蔵文化財調査報告書 第18集

長者屋敷遺跡発掘調査報告書

平成12年3月30日印刷

平成12年3月31日発行

発行 遺跡調査会

長井市

長井市教育委員会

印刷 (株)羽陽印刷

